イスラーム世界研究　第8巻（2015年3月）266–358頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 8 (March 2015), pp.266–358

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(8)

守川　知子*　監訳
ペルシア語百科全書研究会**　訳注

（p. 370）　第7部　人間のすばらしさとその性質の驚異について

［第1章　人間の知性と霊魂について］

至高なるお方のお言葉には、「またわれが天使たちに、『あなた方、アーダムにサジダ［跪拝］しなさい』と言った時を思い出せ。その時、皆サジダしたが、イブリースだけは承知せず」［Q2: 34］とあるが、この意味は［ペルシア語では］「われは天使たちに『アーダムに跪拝せよ』と命じた。彼らは跪拝し、誉れ高くなった。イブリースは跪拝しなかったので呪われた」である[1)]。

人間たること（ādamī）のすばらしさについては、そなたが理解するには以上のことで十分であろう。何となれば、跪拝される者は跪拝する者よりもすばらしいのだから。また別の箇所で［神は］「われはアーダムの子孫を重んじて」［Q17: 70］、すなわち、［ペルシア語では］「われはアーダムの子孫を尊重した」とおっしゃっている。直立した姿と、知性（ʻaql）と、識別能力（tamīz）と［物事に］対処する力（čāra-sāzī）ゆえに。

＜逸話＞

次のように言われている。創造主がライオンをお創りになった当初、［ライオンは］飛んでいる鳥たちに出会った。

ライオンは言った。「おまえたちが恐れるものは何か？」

鳥たちは「人間です」と答えた。

「そいつはおまえたち［のところ］にどうやって届くのだ？」

「人間は私たちのところになど届きはしません。しかし、私たちを下に落としてしまうのです。そして鳥籠に閉じこめて、それから私たちを殺して食べてしまいます。」

ライオンは驚いて、人間に会ってみたいと思うようになった。

ある日、ライオンは、たてがみを前に垂らして、額の前髪をなびかせながら走っている馬に出会った。

ライオンは言った。「とても優美でその上速い。もしやあれが人間か。」

馬は言った。「おおライオンよ、人間は私を捕らえ、首に綱をかけ、背に鞍を載せます。そして私は人間の荷を運び、口から泡を吹いてしまうほどに走らされます。私が役立たずになったら、人間は私を殺して食べてしまいます。」

---

*　北海道大学大学院文学研究科准教授
**　京都大学の西南アジア史学研究室の関係者を中心に活動する本研究会については、『イスラーム世界研究』第2巻2号（2009年、198–204頁）の監訳者による「解題」等を参照。現在は主に、杉山雅樹を中心に、塩野崎信也、小倉智史、大津谷馨、小林布由子、角田哲朗、八木啓俊が研究会に参加し、訳注作業にあたっている。

1）神の被造物の中での人間の優越性については、『クルアーン』の中で様々に言われている。たとえばこの章句の前段である雌牛章（2章）30節では、人間は「地上における神の代理人」とされており、サード章（38章）71–85節ではここと同じく「天使は人間に跪拝して仕えるべき存在」とされる。

またある日、ライオンは牛に出会った。

ライオンは言った。「何たる力。もしやおまえが人間か。」

牛は言った。「人間は私を捕らえて、くびきを私の首に繋ぎます。そして私は人間の荷を牽き、固い大地を耕すのです。私が老いたら、(p. 371) 人間は私を殺して食べてしまいます。」

その後、ライオンはラクダに出会った。

ライオンは言った。「もしや堂々たるこいつが人間だろうか。」

ラクダは言った。「私は人間ではありません。私は人間の荷運びです。人間は私の鼻に手綱をかけます。そして私は人間の荷物を運ぶのです。しまいには、人間は私を食べてしまいます。」

またある日、ライオンは山が動いているかのような象に出会った。ライオンは言った。「おまえが人間か？」

象は言った。「いいえ。人間は私を捕らえて私の首に乗り、鉄のかぎ棒を額に打ち込んで脳をえぐります。そして私は重い荷を運び、ついには死んでしまうのです。人間は私の骨を象牙にして、それを材料に作った玉座に座るのです。」

そしてある日、ライオンは弱々しい人間に出会った。

ライオンは言った。「おい、役立たず。おまえは人間を恐れないのか？人間がどんなものか教えてくれ。偉大な動物たちがそいつを恐れているのだ。」

人間は言った。「私が人間だ。」

ライオンは言った。「おまえはこんなに弱々しいではないか。武器もないし、かぎ爪も牙もない。俺はおまえの顔を殴って、あのすべての被造物をおまえから救い出してやろう。」

「ライオンよ、それは無理だな。」

「なぜ無理なのだ？」

「では、私はここから何かでおまえを打とう。おまえはそこから何かで私を打て。」

「俺とおまえの間には距離があるから、近くに来い。俺の前足はおまえに届かない。」

人間は「私の手ならおまえに届くぞ」と言った。

「届かせてみろ。」

人間は石を掴むと投石器に置いて、ライオンの両目の間を打った。ライオンの両目が飛び出た。

ライオンは言った。「ああ人間よ、おまえの才能がよくわかった。動物たちが言っていたことは正しかった。」

それから人間はライオンに近づいて、ライオンの尾を掴んで引いていった。

ライオンは言った。「人間よ、何をするのか。俺の鼻に手綱をかけるのか。それとも鉄を脳に穿つのか。」

「いいや。おまえの皮を剥いで、肉は犬たちにくれてやる。」

「これほどのことをどうやってしているのか。」

「神のお力添えによってだ。こう言われている。『**われはアーダムの子孫を重んじて**』[Q17: 70]。神は、他のどんな被造物にもお与えにならなかった知性と才能と物事に対処する力を我らにお与えになったのだ。」

この逸話の意図は次のようなものである。これは創造主のお恵みによるものであり、人間の才能によるものではない。牛には人間の100倍もの力があるが、人間のすばらしさとは知性にあるのであり、(p. 372) 姿かたちにあるのではない。また人間は陸に対しても海に対しても支配権を持ち、

魚を海から引き上げ、鳥を空から落とし、象を捕らえ、毒蛇の牙を抜いてしまう。風や雷から身を守るために城を築く。敵を打ち破るために武器を作り出す。［そして］万物を制する。対処対応能力や賢明さ、農耕、様々な技芸は、どれひとつをとってもいかなる動物にも為し得ない。［もっとも］これらすべては［人間が］自力で為すのではなく、創造主のお力によって為し得るのである。もし［神が］そう望まれていたならば、これらすべての才能は他の獣に創造されていたであろう。創造主は望まれるなら、最も弱々しい被造物にも何らかの価値を創造される。ちっぽけなハチに対して、六角形の家を作り、蜂蜜をもたらす賢さをお創りになったように。いかなる賢人であっても［ハチが作り出す］あのような家の作り方を知らない。

＜人間と獣たちの相違点＞

知れ。人間と獣たちの相違点とは、姿かたちでもなく、人間がもの言い、笑い、泣く生きものであるということでもない。もしそうならば、愚か者や狂人もそこに含まれてしまう。人間の優れた点とは知性と敬虔さにこそある。［神への］従順さと知性を備えた人間は天使に優り、無知で［神に］逆らう人間は獣に劣る。となれば、人間は天使に優るある種の栄誉を持つということがわかるだろう。なぜなら復活の日に、天使たちは「従順なる者たち」に仕えるからである。**至高なるお方のお言葉に、「各々の門からかれらの許に入って、挨拶するであろう」**［Q13: 23–24］、すなわち、［ペルシア語では］「天使たちは楽園の門から入ってきて、信徒たちに挨拶する」とある。

一部の賢人は、人間を「小宇宙（‘ālam al-ṣaġīr）」と呼ぶ。また、「大宇宙の鎖（salsal al-‘ālam al-kabīr）」と呼ぶ者もいる。なぜなら、世界にあるすべての事物が五感を通じて人間の中に存在するからである。すなわち、ライオンの攻撃力、ラクダの突進力、狼の信用ならず奪い取る性質、キツネの狡猾さ、スズメの小心さ、蟻の収集癖、雄鶏の寛大さ、犬の親しみやすさ、蚕の利口さ、鳩の帰巣能力など。（p. 373）人間はあらゆるものを手で作り、あらゆる声を口から発する。人間には火が生み出す赤さ、大地が生み出す黒さがある。その血は空気に由来し、体液は水に由来する。骨は石の属性を持ち、毛は植物の属性を持つ。そして知性と識別能力は他のものに抜きん出ている。

＜逸話＞

［次のように］言われている。隊商を組んだ商人の一団が荒野で宿営した。冷たい風が吹いていた。傍には茂みがあり、ライオンの声が聞こえていた。隊商の人々は荷を集め、駄獣を中に囲い、夜通し見張って声を上げ続けるよう、見張りを置いた。1 頭のライオンが獲物か獣を捕らえようと隊商に近づいた。さらに盗人が 1 人、こっそりと近寄ってきた。見張りが声を上げ続けていたので、ライオンはおびえていた。盗人は子馬かと思い、いきなりライオンの背に手をかけた。盗人はライオンにまたがり、踵で［ライオンの腹を］打ち、荒野を走らせた。朝になって、［盗人は自分が乗っているのが］ライオンだと気づいた。ライオンはずっとおびえていた。男は［ライオンから］降り、木を見つけて登った。ライオンは疲れ切り、くたくたになって、脇腹の痛みを抱えながら［ふらふらと］去っていった。

するとサルが現れ、言った。「ライオンよ、どこから来たのだ？」

ライオンは言った。「戻るがよい。おまえが見張りに見つかってしまわぬように。そして、奴が私の腹を蹴ったように、おまえの腹も蹴らぬように。」

「見張りとやらに、ライオンの前に現れる肝っ玉があるのか？そいつを私に見せてくれ。どうにかして屈服させてやろう。」

「奴はあの木の上にいる。奴に手を出すなと私は言っておくぞ。」

サルはそれを聞かず、木に登って枝に座り、男を見つめながら隙をうかがっていた。男は枝を手に取ってその先に輪を作り、サルの睾丸に引っ掛けて引き寄せた。そして、サルの２つの睾丸をしっかりと縛り、木に結びつけた。男は別の枝を手にしてサルの背や腹を打ち続けたので、サルは泣いた。［男は］サルの睾丸をよりきつく締め付けていった。サルは叫び続け、ついに（p. 374）木から逆さに落ち、睾丸でつり下げられてしまった。血が口から流れ出た。

サルが下に落ちたとき、ライオンは言った。「不運な奴よ、私の忠告を聞かなかったからだ。自分の相手を弁えろとあれほど言ったのに。奴は私の腹を蹴り、私を走らせたのだ。どうしておまえに従うものか。」

サルは言った。「ライオンよ、私は人間を遠くから見たのだ。奴の体つきは弱々しそうだった。奴の能力については知らなかったのだ。」

この話の意図は、人間はどの生きものよりも優れており、あらゆるものに知恵と分別で勝利する、ということである。たとえば象を水から引き出し、ライオンを茂みから捕らえ、どちらも鎖で縛りつける。ワシを空から落とし、その風切り羽根を引き抜いて矢を作り、それでワシやハゲタカの命を奪うほどである。

＜逸話＞

知れ。ワシは敏捷で獰猛な鳥である。恐ろしい声を持ち、恐るべき突進力を持ち、騎手を馬の背から落としてしまうほどである。私はマーザンダラーン出身の人がこう言うのを聞いた。「ある地方から羊の群れが移動していた。群れには犬がいた。ワシが山に巣を作り、［たびたび］羊を攫っていた。犬が吠え、羊飼いたちはワシに石を投げつけ、矢を放ってワシを追い払った。するとワシは戻って来て犬を攫い、空中に持ち上げた。犬は吠え続けた。ワシは、スズメほどの大きさに見える高さまで犬を持ち上げ、それから犬を放した。犬は山の上に落ち、死んだ。」

このワシを人間は捕まえる。それを捕まえる方法は次のとおりである。死肉を放っておき、その近くの穴に３人の男が隠れる。ワシが［肉に］とまると、１人がワシの足を掴み、もう１人が彼の胴体を抱えてしっかり支え、もう１人がワシの羽を掴み、束ねてむしる。羽根をむしられると、ワシは飛べなくなる。

至高至大の創造主は、すべての被造物を従え屈服させる権能を人間にお与えになった。そして、人間を屈服させるために「死」をお定めになったのである。

（p. 375）＜西方のアンカー鳥（‘anqā-yi maġrib）の話＞

次のように言われている。アンカー鳥[2)]は巨大で獰猛な鳥である。

アンカー鳥はスライマーン——彼に平安あれ——に従おうとはしなかった。動物たちはみなアンカー鳥を苦々しく思うようになり、アンカー鳥をスライマーンのもとに連れて行った。［アンカー

2）　アラブの伝承に登場する不死鳥に類似した鳥。イスラーム成立後は、ペルシアの霊鳥スィーモルグやインドのガルーダと同一視されるようになった［EI^2: ‘Anḳā’］。この逸話の最後尾で「アンカー」が「スィーモルグ」に置き換わっているのはこのためである。

鳥は］ライオン、象、馬、ラクダ、牛、羊など様々な動物がスライマーンの御前におり、みなが［スライマーンという］人間に従っているのを見た。また、人間の食べ物が様々な動物の肉や果物、穀物であること、人間の着物が綿、毛皮、絹、麻、キツネやリスやテンなどの毛皮であることを見た。［アンカー鳥は］驚き、戻って、その輝きが 1 ファルサング先にも届くような宝石を持ってきてスライマーン——**彼に平安あれ**——の前に置き、彼に向かって言った。「創造主に、私を人間にするように頼んでくれ。」

スライマーンにはそれは無理だとわかっていたが、「それは私が頼んでみよう。創造主はなされることにおいて全能であられる」と言って、アンカー鳥を落胆させはしなかった。

ある日、［アンカー鳥は］スライマーンと連れ立ち、剣や武器、矢、投げ槍を作っている鍛冶屋を見た。

［アンカー鳥は］言った。「これは何か？」

［スライマーンは］答えた。「これは殺しの道具だ。これで人間が互いに殺し合うのだ。」

その後、外科医の店の門前に至り、吸い玉や鉤、鉗子、鋏を見た。

［アンカー鳥は］言った。「これは何か？」

［スライマーンは］答えた。「人間は、これで歯を抜いたり、疥癬を切り開いたり、血管を刺したりするのだ。」

それから病院に通りかかり、病人たちを見た。何人かは横になり、何人かは座っていた。ある者は腹痛に苦しみ、ある者は癲癇に、ある者は熱病に、ある者は黄疸や顔面麻痺、錯乱、麻痺等々に苦しんでいた。

［アンカー鳥は］言った。「これは何か？」

［スライマーンは］答えた。「70 種類もの様々な病が人間にはあるのだ。この建物にやってきて、苦しみ耐えているが、治るときもあれば、死ぬときもある。」

アンカー鳥はこれを見ると、行って先のものと同じくらいの宝石を持ってきてスライマーンに渡し、こう言った。「神の使徒よ、私は例の頼みを［神に］しないように乞い願う。私は人間にはなりたくない。」

この逸話の意図は次のとおりである。人間はすばらしいとはいえ、多くの苦しみや辛苦を負っている。鳥は、癲癇も、頭痛も、眼病[3]も、黄疸も味わうことなく生涯を過ごす。（p. 376）その後スィーモルグは許可を乞うて去り、再び人間と会うことはなくカーフの山[4]の向こう側へ行ってしまった。

人間のすばらしさは、体（šaḫs）や力、姿ではなく、知性によるのだと理解されたであろう。では、知性のすばらしさに関する一節を述べよう。

＜知性のすばらしさについて＞

至高なるお方のお言葉には、「あなたがたの授かった知識は微少に過ぎない」［Q17: 85］**とある。**知れ。知性（ʻaql）はあらゆる存在物の中で最もすばらしい。

次のように言われている。霊魂（jān）は知性の乗り物である。知性は、様々なものを包み込む遍

3）テキストでは SBRZ だが、mā 写本に従い sabal と読む。

4）イランの伝説・伝承に見られるカーフの山については既出［本訳注（2）『イスラーム世界研究』第 3 巻 1 号、2009 年、412 頁、注 27; 本訳注（4）『イスラーム世界研究』第 4 巻 1–2 号、2011 年、517 頁］。

き光のようなものである。[知性は] 創造主が最初にお創りになったものであり、時間や空間よりも前である。というのも、時間は天の運動を算出することで [はじめて] 生じるものだからである。それゆえ、諸天よりも前に創造されたものは何であれ、時間の中で創造されたのではない。

知性はものごとを識別しようとするとき、感覚 (五感) へ向かう。知性は感覚を通じて知識を求め、悪と善を感覚で見分ける。というのも、知性は、鏡に映るものを実体ではないと理解するからである。太陽は目には盃ほどにしか見えないが、知性は、それがもっと大きく、太陽が地球の 160 倍余りの大きさであり、陸海を一瞬で暖めるということを理解する。知性は、盃ほどの大きさのものがこれらすべてを暖めることはできないと知っている。さらに、地面を測量する人は [大地の] 大きさを知っている。たとえその全貌が彼の前にないとしても。知性で理解されるものが知性を害することはないが、感覚で感じ取れるものは感覚を害することがある。視力を損なうほどの明るい光や、聴力を損なうほどの大きな音や、味覚を麻痺させるほどの辛く熱い食事のように。しかし、知性で捉えられるものは知性を損なわない。何かを入れた容器は狭くなるが、知性は反対により広くなる。

(p. 377) [想像力について]

知れ。「想像力 (quwwa-yi muḫayyila)」は決して損なわれない。「運動力 (quwwa-yi muḥarrika) の器官」のように疲弊してしまう器官に備わっているものではないからである。というのも、想像力とは「精神的霊魂 (rūḥ-i nafsānī)」であり、それは前脳の内部にある。一方、運動力の器官とは「四肢」のことである。霊魂は疲弊しないが、器官は疲弊する。ちょうど [馬に] 乗り続けている乗り手のように、たとえ乗り手が疲労しないにせよ、馬は疲労する。だが想像力は毎日毎晩はたらき続けている。目覚めているときも眠っているときも。

＜霊魂 (al-arwāḥ) の分類＞

知れ。魂 (jān)[5] はいくつかの面で捉えられている。「自然的霊魂 (rūḥ-i ṭabī‘ī)」は肝臓の中にあり、静脈を伝っている。「動物的霊魂 (rūḥ-i ḥaywānī)」は心臓の中にあり、動脈を伝う。「精神的霊魂」は脳の中にあり、神経を伝い、目に達すると視力を与える。耳に達すると聴力を与える。手に達すると握力を与える。また別の霊魂もある。それは「感覚霊魂 (rūḥ al-ḥassāsa)」と呼ばれる。そこに木々と動物の違いがある。というのも、木々には感覚がないが、動物には感覚があるからである。もうひとつの霊魂は「運動霊魂 (rūḥ al-muḥarrika)」と呼ばれる。またひとつは「知性ある言葉を語る霊魂 (rūḥ al-nāṭiqa al-‘aqlīya)」と呼ばれる。これは人間特有のものである。

人間には成長し、感じ、言葉を語り、運動する霊魂 (nafs) がすべてある。これらすべての力のいずれにも想像力ほどの力はない。いずれの力も倦み疲れるが、「想像力的霊魂 (rūḥ-i muḫayyila)」は疲弊することはない。目は [視界に] 入ったものを見る。[視界から] 離れると捉えられない。運動力はすべての力を一度に使うことはできない。思考力はあらゆることを一度に考えることはできない。記憶力はあらゆる物事を一度に憶えることはできない。しかし、想像力は、過去のものごと

5) アラビア語の rūḥ とペルシア語の jān は、ここでは等しく「霊魂」や「魂」など「霊的な実体」を指す語として用いられている。本訳注ではおおむね、rūḥ を「霊魂」、jān を「魂」と訳している。本書においては、以下に展開される説明にあるように、「霊魂とは何か」という根源的な問いに答えることはなく、様々な見解が示されているにすぎない。主に、アリストテレスやジャービル、イブン・スィーナーが典拠と思われるが、以下に見られる脳、心臓、肝臓のそれぞれに、身体を統御する霊魂の存在を認める考え方や、それらの働きに関する見解は、プラトンやアリストテレスの議論を踏襲し発展させたガレノスによる説を下敷きにしたものであろう [二宮陸雄『ガレノス　霊魂の解剖学』平河出版社、1993 年、326、422–423、426–427 頁]。

を蘇らせることができる。さまざまなイメージをつくりだすことができる。そして望むならば、ある人を象ほどの大きさにすることも、スズメほどの小ささにすることも、たくさんの頭を持ったものにすることもできる。あるいは、一部は木で、一部は鳥であるような動物を［イメージすることもできる］。また、［想像力は］未だかつて起こったことがなく、今後も起こりそうにない事象を描きだす。（p. 378）人が天に到達するとか、星が大地に向かってくるというように。［想像力は］自由自在に操ることができる。このような力を至高至大なる創造主は想像力の中にお創りになっている。

＜霊魂（rūḥ）について＞

知れ。世界中のありとあらゆる驚異の中で「魂（jān）」以上に不思議なものはない。霊魂について何かを語る人でさえ、それが何であるかを理解できてはいない。

至高なるアッラーのいわく、「かれらは聖霊（al-rūḥ）に就いてあなたに問うであろう。言ってやるがいい。『聖霊は主の命令によ（って来）る。（人びとよ）あなたがたの授かった知識は微少に過ぎない』」［Q17: 85］。［この句の］意味は次のとおりである。もし人々があなたに「ムハンマドよ、霊魂とは何なのか」と尋ねたら次のように言いなさい。「［それは］創造主のご命令［によるもの］である。あなたがたはそれについての知識をもたない。わずかなこと以外は」と。

ある者は、この「わずかなこと」でさえ［人間には］わからないもので、至高なる造物主の思し召しだと言う。また、「［人間に］わかるものだ」という人々もおり、彼らはそれを「肉体を制御するもの（māsik al-ajsām）」と呼んでいる。

霊魂は石の中には宿らない。魂は幽質（laṭīf）であり、石は稠密（kaṯīf）という対立した性質ゆえである[6]。必然的に、魂が［その中に宿って］石を動かすことはない。

ある者は、魂とは湿質の中に宿る力であり、肉などの中に「生あるもの（ḥayawānāt）」が生まれるのは湿質によるのだと言う。ある者は、魂とは熱質と湿質を御するもので、この両者のいずれもが成長の要因であると言う。ある者は、魂とは血の中に宿るもので、死者からは血以外には何もなくならないのがその証拠だと言う。魂とは熱であると言う人々もいる。死者の中に血は残るが、熱は失われるからである。

ある者は言う。魂とは天界からの閃光であり、心臓につながっている。心臓は霊魂の源であり、家の中にある灯火が部屋の隅々や天井を明るくするように、［霊魂を］四肢に送っている。心臓は魂を体中に行き渡らせると、［魂は］放散されて体外へ出て行く。そしてもう一度入ってくる。人がたくさん動き回り、自分の体を使い続け消耗すると、その霊魂はより多く放散され、弱ってしまう。そこで人は休息し眠らなければならない。そうすれば魂の力は回復し、減少していたものが元に戻る。寿命が尽きるまで。

（p. 379）＜体内での霊魂の働きについて＞

知れ。肉体の中での魂は、［体中を］巡って行き渡るという働きをする。それ自身で自存しており、各部位の中でそれぞれ別個にあるのではない。もしそうであったなら、部位を切断したところでその部位は生き続けてしまう。

それぞれの民は、霊魂を［固有の］名で呼んでいる。ある者は「言語能力（quwwa-yi nāṭiqa）」と呼び、ゾロアスター教徒やマギたちは「最も近い監督者（mudabbir al-aqrab）」と呼んでいる。ギリ

6）霊魂の laṭīf 性や、laṭīf（繊細）と kaṯīf（粗雑）という対立概念に関しては、以下の研究も参照［石田友梨「スーフィズムにおけるラターイフ（laṭā'if）論の再定義」『イスラーム世界研究』第4巻1–2号（2011）、386–397頁］。

シア人たちは「神の溢出(fayḍ-i ilāhī)」、シリア人たちは「アッラーの言葉(kalima Allāh)」あるいは「聖なる霊(rūḥ al-quds)」と呼んでいる。アラブ人は「芳しく静謐なる霊魂(arwāḥ ṭayyiba wa sakīna)」と呼び、アジャム人は「神の援助(ta'yīd-i ilāhī)」と呼ぶ。アリストテレスは「能動知性(‘aql-i fa‘‘āl)」と呼ぶ。つまるところ、それを創造されたのは栄光ある主である。それが何であるかは、そのお方がよりご存じである。霊魂が多い人ほど優れている。その力とよく結びついている人ほど聡明である。預言者――彼に平安あれ――は、「己自身を知る者は、神を知る」とおっしゃった。また眠っている間でも、その魂の力が目覚めている人と同じくらいの人もいる。

＜逸話＞

ある人が語った。「私は、ムゥタディドの軍中において、天幕の中で眠っていた。誰かが私に『起きろ、毒蛇がおまえを狙っているぞ』と言った。目を覚ますと毒蛇が見えたが、その距離は1アラシュほどしかなかった。私は逃げた。」

ガレノスの横隔膜と肝臓との間に腫瘍ができた。彼はその治療に難儀した。「薬指と小指の間に刺絡せよ」という夢を見た。彼は起きて刺絡を行った。その腫瘍は治った。

私はある夜、夢を見た。ある人が白黒の縞模様の外套を縫っていた。［その外套に］マチを付けねばならず、他の布から切れ端を取ってマチを付けた。次の日、(p. 380) 私はその外套を着た人に出くわした。私は彼をまじまじと見た。

彼は私に言った。「どうしてじっと見ているのだ？」

私は言った。「このマチは［外套と同じ］布によるものではない。」

「そうだ。昨日私はこの外套を縫ったが、［布が］足りなかった。このマチは別の布から縫い付けたのだ。」

＜逸話＞

ムゥタミル・ブン・スライマーン(Mu‘tamir b. Sulaymān)[7]は言う。「私は、3人と連れ立って旅をしていた。1人が眠っていると、ランプの灯火のようなものがその眠っている人の鼻から出てきて、竪穴の中に入っていった。しばらくした後、それは戻ってきて彼の鼻の中に入っていった。男は目覚め、『アッラーに讃えあれ』と唱えていた。私は『どうしたのだ？』と尋ねた。彼は言った。『私はこの洞窟の中に財宝があるのを見た』と。」

ムゥタミルは続けて言う。「私たちはその竪穴に行ってみた。その底から球型の石が引き上げられた。［その石の］周囲には黄金の輪がはめられていた。」

ムゥタミルは言う。「私の父が言ったのだが、魂は糸車のようなものであり、それから糸が紡ぎ出されるが、糸車からは離れない。」

要するに、魂の働きは大変驚くべきものであるということである。それについては、別の箇所で述べよう。

---

7) タイム族出身を示すal-Taymīのニスバを持つ。802/3年バスラにて死去［Ibn Sa‘d Muḥammad, *al-Ṭabaqāt al-kubrā*, Ed. M. ‘Abd al-Qādir ‘Aṭā’, Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, Beirut, 1990, vol. 7, p. 213］。多くのハディースの伝承者として知られ、ブハーリーの『真正集』にも名前が挙がる［ブハーリー『ハディース』、月経の書: 24他］。

＜霊魂のありかについて＞

知れ。霊魂については、その場所はどこか、その中心は何かということが語られてきた。**預言者――彼に平安あれ――は、「霊魂は集められた軍隊のようなもので、互いに知り合っている者同士は仲良くするが、知らない者同士は仲が悪い」**[8] **とおっしゃっている。**すなわち［ペルシア語では］、霊魂は軍隊のようなものである。各々が互いに知り合っていると親しくなり、お互いを知らないと双方が反目する。**また預言者――彼に平安あれ――いわく、「霊魂はラッパの中に来る。復活の日になるとアッラーは雨を遣わし、復活の日、肉体が**［地面から］**生えてくる。そして**［イスラーフィールが］**ラッパを吹き鳴らすと、霊魂は肉体に戻り、**［人々は］**立ちあがって**［周りを］**見る」**と。すなわち、(p. 381)「霊魂はラッパの中に集まる。そして復活のとき、創造主が雨をお遣わしになり、［その雨が］被造物の肉体を生やす。ラッパを吹くと、霊魂が外に出て、自身の体の中に入る」とおっしゃった。

次のように言われている。惨めな魂はハドラマウトに送られる。［そこには］バラフート[9] と呼ばれる穴があり、その底を見た人はいない。アスマイーは、「ハドラマウトの人が言うには、バラフートからひどい悪臭が漂うときはいつも、ひどい圧制者が死んだとわかる」と言っている。イブン・ウヤイナ (Ibn ʻUyayna)[10] は、「ある人が夜、その地（バラフート）で眠っていると、恐ろしい叫び声が聞こえ、そこから逃げ出した」と述べる。アブー・アル＝ムンズィル (Abū al-Munḏir) によると、「ある妊婦がそこにやって来た。そこで『ドゥーマよ、ドゥーマよ』という叫び声を聞いて、恐怖で赤子を流産した。」

ある者は、霊魂の場所は天の中心にあって、止まっていると言う。そこから生きている者たちに対して［霊魂が］補填される。［霊魂が］生きている者たちから離れると、「霊魂団 (qurṣ-i arwāḥ)」に加わる。これは、「**霊魂は集められた軍隊である**」という［預言者の］言葉により近い。

トゥファイル・ブン・アムル・アル＝ダウスィー (Ṭufayr b. ʻAmr al-Dawsī)[11] は、ヤマーマでの聖戦に赴いた。彼は次のような夢を見た。彼の頭は剃り上げられ、口から 1 羽の鳥が飛び出した。女が彼を陰門の中に捕らえた。彼の息子は彼を追いかけようとした。彼はこの夢を解釈してこう言った。「頭を剃るのは死である。鳥は魂である。私を陰門で捕らえる女とは墓である。私の息子にも同じことが起こるだろう」と。その後、トゥファイルはヤマーマで殉教者となった。彼の息子のウマルは傷を負い、ヤルムーク (al-Yarmūk)[12] の戦場で殉教者となった。

8) ブハーリーやムスリム・ブン・ハッジャージュなどが伝えるハディースに見られる［ブハーリー『ハディース』、預言者達: 2］。

9) ハドラマウトの「バラフート」に不信心者の魂が集まることについては既出［本訳注 (5)『イスラーム世界研究』第 5 巻 1–2 号、2012 年、405 頁］。

10) テキストは Ibn ʻNYNH だが、巻末の訂正表に従う。伝承学者として有名な Sufyān b. ʻUyayna al-Hilālī (811 年没) のことか。彼はクーファ出身で若くしてメッカに移住し、7000 以上ものハディースを伝えたとされる［*EI*^{2}: Sufyān b. ʻUyayna］。

11) 校訂本では al-Awsī となっているが、トゥファイルには通常「ダウス族出身」を表すニスバが付されるため、訂正した。彼はメッカを訪れた際ムハンマドの言葉に感銘を受けてイスラームに改宗し、自身の一族にもイスラームの教えを説き、後に改宗した者たちを引き連れてムハンマドに付き従った。リッダ (離反) の際にはナジュド平定に活躍したが、ヤマーマの戦いで戦死した。なお、本書で描かれる夢の逸話と同様のものが『預言者ムハンマド伝』に見える［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 16, pp. 460–461；イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註 (後藤明他訳)『預言者ムハンマド伝』岩波書店、2010 年、第 1 巻 394–399 頁］。

12) ヤルムークの戦いとは、636 年にアラブ・ムスリム軍がビザンツ帝国を破った戦いのこと［「ヤルムークの戦い」『岩波イスラーム辞典』］。

ある人がイブン・スィーリーン[13)]に言った。「［夢で］私は天から１羽の鳥が降りてきて、大地からジャスミンを持ち去るのを見た」と。イブン・スィーリーンは真っ青になり、「**それは学識者たちの死のことだ**」と言った。３日後、イブン・スィーリーンとハサン・バスリーがこの世から去った。

＜霊魂の荘厳さとその影響について＞

知れ。世界中のいかなるものも、魂が有するほどの荘厳さを備えていない。(p. 382）創造主は、それを驚くべきものとして創造された。人間から蟻に到るまで、［魂が］肉体に入ると、それは生きたものとなる。肉体が魂とともにある限りは、［肉体は］飾られ美しく、そして動く。魂がそこから離れると、肉体は悪臭を放ち、変わり果ててしまう。たとえ王であろうとも、［死体となったら］誰もが彼から逃げ出す。

知れ。魂は肉体から離れても、腐敗することはない。創造主は、魂を［ものを］知覚するものとしてお創りになった。［魂は］触れることなしに物事を認識し、理解する。また、霊魂の動きや働きは、一瞬でヒンドゥスターンに到達したり、肉体から分離することなしに天に昇るほどである[14)]。肉体が滅んだ後に魂が残り、［肉体からの］分離後も［魂が］物事を知る、というのもあり得ないことではない。もしそうでなければ、行いがその本体よりも高尚だということになってしまう。行いが本体よりも高尚などということはあり得ない。なぜならば、行いは行為者から生じるからである。

さらに言うならば、人は死ぬと、知識においてより申し分のないものとなる。母親の腹から生まれた子供が、母親の腹の中にいるときよりも申し分ないものであり、卵からかえった鳥が、卵の中にいるときよりも申し分ないものであるのと同じである。子供は、生まれて現世という空間にやって来たときに、泣く。母親の腹が世界のすべてと思ってのことだが、その後は、世界は母親の腹よりも広いということを知り、この世界の中で安らぎを得る。［人は］死に際して、来世よりも現世の方が良いと思って泣く。だが死ぬと、来世の隣にある現世が、この世界の隣にある母親の腹のようなものであったと知るのである。

魂のすばらしさについては、この程度で十分であろう。創造主は、「**おお、安心、大悟している魂よ、あなたの主に帰れ**」［Q89: 27–28］とおっしゃっている。結局のところ、その帰る場所は造物主なのである。

この後は、霊魂の源である心臓 (dil) の驚異に言及しよう。

［第２章　人間の諸器官について］

＜霊魂の源であるところの心臓 (qalb) について＞

知れ。人間の心臓は誉れある器官であり、確固たる支配者である。

「幽質 (laṭīf)」とは、すなわち（p. 383）「変化しやすい (sarīʻ al-inqilāb)」である。［心は］悪しき

13）初期のムスリムで、夢解釈で有名な学者。本書では、月と昴星の夢から自らの死を予言する話が見られる［本訳注(2)、430 頁］。後出のハサン・バスリーは、「最初のスーフィー」とも称えられる学者［本訳注(1)、217 頁、注 30］。

14）風を操り、一朝一夕で遠路を旅したスライマーンや、ムハンマドのミゥラージュ (昇天の旅) を指すのであろう。

言葉や示唆によって苦しみ、優しい（laṭīf）言葉によって復調する。どのようなものであれ、その中に何か置かれると、必ず隙間がなくなる。しかし心は、その中に置かれるものが多いほど、より広くなる。預言者――彼に平安あれ――は、「おお、人の心を変えさせるお方よ、私の心はあなたの信仰の上に定まりました」と言っていたものである。

心臓は、ちっぽけな器官である。鳥に与え食べさせたとしても、［鳥は］満腹にはならない。柔らかい肉の一片にすぎない。だが創造主は、心臓に、創造主を知覚できるだけの力をお与えになった。記憶力や賢明さなど、心臓に付随するものについては誰も描写することはできない。

［賢明さについて］

知れ。賢明さと知識には違いがある。心臓は脳（damāġ）と協力して理解する。心臓は他のものよりも明敏である。

［逸話］

知れ。選ばれし者たるアリー（‘Alī-yi Murtaḍā）は賢明さによって知られていた。［あるとき］１人の女と１人の男が彼のところにやってきた。女は、「この男は、私に求婚しました。彼は、偉大で栄光ある神に対して、またモスクの四隅に対して証言しました」と訴えた。

アリーは言った。「女よ。行って、その証人を連れて参れ。もし［証人が］いなければ、モスクの四隅から土を持ってきなさい。」

女は出かけていき、一刻が経った。アリーは、「時間がかかっておるな」と言った。

男が言った。「おお、信徒の長よ、あそこは随分と離れています。」

アリーは言った。「もしおまえがその場所に行ったことがないならば、遠いか近いか、どうしてわかるのか？」

男は観念して、自分が［かつて］約束したとおりに、改めて婚姻契約をした。

＜逸話＞

次のように言われている。公正なるヌーシラヴァーンがボゾルグメフルに対して怒り、彼を盲目にした。その後、ある言語で書かれた１枚の碑が見つかったが、誰もその言葉を知らなかった。ヌーシラヴァーンは、「ボゾルグメフルはあらゆる言語や文字を知っている。もし、盲目でなかったら、これを読んだであろうに」と言った。それから［ヌーシラヴァーンは］彼を呼んだ。すると、彼（ボゾルグメフル）は風呂場に入り、「そこに書かれている図柄や形を氷で私の背中に描きなさい」と言った。それらが彼の背中に氷で描かれた。彼は、氷の冷たさと風呂場の熱によって、それらの文字が何であるかを理解した。そして、その内容を伝えた。

（p. 384）＜逸話＞

イヤース・ブン・ムアーウィヤ（Iyās b. Mu‘āwiya）[15] は、巡礼の際に犬の鳴き声を聞いた。彼は、「この犬は檻の中にいる」と言った。再び［犬が］鳴き声をあげると、彼は「この犬は自由である」と言った。実際に見てみると、そのとおりであった。「どのようにして知ったのか」と尋ねられると、彼はこう答えた。「最初、犬の鳴き声は１つの方向から聞こえてきた。２度目は、遠くからも

15）北アラブ部族のムダル族の長（739/740 年没）。鋭い洞察力で知られ、文学作品などで様々な逸話が語られている［*EI*^{2}: Iyās b. Mu‘āwiya］。

近くからも聞こえてきた。［そのため］私は犬が放たれたことを知ったのだ。」

［逸話］

また、次のように言われている。1人のアラブ人がアブー・アル＝ハサン（Abū al-Ḥasan）の客として招かれた。鳥が1羽焼かれた。アブー・アル＝ハサンはこう伝える。

［宴席には］私（アブー・アル＝ハサン）がいて、2人の息子、2人の娘、私の妻、そして彼がいた。私はアラブ人に「あなたが取り分けてくれ」と言った。アラブ人は、「**頭部は御当主に**」と言って、私に頭をくれた。［さらに］「**2枚の翼は2人の息子に**」と言って、2つの手羽を息子たちに与えた。そして、尻を老妻に与え、脚を娘たちに与え、胸と背中とは［自分で］一度に食べてしまった。

次の日も私は彼を客として招き、5羽の鳥を彼に渡して、「奇数になるよう取り分けてくれ」と言った。彼は鳥を受け取り、言った。「**あなたと、あなたの妻と、1羽の鳥。あなたの2人の娘と、1羽の鳥。あなたの2人の息子と、1羽の鳥。そして、私と2羽の鳥。**」

［さらに］次の日、私は5羽の鳥を焼いて、「偶数になるよう取り分けてくれ」と言った。彼は、「あなたと2人の息子と1羽の鳥で4。妻と2人の娘と1羽の鳥で4。私と3羽の鳥で4」と言った。

私たちはその荒野のアラブ人（ベドウィン）の抜け目なさに驚くばかりであった。

賢人の1人が次のように言っている。

私が母から生まれたとき、暗闇の中に入って行き、その後明るみにやって来たかのように感じた。私は、母に「あれは何だったのか」と尋ねた。すると、「おまえを産んだとき、［おまえを］盥の下に置いてから仕事に出かけ、その後戻って来て、おまえを盥の下から取り出したのだよ」と言った。

これらの話は、賢明さは［人によって］様々であることを示している。［一方］記憶力は、ある者が別の者よりも優れている、ということもある。

私は、自分の母親から次のように聞いた。私が割礼を受けたとき、私は赤子であった。人々は（p. 385）「まだ［生後］1ヶ月にもならない。幼すぎる」と非難していた。私は覚えているのだが、1人の老人が入ってきて、真鍮製の薬瓶を置き、さぐり針を手にした。他のことはまったく覚えていない。そして、いまだに私の心の中には薬瓶に対する恐怖がある。

［逸話］

ハッジャージュ・ブン・ユースフについて、次のように言われている。彼は自身の領地において大いに圧制を行った。寿命が尽きるとき、彼は、敵対者たちが彼［の遺体］を燃やしてしまうのではないか、と不安になった。そこで1人の男奴隷（グラーム）を呼んで、彼に言った。「私は現世から旅立とうとしている。おまえを私の代理にしようと思う。私をしかじかの場所に埋葬せよ。だが私の墓は秘密にし、誰にも知られぬようにせよ。おまえはしかじかの箱を持ち出し、賜衣を着て、私の玉座に就け。」

［男奴隷は］承諾した。ハッジャージュは人々を呼び、「私のこの外套とターバンを身につけた者こそが私の後継者である」と遺言した。人々は承認した。

［ハッジャージュは］家に帰ると、2匹の蛇を吊るし、［1匹は］逆さに、1匹は頭を上にした。2

匹の蛇からは数日かけて毒が滴った。毒をくだんの服にこすりつけ、その服をくだんの箱の中に入れた。

ついに、臨終の日が訪れた。男奴隷を呼び、彼に託して、「夜になったら、人に知られぬように私を埋葬せよ。翌日、その服を着て、わが地位に就け。私の墓については誰にも教えるでないぞ」と言った。［ハッジャージュが］死に、埋葬を済ませると、［男奴隷は］戻って来て賜衣を着た。毒が彼に効き、その日のうちに死んでしまった。ハッジャージュの墓がどこにあり、彼がどこに埋葬されたのかは誰も知らなかった。これも彼の賢明さの1つであった。

知れ。人間のうちで最初に創造された器官は、心臓と脳である。なぜならば、［心臓は］熱の源であり、脳は感覚と運動の源だからである。意志や諸神経の成長は脳から生まれる。人間は神経を通じて動く。精液が子宮に入ると、まず3つの部分が生じる。1つ目は心臓、2つ目は肝臓、3つ目は脳である。肝臓が最初に創造される、と言う者もいる。なぜなら、栄養と精液の基礎がそこにあり、木々でいうところの根にあたるからである。しかしながら、心臓が最初に［創造される］という説の方がふさわしい。脳がその上にあり、(p. 386) 肝臓がその下にあり、心臓は真ん中にあるためである。3つの天がその上にあり、3つの天がその下にある太陽のごときである。体の器官はいずれも病気になるが、心臓はならない。というのも、心臓は痛みへの耐性を持たず、もし心臓に何かあれば、ただちに死んでしまうからである。

さて、心臓と肝臓と脳はすべての動物に存在する。しかし、知性という特性は人間にのみ備わる。［とはいえ］万人にあるわけではない。**「心あるものへの［教訓がある］」［Q50: 37］という至高なるお方のお言葉にあるように**。心臓はロバにも犬にも備わっている。ゆえに、心臓こそが知性である、というのは正されるべきである。

＜様々な力 (al-quwan) について＞

知れ。［体内の］「力 (quwwa)」は数多い。［たとえば］統御力 (quwwa-yi mudabbira)、想像力 (muḫayyila)、成長力 (murabbīya)［などである］。統御力には3種類ある。動物的力 (quwwa-yi ḥayawānī)、霊魂的力 (nafsānī)、自然的力 (ṭabīʻī) である。「動物的力」は心臓にあり、熱質かつ乾質である。それは心臓から出て動脈の中を巡る。この運動［の源］は常に心臓にある。「霊魂的力」は脳にあり、やはり熱質かつ乾質である。それは神経に繋がっており、神経を通して感覚や運動が生じる。3番目の力は「自然的力」であり、その源は肝臓である。これもまた乾質かつ熱質である。静脈[16]を通して全身に行き渡る。さて、「霊魂的力」は3種類である。［それらは］言語的なもの (nāṭiqa)、感覚的なもの (ḥassāsa)、運動を導き出すもの (mutaḥarrika) である。これらはすべて脳から発する。言語的な力は3種類である。第1は想像で、脳の前部にある。2番目は思考で、脳の中部にある。3番目は記憶で、脳の後部にある。また、「自然的力」は3種類である。［それらは］発生 (muwallida)、栄養吸収 (ġāḏīya)、成長である。発生力は［体を］生み出す。栄養吸収力は［体を］養う。成長力は体の中で40歳まで増加し、その後止まり、次いで減少する。やがて［体は］弱っていき、生まれたて［の水準］と同じになる。

＜感覚 (al-ḥawāss) について＞

知れ。「感覚」の源は神経である。なぜなら、神経が断たれると、感覚と運動が失われてしまう

16）テキストは bi-awrād-hā であるが、サーデギー校訂本に従い、bi-wurud-hā と改めた。

からである。神経の源は心臓にあるが、大多数の人々は、神経の源は脳にあり、神経は心臓に繋がっているとする[17]。神経は細いが、脳に (p. 387) 繋がっている先端部分は強靭である。[このことは] 脳が神経の源であるということを証明している。[心臓と脳は] 支配的器官である。どちらも１つずつしかなく、たくさんあると欠陥が生じる。というのも、適切な行動は１つの判断から生じるのであり、もし心臓が２つ、あるいは脳が２つあったら混乱するであろう。

肝臓があるから成長と生育が生じ、心臓があるから内的熱 (ḥarārat-i aṣlī) が生じる。脳があるから運動や感覚が生じるのである。至高至大なる創造主はそれぞれに機能を与え、すべてに相反するものをお創りになった。

[外的感覚と内的感覚]

知れ。感覚には２種類ある。外的感覚と内的感覚である。外的感覚の中で最も優れているのは視覚であり、次いで聴覚、嗅覚、味覚、触覚である。土の性質が勝っている部分、たとえば爪や髪や骨には感覚はない。内的感覚は、表象 (muṣawwira)、発展 (nāmīya)[18]、想起 (ḏikr)、空想 (wahm) である。

まず視覚について述べていこう。

＜目 (al-ʻayn) について＞

創造主は、目を妙なる英知で創造された。ある人々は、目から光線が生じ、その光線でものや物体が捉えられるのだと言う。だが、全世界を見ることができるほどの光が目の中にあるというのはあり得ない。また一部の者たちは、目から発した光線が太陽の光線に繋がり、[ものが] 捉えられるのだと言う。ある者は、瞳は鏡のようであり、その中に映像を映すのだと言う。魂に繋がる光があり、魂はそれを捉えているのだとも言われている[19]。遠いものほど小さく見えるが、それは、鏡であるこの体液 [からなる瞳] が丸いからである[20]。[瞳の] 球面は中心と等距離にあり、[対象が] 遠くなると、その対象に応じて小さくなっていく。ものの姿はその中に投影される[21]。

創造主は目を合成物とし、黒い部分と白い部分をお創りになった。黒と白はすべての色の両端に位置する。それゆえ [目は] あらゆる色を受け入れる。蝋が印章を受け入れるようなものである。そして戻って心臓に伝える。目は光の場所であるため、夜には何ら見えない。太陽が昇るか、太陽の代わりとなる灯火が得られるまでは [何も見ることができない]。なぜなら、[夜の] 空気は黒いからである。繊細で [染まりやすい] 空気が太陽の光を受け入れると、目は [ものを] 捉えることができる。

---

17) 神経が脳に発し、一部が心臓に繋がっているという見解はガレノスによる [ガレノス著、内山勝利、木原志乃訳『ヒッポクラテスとプラトンの学説 I』京都大学学術出版会、2005 年、9–10 頁]。

18)「成長力」で使われることの多いこの語がここにあるのは不自然であり、錯誤の可能性がある。

19) 視覚の仕組みについては、いくつかの説があった。ユークリッドの理論を継承したキンディー (866 年頃没) の説は、視覚は目から発される光線によるというものであった。一方、フナイン・ブン・イスハーク (873 年没) は、視覚の仕組みに関する説を大きく３つに分類している。１つ目は物体が視覚に達する物質を発しているというもの、２つ目は視覚情報を伝達する物質が目から発されるというもの、３つ目は視覚情報を仲介する第３の物質が存在しているというものである。フナインは第３の説を支持し、仲介物質が空気中に存在するとしている。フナインの説はラーズィー (925 年頃没) らによって継承された。イブン・スィーナー (1037 年没) はこれらの説をまとめて批判し、目を鏡にたとえている [David C. Lindberg, *Theories of Vision from al-Kindi to Kepler*, The University of Chicago Press, 1976, pp. 30–32, 37–39, 41, 44–52]。

20) イスラーム医学においては眼科学が発達しており、眼球の中心部の成分が体液であることが知られていた [Lindberg, *Theories of Vision*, pp. 33–35]。

21) この理解を図式化したものが、Lindberg, *Theories of Vision*, p. 50 に見える。

明々白々なこととして、（p. 388）創造主こそがこの 1 粒の滴（眼球）をお創りになり、この光をその中に置かれたのである。［神は］黒目をお創りになったが、それは、光は黒さの中でより良く映え、灯火や月は夜にこそ、より美しいからである。［神は］黒い瞳を白きもの（白目）の中に置かれ、そしてそこに覆いをお創りになり、2 つに分けられた。その 2 つの覆いが常に上と下からそれを包み込み、瞳に光沢を与えるように。2 つの覆いの先には、塵を防ぐために、黒い毛の列（まつ毛）を団扇のように創造された。まつ毛は決して白くならない。白くなると目が損なわれる。

＜邪視（al-'ayn al-sū'）＞

知れ。邪視（čašm-i bad）[22] については多くのことが語られている。アラブにある人物がおり、アリーと呼ばれていた。不信心者たちは、預言者を視線で害するよう彼に頼んだ。彼は出かけて行き、預言者を視線で害した。預言者――**彼に平安あれ**――は気を失ったが、創造主がそのお方を邪視からお守りになった。

知れ。邪視はたとえるなら、微少で伝染する毒のようなものである。それは目から発し、人には見えず、殴ったり叩いたりすることなく人に達してその人物を殺す。イブン・アッバース[23] は言っている。「食事をするときは、犬や猫から遠ざかりなさい。さもなくば何かくれてやりなさい。**なぜなら、犬には悪しき魂があるからだ**」と。また、月経中の女性が乳に近づくと、乳は変質して腐り、蒸気が立ち上る。そしてその乳の中に納まるが、人には見えない。

＜逸話＞

アラブに 1 人の男がいた。彼は石の手水鉢のそばを通りかかり、「**神よ、**［こんなものは］**これまで見たことがない**」と言った。その手水鉢は 2 つに割れた。それは鉄で繋ぎ合わされた。次の日、彼はまたそのそばを通り、「**何と、これは壊れていない**」と言った。すなわち［ペルシア語では］、「この手水鉢には何ら害が及んでいなかった」と。すぐにその手水鉢は 4 つに割れた。我らの預言者――**彼に平安あれ**――はこれに関して言った。「**目はラクダを鍋に入れ、人を墓に入れる**」と[24]。（p. 389）すなわち、「邪視はラクダを鍋に入れ、人を墓に入れる」とおっしゃった。

＜逸話＞

アラブに邪視の男がいた。彼は壁の向こう側の小便の音を聞き、「えらく乳を絞っているな」と言った。人々は、「小便しているのはあんたの息子だぞ」と言った。彼は「〔**わが息子よ**〕、二度と小便をするな」と言った。すると、言葉のとおりに息子の尿道はふさがり、死んでしまった。

＜逸話＞

アスマイー[25] は言う。「私は、人々に忌み嫌われている人を見た。彼は邪視であった。私は彼に、『［邪視とは］どんなものか？』と尋ねた。彼は、『［私の］目から熱が出てくるのが見えます。それが当たると誰でも死ぬのです』と言った。」

22）中東を中心に幅広い地域で流布している民間信仰の 1 つ。邪悪な目を持つ人間に凝視された対象は、死や病気など様々な災いに見舞われるというもの。イスラーム圏においては、人間の妬みの有害性について書かれた『クルアーン』の章句（第 113 章 5 節）が邪視存在の根拠とされている［「邪視」『岩波イスラーム辞典』］。

23）本訳注（5）、436 頁、注 374 参照。

24）マムルーク朝末期のエジプトの学者スユーティー（Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī, 1505 年没）がほぼ同じハディースを記録している［al-Suyūṭī, *al-Jāmi' al-ṣaġīr*, Dār al-Kutub al-'Ilmīya, Beirut, 1990, p. 354］。

25）本訳注（5）、413 頁、注 257 参照。

別の［邪視の］男は、牛の乳を絞っている音を聞き、「この牛は誰のものか？」と尋ねた。［聞かれた］男は怖くなり、「誰それのものだ」と［別人の名を］答えた。すると、2人とも死んでしまった。

この節はこのくらいで十分であろう。邪視はたとえるなら、触れることなく殺す竜の息のようなものである。これは霊魂の力による。視覚は、露わになった霊魂の一部である。骨の一部が露わになっている歯のようなものである。

＜聴覚 (ḥāssa-yi sam‘)＞

創造主は、聴覚［をつかさどる器官である耳］を驚くべきものとして創造された。外にあるのは軟骨であり、中はねじれ、曲がりくねっている。［耳は］空気の波打ちから様々な音を受け取る。物体が物体とぶつかると、空気がその2つの間で振動し、音が発生する。［それが］耳の中にある神経に知らされる。

聴覚は多大な恩恵である。なぜなら、盲は聾よりましだからである。世界で聴力ほど心や魂に愛されるものはない。美しい声や、オルガンが奏でられるのを聞くと、どれほどの影響が心に生じることか。(p. 390) 揺りかごの中の子供がむずかり、眠りも落ち着きもせず、乳を含まないとしても、母親が優しく歌い、リズムにあった旋律で穏やかな声を出すと、子供は［それを］聞いて安らぐ。また、ラクダが歩き続け、腹が減り、喉が渇き、疲れ切って足取りが重くなると、ラクダ追いは調子のあった旋律で詩を吟じる。ラクダは［それを］聞くと心が力づけられ、疲れが取れ、道行きの辛さを忘れて歩み出すのである。

＜逸話＞

次のように言われている。クバードとカエサルの両者が和解した[26)]。カエサルは贈り物を送ろうと思い、クバードに言った。「何がお望みか？」

［クバードは］「心によく、魂を養うものを」と答えた。

カエサルは1人の娘が描かれた金色の肖像画を彼に送った。クバードは「これをどうしたものか」と言い、軽蔑の眼差しを向けて放っておいた。［しかし］夜になると、決まった時間にその絵から歌声が聞こえ、それを耳にした者はみな眠りにつくのだった。また朝になると［再び絵から］歌声が届き、耳にした者は快活になるのだった。

クバードはこの絵をいかなる宝物よりも大切にした。

知れ。オルガンはルームの地で作られた。驚くべき技術であり、美しい音色を備え、あらゆる抑揚や調子に乗せられる。［その音を］それまで耳にしたことがない者が聞くと、死んでしまうと言われている。それを聞きたいと思う者は、しばらく耳を塞いだ後、少しずつ開いていき、慣らしながら聞くのである。

知れ。オルガンやウードや竪琴の音は聖法 (シャリーア) では許されていない。しかし、感覚に心地よいものについては、違法とされるべきではない。私は次のように聞いた。象は捕獲されると、

26) クバードはサーサーン朝皇帝クバード1世のことであり［本訳注 (4)、513 頁、注 164］、ここでのカエサルは、クバードが侵攻した6世紀初頭当時のビザンツ帝国皇帝アナスタシウス1世 (在位 491–518 年) のことであろう。

草を食べず、暴れて落ち着かず、痩せてしまう。そこで楽士が連れてこられ、象の前で演奏すると、象の気分は鎮まり、落ち着きを取り戻して草を食べる。また、黒いライオンは気性が激しく、捕獲することが難しい。［そこで］楽士が呼ばれ、リュートや笛が［ライオンのいる］茂みの前で奏でられる。（p. 391）その間、楽士の後方には大小の矢で武装した者たちが控えており、ライオンが楽士の奏でる音によって落ち着き、凶暴さを忘れると、ライオンに向かって矢を放ち、捕獲する。

＜逸話＞

ある者が次の話を伝えている。「私はアラブのある部族のもとに到着したとき、1 人の若者（グラーム）が天幕の入り口に縛り付けられているのを見た。私が『彼はどんな罪を犯したのか？』と尋ねると、人々は『何の罪もないさ』と答えた。私が『彼を解放してやれ』と言うと、1 人が『だめだ』と答えて、私の手を取り、荒野に向かった。［そこで］私は数頭のラクダが死んでいるのを目にした。彼は言った。『このラクダたちはあの若者の声のせいで死んでしまった。あいつは美しい声を持ち、詩を吟ずる。だがラクダはそのような声に放心し、水も草も食べず、ついには死んでしまうのだ。』」

これは象の習性とは反対である。要するに、音やその影響を否定することは無知ゆえのことである。

＜逸話＞

はるか昔、1 人の暴君がおり、ある病気を患っていた。医者たちは手の施しようがなく、王は賢人や医者を［次々に］殺していった。ついに王の寿命は尽き、彼は病気を抱えたまま死んでしまった。

その当時、1 人の賢人がいた。夜、彼は王の墓を暴き、その腹を開いた。そして内臓を調べて病気の原因を知ろうとした。肝臓に腫れ物があった。腫れ物は石化していて［大きさは］ザクロほどであった。賢人はそれを取り出してから、王を埋め戻した。その後、彼はその石を碗にして、その中で様々な薬を調合してみたが、どの薬も効き目がなかった。

やがて、婿養子を迎える日になった。楽士たちがやってきて、オルガンを演奏した。彼は盥にバラ水を満たし、そこにくだんの碗を浮かべた。人々は食事をしていた。その碗には黄金の首飾りがかけられていた。夜になり、首飾りは盥の中にあったが、碗はすっかり溶けてしまっていた。オルガンの音色の影響であった。賢人は、かの病気の治療法は美しい音にあったと気づいたが、あの王はそれを知らないままであった。

（p. 392）こうした理由から、病人を慰撫し活気づけるため、病院には楽士が置かれるのである。

＜逸話＞

次のように言われている。アーファリードゥーンは不眠（sahar）に悩まされており、一睡もすることができなかった。ルームの王は縦笛（KLBAD）を 1 人の男とともに彼に送った。夜明けになると、男は縦笛を演奏しながら彼の館のまわりを巡った。アーファリードゥーンに再び眠気が訪れ、その音に安らぎを得た。彼は、「私にとってこの縦笛の音は、私の王国よりも大切だ」と言っていた。

＜逸話＞

言われているところによると、イスカンダルは「闇の世界」を訪れたとき、不安に襲われ、暗さ

や寒さに恐怖を抱いた。そして夜には悲しい音色を聞き、昼になると心地よい音色を耳にした。彼の軍はその音に安らぎを得るとともに、それによって昼夜［の区別］を知った。

双角の所有者は、「世界を映す酒杯」を箱から取り出し、手に持って［周囲を］照らしてみた。彼は1羽の鳥を目にした。それはラクダほどの大きさで、嘴は長く、7つの穴が開いていた。［イスカンダルは］言った。「おまえは何者か？」

［その鳥は］言った。「私はムースィーカール（Mūsīqār）[27] だ。この『闇の世界』に住み、ここ『闇の世界』の生きものたちを［音で］楽しませているのだ。」

「どうしておまえは外に出ないのだ？」

［鳥は］「出たくないからだ」と答えた。

「なぜだ？」

「おまえが闇の世界を望まないのと同じく、私は光を望まない。ここが私の故郷であり住み処なのだ。」

そこで［イスカンダルは］賢人たちに尋ねた。「外に出た後も、私がこの音を聞くにはどうしたらよいか？」

賢人たちはその鳥の嘴にならって縦笛（KLBAD）を作り、いくつか穴を開けた。空気が通ると、よい音が出た。こうして［縦笛は］ムースィーカール鳥の代わりとなった。

続いて、こうしたことを学ぶことは適切か否かについて述べていこう。

<オルガンや音楽（mūsīqī）を学ぶことは適切か否か>

言われているところによると、イマーム・アル＝ハラマイン・アブー・アル＝マアーリー・ジュワイニー（Imām al-Ḥaramayn Abū al-Ma‘ālī Juwaynī）[28]――彼にアッラーの慈悲あれ――はあらゆる知識を有し、(p. 393) 申し分のない役人であった。スルターン・マリク・シャーは彼を寵愛していた。しかし、アブー・アル＝カースィム・クシャイリー（Abū al-Qāsim Qušayrī）[29] はアブー・アル＝マアーリー［・ジュワイニー］を敵視しており、彼のあら探しばかりをしていた。

ある日、クシャイリーがジュワイニーのテラスにやってくると、ジュワイニーは竪琴を弾き、弦を調律していた。［クシャイリーは］数人の男を連れてきて、その様子を目撃させた。翌日、［クシャイリーは］マリク・シャーの集会にやってきた。イマーム・アル＝ハラマイン（ジュワイニー）

---

27) ギリシア語の mousike 由来の語。多数の穴が開いた嘴で美しい音色を奏でると言われるムースィーカール鳥に関しては、たとえばセルジューク朝のマリク・シャーやサンジャルに仕えた詩人 Mu‘izzī の作品でも、その音色の美しさがオルガンやナイチンゲールと並べて讃えられている［Muḥammad b. ‘Abd al-Malik Nīšābūrī (Mu‘izzī), *Dīwān*, Ed. ‘A. Iqbār, Kitābfurūšī-yi Islāmīya, 1979, p. 578］。現在、楽器としての「ムースィーカール」は葦の茎を束ねた管楽器パンパイプを指す。

28) セルジューク朝期のシャーフィイー派法学者、アシュアリー派神学者（1085年没）。ニーシャープール近郊に生まれる。セルジューク朝の宰相クンドゥリー（‘Amīd al-Mulk al-Kundurī）がアシュアリー学派を排斥したため、ヒジャーズ地方に移り、メッカとメディナで教鞭を取った。そのため、「両聖都のイマーム」を意味する称号「イマーム・アル＝ハラマイン」と呼ばれるようになった。セルジューク朝の宰相が、アシュアリー学派を支持するニザーム・アル＝ムルク（1092年没）になると、ジュワイニーは呼び戻され、ニーシャープールに設立されたニザーミーヤ学院で教鞭を取った。『信仰原理の指針』、『ニザーミーヤ信条』など、スンナ派の神学思想の基礎となる著作を残した［*EI*^{2}: al-Djuwaynī;「ジュワイニー、イマームルハラマイン」『岩波イスラーム辞典』］。

29) セルジューク朝期のシャーフィイー派法学者、アシュアリー派神学者、スーフィー（1072年没）。ホラーサーン北部に生まれる。セルジューク朝下のニーシャープールにおいて、ハナフィー派法学とアシュアリー派神学・シャーフィイー派法学との間で確執が生じると、クシャイリーは後者を支持するファトワーを発表するなど社会的にも活躍した。その後バグダード、トゥースに移り住んだが、ニザーム・アル＝ムルクがハナフィー学派とシャーフィイー学派の均衡を取り戻すと、ニーシャープールに帰還した。代表作にスーフィズムの解釈書 *Laṭā’if al-išārāt* がある［*EI*^{2}: al-Ḳušayrī;「クシャイリー」『岩波イスラーム辞典』］。

が現れると、クシャイリーは言った。「やあ、イマーム。竪琴を弾くことは禁忌か？合法か？」

ジュワイニーは言った。「竪琴を弾くことは禁忌である。［しかし、その音を］学ぶことは許される。」

［クシャイリーは］「どういうことか？」と尋ねた。

［ジュワイニーは］答えた。「たとえば、2 人の竪琴弾きの男が争ったとする。一方は 3 度の離婚宣言をかけて、『おまえは弾くのを間違えた』［と言った］。もう一方は、『いや間違っていない、私は正しく弾いた』と言った。彼らはムフティー（法裁定者）のもとに行った。［だが］ムフティーが、竪琴弾きの奏でた音が間違っているのか正しいのかわからなければ、畏縮してその裁定を思いとどまってしまうではないか。」

マリク・シャーは［この言葉に］驚き、ジュワイニーに対する尊敬の念を強めた。そして彼をひとときも自身の側から離さなかった。

やがて彼らはコンスタンティノープルの戦場に向かったが、［マリク・シャーは］ジュワイニーを一緒に連れていった。シャームの王テオフィロス（Tawfīl）[30]は、マリク・シャーに次のような伝言を送った。「おまえたちは戦闘や略奪や制圧以外に能がない。おまえたちには技術や賢明さがない。」

マリク・シャーは返事に窮し、この件をジュワイニーに説明した。ジュワイニーはテオフィロスに「あなたがたの技能とは何か？」と伝えると、彼はこう答えた。「きめ細かな知識、様々なまじない、金襴織り、絵画、造形である。また、私には小太鼓を打つ警護人さえいるのだ。もしおまえたちの太鼓打ちがその者と同じように打つことができるなら、私はおまえたちの要望を受け入れ、それ以外の技芸については大目に見てやろう。」

そして太鼓打ちが城壁の上に現れ、驚くべきリズムで太鼓を打った。マリク・シャーの太鼓打ちたちはそれを聞いて戸惑い、「私たちはあのように叩くことはできません」と言った。マリク・シャーはイマーム・アル＝ハラマインを呼んだ。［ジュワイニーは］「太鼓を持ってきなさい」と言った。

太鼓が運びこまれると、［ジュワイニーは］それを［テオフィロスの太鼓打ちと同じように］叩き、さらに異なるリズムを加えた。テオフィロスの太鼓打ちたちは驚嘆し、誰もこのようなリズムで打つことはできないと認めた。そこでテオフィロスは、コンスタンティノープルのハラージュ税をマリク・シャーに送った。

（p. 394）＜逸話＞

次のように言われる。マリク・シャーはルームの王と争っており、ジュワイニーを使者としてルームに派遣した。ルームの人々はオルガンを据え、40 人がかりでそれを弾いて、ジュワイニーを恍惚とさせようとした。ジュワイニーは［そこを］通り過ぎたが、彼には効き目がなかった。ルームの王の御前に彼が参じると、［王は］言った。「おおイマームよ、なんという心をお持ちか。まさかオルガンの効果がないほど強靭であるとは。」

ジュワイニーは、「オルガンの楽しみが入りこむ余地のないほどに、諸々の知識に対する楽しみ

30）ビザンツ帝国アモリア朝第 2 代皇帝（在位 829–842 年）の名。小アジアをめぐってアッバース朝のムゥタスィムと争う。838 年には自ら遠征を行ったが、Dazimon の戦いでムゥタスィムに敗れ、フランク王国、ヴェネツィア、コルドバに援軍を求めた［*The Oxford Dictionary of Byzantium* (New York, 1991): Theophilos］。マリク・シャーとは時代的に異なるので、この逸話には史実との整合性がなく、ビザンツ皇帝の名が間違っている可能性が高い。一方、マリク・シャー、ジュワイニー、クシャイリーの 3 者の関係については、他史料からの確認はできないものの、著者トゥースィーは、マリク・シャー没後の 12 世紀のセルジューク朝下に暮らした人物であることから、セルジューク朝の君主や学者たちに関する情報はあながち外れているとも言えないだろう。

が私の心には満ちております」と答えた。

［王は］言った。「それはすばらしいお考えだ。」

ジュワイニーは言った。「あなたのオルガンは 40 人がかりで演奏されていますが、誤ったやり方です。もしよろしければ、私が正しく、1 人で弾きましょう。」

［ジュワイニーは］人々を退け、たったひとりでオルガンを弾いた。それは、その 40 人を恍惚とさせるほどの音色であった。そして、［弾くのを］止めた。

彼らは正気に戻ると、ルームの王に言った。「この者はおそらく天使のひとりにございます。私たちはこの者の従僕となりました。」

ルームの王は、「私もおまえたちと同じ意見だ」と言い、ジュワイニーに対してこう言った。「マリク・シャーは偉大なり。私はルームの地をそなたの治下に置こう。もしそなたが良策と思うならば、そなたに代わって私がこの地域を治め、ハラージュ税を［そなたに］納めよう。」

マリク・シャーは、「6 万の騎兵でも成功しなかったことを、イマーム・アル＝ハラマイン (ジュワイニー) は［ひとりで］成功させた」とよく語ったものであった。

この逸話の意図するところは、楽曲や聴くことの作用は大きいということである。創造主は、聴覚と知性と視覚に言及される場合は必ず、聴覚を常に［3 つの中で］優先して述べておられる。「まことにアッラーは全聴にして全知、またかれは全聴者にして全視者」［Q2: 127 他］。「彼らはなお言う。もし私たちが聴き、熟考したならば」［Q67: 10］。

＜言語能力 (al-lisān) とその危険性について＞

さてここからは舌の知覚について述べよう。知れ。舌は誉れある器官であり、心臓の翻訳者である。舌先から喉までが［アルファベット］29 文字を発音する場所である[31]。舌のために（p. 395）多くの人物が王位に至り、舌によって多くの人物が破滅した。

＜伝承＞

信徒の長にして誠実なるアブー・バクルは、常に舌の下に石を置いていた。「なぜ置いているのですか？」と問われると、「これは私に問題をもたらすからだ」と答えた。すなわち、［ペルシア語では］「この舌のせいで様々な損失を被ってしまうからだ」ということである。

＜逸話＞

次のように言われる。ある王が病気に罹った。医者が「ライオンの乳を飲まれよ」と処方したので、人々は困ってしまった。ある人物が「私が持ってきましょう」と言った。彼は出かけていき、草むらでライオンを捕らえ、乳を搾り、持ち帰った。王はこのことにたいそう驚いた。

この男は自らを誇ったが、彼の手足が争いだした。

［彼の］手が「俺が絞ったんだ」と言うと、足は「俺が運んできたんだ」と言い、心臓は「勇気を与えたのは俺だぞ」と返した。［最後に］舌が「俺がやったんだ」と言った。手足が舌に向かって「おまえが何をやったって言うんだ？」と口々に言うと、「まあ見ていろ」と［舌は］言った。

［舌は］王に言った。「よいか、これはロバの乳だぞ。」

31）元来アラビア語の表記に使われるアラビア文字の数は 28 である。本書巻末註釈者のミーノヴィー氏によると、ここでは lām と alif の合字 (لا) も一文字と数えられているために 29 文字になるという。なおペルシア語の現代表記では、pē や gāf といったペルシア語独自の文字を含めると合計 32 文字になる。

王は動揺し、男を殺そうと捕らえた。手足は慌てふためき、「この窮地から俺たちを救ってくれ」と舌に執り成しを頼んだ。

すると舌は王に言った。「ロバの乳なのか、ライオンのものか知りたければ、トルコ石をその中に入れてみるといい。もし乳の上に浮かんでくれば、それはライオンのものだ。もし下に沈むなら、ロバの乳だ。」

帝王がトルコ石をその中に落とすと、乳の上に浮かび上がった。王は男に賜衣を与えた。

たとえとして述べられたこの逸話の意図は、舌の働きは危険に満ちているということである。

知れ。言葉は人間固有のものである。各集団にそれぞれ異なった言語があり、［その言語を］学ばなければ、別の集団を理解できない。各集団はそれぞれの言語と文字を維持しており、それらが消え去ることはない。ただし、ギリシア人の言語は別である。彼らは水中に沈んでしまい、水が彼らの地域を覆ってしまったので、彼らの書いたものは理解されないままとなり、精通している者はひとりもいない[32]。

＜逸話＞

次のように言われる。ある王がテュルク語、アラビア語、ヒンドの言語、ペルシア語といった様々な言語のうち、どれから学ぼうかと考え（p. 396）憂鬱になっていた。そこで 40 人の赤子を砦に閉じ込め、舌を抜かれた男に彼らの世話をさせた。彼は赤子たちを養育し、7 年が経った。その唖を［砦の］下に降ろし、毎日彼らに食べ物を届けさせた。こうして 15 年が経った。彼らを下に降ろしたところ、彼らはお互いに会話をしていたが、それはアラビア語でもテュルク語でもヒンドの言葉でもなかった。彼らは創造主の霊的な啓示と、自分たちだけが知っていた方法で会話をしていた。

要するにあらゆる事柄には「最初の段階」や「原初のもの」が存在するのである。

＜口（al-famm）について＞

口（dahān）については、創造主はその中にいくつもの英知を創造された。歯をお揃えになり、食べ物をそれで噛み、ものを細かくできるようにされた。歯の根元や口内の肉のあちこちに、水の泉（唾液腺）をお創りになり、乾いた食べ物を湿らせて喉に流し込めるようにされた。舌はスコップのように食べ物を向こう側から歯のところに運ぶが、［口の］外側には 2 つの唇を創造され、食べ物が歯からこぼれ落ちないようにされた。

また喉には嚥下する力をお創りになり、水や食べ物を飲み込めるようにされた。この嚥下する力は驚異である。もし飲み込んだり嚥下したりする力が弱ければ、食べ物は喉に留まり［その人は］死に至る。人の手では食べ物を流し込むことはできない。

また味を識別できるように、口の中に唾液を創造された。ちょうど嗅覚において、物質から発せられた匂いや蒸気が鼻の神経に達し、そこから脳が情報を得るのと同様である。ゆえに、口内に水（唾）が多い人の口はそれだけ優れており、逆に、口内の水が少ない人は口が悪臭を放つのである。そのためガゼルや子供たちの口は良く、ライオンの口は臭い。［ライオンは］体温が高すぎて、体液が少ないからである。

32）ギリシア人の地が水中に沈んでしまったことについては、本訳注（4）、484 頁を参照のこと。

<嗅覚 (al-šamm) >

鼻の感覚には次のような力がある。バラの匂いを沈香の匂いと区別し、ニンニクとユリの匂いを識別する。麝香の匂いをバイケイソウ (kundus) と区別する。ところで聴覚はその本質が空気であり、嗅覚はその本質が水であり、味覚はその本質が土である。触覚は体全体にある[33)]。(p. 397) またこれらの感覚を受容する神経は体中に行きわたっている。鼻が神経であり、舌や耳もまた神経であるように。

匂いや食べ物や色は、それぞれが［移ろいやすく］繊細な形相である。霊的なもの (rūḥānī) が物質の中に入り、［それが］変化したり合わさったりして赤や黒になる。緑色だったアンズはのちに黄色くなり、白かったブドウは黒くなる。麝香は少しずつ匂いを生じるが、やがてなくなってしまう。一部の人々は次のように言う。麝香から匂いがしなくなったとき、真新しい陶器の壺に水を入れて［その後］捨て、その中に麝香を入れて数日間寝かせる。［すると］失われた麝香の匂いが復活する。

<触覚 (al-lams) >

さて触覚は、創造主はそれを自らのお慈悲から驚くべきものとしてお創りになり、［人間が］寒暖についての情報を得られるようにされた。もしそうでなければ、体の一部が焼け焦げても人はそのことに気づかず、あるいは寒さで一部が壊死しても気づくことができなかったであろう。そこで創造主は触覚をお創りになったのである。とはいえ、人間は自分の体を思いのままにはできない。長い指を短くすることはできず、短い［指］を長くすることはできない。また［肌の］黒い色を白にすることはできない。［人間は］できることとできないことを知らねばならない。

<毛 (al-šaʻr) の特性>

知れ。人間の体には毛 (mū) より細かなものはない。しかし創造主は、毛の中に飾りや美しさ、繊細さといった諸々の英知をお創りになった。そうであるから頭を剃られると、その人の美しさや威厳が失われ、罰せられたように見えてしまうのである。

最も細かい毛は、目のまつ毛の縁に生えているものである。まつ毛が抜けてしまうと盲目になる。1本でも目の中に入ると、瞳を傷つける。毛が1本抜け落ちると、いかなる賢人でさえ、それを元どおりの場所に生やすことはできない。

［創造主は］目の上に2本の眉毛をお創りになった。ちょうど黒く引かれた2本の弓形の線のように。眉毛は目に力を与える。［眉毛が］白くなると、目の光 (視力) が衰える。賢人たちは、砂漠や雪中を行く人に対して、(p. 398) 目の光が損なわれないように、目にアンチモンを塗り、上下のまぶたをアンチモンで黒くするようおっしゃっている。

いかなる動物も目の下に毛はないが、人間は別で、［上下］両方のまぶたに毛 (まつ毛) がある。［同様の違いとして、］人間は胸を開いて［立って］いるが、他の動物は背が曲がっている。

人間は生まれたときには青い目をしているが、数日後には黒い目に変わる。

男には32本の歯があり、女には30本ある。男は70歳まで子供を作る。女は50歳まで産むが、

33) ガレノス、イブン・スィーナーあたりの議論を元にしていると思われるが、見解に齟齬がある。ガレノスは、聴覚は空気と、味覚は水と、触覚は土と、嗅覚は「蒸気」と関連すると述べている［B. S. Eastwood, “Galen on the Elements of Olfactory Sensation,” *Rheinisches Museum für Philologie*, 124-3/4, 1981, pp. 268–290］。

その後は産めない。男は 60 歳で老人になるが、女は 30 歳で老人になる。男は老いるほど芳香を発し、輝きが増す。女は老いるほど気難しく、醜くなる。また女は誰ひとりとして両手で［同時に］仕事ができない[34]。

＜骨 (al-‘aẓm)＞

人間の骨 (ustuḫwān) を熱病に罹った人に結ぶと四日熱 (tabb-i rib‘) が治まり、あごに結ぶと歯の痛みが鎮まる。ライオンやヒョウは人間の頭蓋骨を恐れる。女の歯 1 本を銀に浸し、女が身につけていると妊娠しない。子供の歯も同様である。年老いた男の足首の骨を女に結びつけると、子供ができない。人間の顔の皮を、月経の血のついた布と一緒に棒の先に縛りつけると、それを下ろすまで恐ろしい風が起こる[35]。

［骨の］特性についてはこの程度のことが賢人たちによって伝えられている。それらは彼らが経験によって知り得たことである。

＜胆嚢 (al-marāra)＞

人間の胆嚢 (zuhra) を吹き出物に塗り込むと、［吹き出物は］取り除かれる。ヒカゲミズ草 (ḥanaf)[36] を人間の胆嚢と一緒にすり潰し、蜂蜜をつけて爪の上に塗ると、炎症が引く。胆嚢をバラの油と混ぜ、女が手に取ると、子宮の痛みが鎮まる。人間の胆嚢をソーダ石とともに肛門に塗ると、浣腸の効果があり、腹が下って便通がよくなる。

＜へそ (al-surra)＞

赤子のへその緒 (nāfa) を月が丸く満ちていく期間に切り取り、エメラルドの［指輪の］中石の下に置き、金の指輪の上に据える。［それを］疝痛のある人が指に嵌めると、快復する。

＜尿 (al-būl)＞

人間の尿を毛織物につけて犬の噛み傷の上に置くと、肉汁のような液体が出てきて良くなる。犬の噛み傷を治すには、古い尿より効くものはない。（p. 399）子供の尿を目に垂らすと、眼病やものもらいが治り、目から涙が流れる。子供の尿を銅製の鍋で 6 分の 1 の量になるまで煮詰めて目に垂らすと、［目の］白濁 (sipīdī) が治り、黄胆も治る。3 日間朝食にそれを与え、わからないようにして食べさせると、［白濁や黄胆は］良くなる。皮疹 (qūbā) や疱疹 (bahaq) を精液で擦れば、根絶できる。酸っぱいブドウの木の根元に小便をすると、甘くなる。黒い石油をブドウの木の根元にかけると黒くなる。〔ハマダーンでは〕ザクロの木の根元に血をかけると甘くなる。

＜排泄物 (al-ġāyiṭ)＞

人間の便 (sargīn) は、毒キノコを食べてしまった人に効果がある。1 ダーング分の便を酒につけ、

34）この段落は「毛」と「骨」の間にあるが、男女の身体的性差の話であり、なぜここに挿入されているのかは不明。「人間と動物の身体的特徴の違い」の続きで、「男女の違い」として述べているのかもしれないが、「女」全般については後述される。

35）本訳注 (4)、507 頁に既出。女性の月経時の血液が異変を起こすことについては、数ヶ所で言及されている［本訳注 (4)、544 頁 ; 本訳注 (5)、404 頁など］。

36）テキスト巻末のミーノヴィー氏の解説によると、ḥanaf はアンダルスの言葉で、イラクサ科の一種「ガラスの草（ヒカゲミズ）(ḫašīša al-zujāj)」を指す。

飲み干す。喉の腫れ(ḫunāq)の薬である。便は、喉の炎症を抑える。1ディラムサング[37]の便を水の中に入れて［飲む］と、過度の下痢が止まる。トリカブトの効き目を無効にする。トリカブトは致死性の毒であり、ヒンドからもたらされる。人間の噛み傷には毒があり、便を焼いてその上に置くと、毒を吸い出す。

＜ライ病(al-baraṣ)など＞

ライ病は、［ライの］種が人の足につき、感染する［病気である］。ルームの諸都市では、ライ病の者を人のいるところには住まわせない。固く結んだ縄は、ライ病を患う者がそれを鎮めるのに効果がある。埋葬に使った土を眠っている人の上に撒くと、なかなか眠りから覚めない。

人間の特性については、賢人たちの言葉からこの程度のことを述べておこう。続いて女の特性について述べよう。

［第3章　女と去勢された者について］

＜女の性質と気質について＞

知れ。至高至大の創造主は、男たちの安息として、また男たちの災厄として女をお創りになった。預言者――彼に平安あれ――は「死後私は男に、女たちよりひどい争いの種を残さないであろう」[38]と言った。すなわち［ペルシア語では］、「私の死後の災難のうち、男たちに対する女たちの災難よりひどいものはない」と。また、「彼女らは知性や信仰が欠けている」[39]ともおっしゃった。知性は最も尊い(p. 400)ものであるが、女は［それに］与っていない。女は「不完全なもの(ʻawrat)」である。彼女たちは、家に置いておく以外にどうしようもない。

アキール・ブン・ウッラファ(ʻAqīl b. ʻUllafa)[40]は、人々から「娘を嫁にやれ。女は肉であり、犬たちに狙われるのだから」と言われると、次のように答えた。「私は娘たちが尊大にならぬように彼女たちを飢えさせており、彼女たちが外に出ぬよう身を覆わせていないのだ。」

次のように言われている。［その男は］人間の中で最も醜い顔であり、最もひどい臭いを放っていたが、妻に、「わが妻よ、おまえは夜通し起きて、私の目を覚まさせ［私を寝かせようとしない］」と言った。一方の彼女は最も美しい被造物であったにもかかわらず、［男は彼女との婚姻関係を解消した］。彼女は今にも泣き出しそうであったが、この女に必要なのは貞節さとともにあることだった[41]。

---

37) 重さの単位。約3グラム。1ダーングはその6分の1。

38) ブハーリーらが伝えているハディースである［ブハーリー『ハディース』、婚姻の書: 18］。

39) ハディースに見られる、「私は理性や宗教心の欠けている人たちの中でも、汝ら(女性)ほど力のある男に心を奪われてしまう者を見たことがない」などをふまえた表現［ブハーリー『ハディース』、月経の書: 6］。

40) テキストでは父の名前が ʻLYH となっているが、同様のやりとりを伝えるジャーヒズの『動物誌』に従って訂正した［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 1, p. 171］。アキールはアラブのムッラ族出身で、ウマイヤ朝期の著名な詩人である［al-Iṣfahānī, *Kitāb al-aġānī*, vol. 12, pp. 254–270］。

41) この話はジャーヒズの『動物誌』にほぼ同じ内容のものが載っているが、大半が省略され、細部には異同が多く見られる。そのため、ジャーヒズの伝える話に依拠しながら訳出した［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 1, pp. 169–170］。

女にはごくわずかな状態しかない。夫を持ちしばらくの間彼とともに居るか、夫を持たないかである。どのような状態であっても、男を見ると、彼女の死んだはずの色情が頭をもたげる。この上なく信仰深い女であったとしても、男と２人きりになっただけで、それ以上にないほど弱く恥ずべき者になる。**サイード・ブン・ムスリム**（Sa‘īd b. Muslim）[42] は、「**私の妻が彼らに気づかないまま、身をはだけている妻を 1000 人の男が見ている方が、何も着ていないたった１人の男を妻が見るよりも好ましい**」**と言っている**。この言葉はまったくもってそのとおりである。［ペルシア語では］「たとえ 1000 人の男が裸でいる私の妻を見るとしても、私の妻がその男を見るほどの害はない」という意味である。なぜなら、男にとっての女への情欲は、男に対する女の情欲よりも少ないからである。

＜逸話＞

ある日、アンジャシャ・ハーディー（Anjaša-yi Ḥādī）[43] が美しい声で詩を詠んでいた。預言者――**彼に平安あれ**――が「**瓶に気をつけなさい**」と言った。［ペルシア語では］「ガラスを壊すなかれ」という意味である。［これは］女をガラスに喩えたのである。すなわち、「女がこの場にいて聞いている。彼女たちはおまえの声に耐えられまい」という意味である。

ガラスは壊れやすく、修復しがたい。堕落した女もまた、決して更生しない。さらに、女は肋骨にも喩えられる。この骨には何の効用もなく、曲がっている。まっすぐになることはなく、まっすぐにすると、折れてしまう。

（p. 401）＜逸話＞

創造主が、アーダムの左の脇腹から針でハウワー（イヴ）を創造されたとき、ジブリールがやって来た。［創造主は］曲がった骨を彼に示された。［ジブリールが］「これは何ですか」と聞くと、［創造主は］おっしゃった。「アーダムの曲がった部分だ。まっすぐな目で見てはならない。」

ある賢人が、「最も良い女性は誰か？」と問われ、「母親から生まれていない者だ」と答えた。彼はさらに「［母親から］生まれた者の中では誰か？」と問われ、「生まれてすぐに死んだ者だ」と答えた。つまり、女の中には何ひとつとして良い部分はないということである。

また、〔ある人が〕ムハンマド・ブン・スィーリーンに、「私はある女性に求婚しているのですが、彼女が色黒で背が低いという夢を見ました」と語った。彼は言った。「それは良い女だから大切にせよ。色黒さは財産を意味し、背の低さは早く死ぬということだ。最も良い女は早く死ぬ女だ。」

42）Sa‘īd b. Salm b. Qutayba b. Muslim al-Bāhilī（832/3 年没）のこと。中央アジア征服で有名なクタイバ・ブン・ムスリム（715 年没）の孫にあたり、彼自身もアルメニア、モスル、スィンド、タバリスターン、スィースターン、ジャズィーラの統治を委ねられた［al-Ṣafādī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 15, p. 225］。この話も『動物誌』に見られる［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 1, pp. 170–171］。

43）ムハンマドの黒人奴隷。あとに続くムハンマドの言葉については、ブハーリーの書によく似たハディースがある。ただし、そのハディースは、歌を口ずさんで女たちが乗ったラクダを追い立てていたアンジャシャに対し、ムハンマドがか弱い女性を「瓶」に喩えてゆっくり進むよう促したものであり、本書で述べられる解釈とは一致しない［ブハーリー『ハディース』、正しい身の処し方: 95, 111, 116］。

女に信を置く男ほど愚かなものはない。[そういう男は]「この女は老いているから［信用できる]」とか「醜いから［信用できる]」と言う。

スライマーン――彼に平安あれ――はジンのサフル(Ṣaḫr)[44]を捕らえるよう命じ、サフルは捕らえられた。道を進んでいると、[サフルが］笑った。[スライマーンは］尋ねた。「なぜ笑っているのか？」

［サフルは］言った。「アッラーの使徒よ、ある男がラクダの頭を水差しの口に結び、座って用を足していたのだ。ラクダが頭を動かしたら、水差しが倒れてラクダは逃げてしまった。水差しではラクダを繋ぎとめられないということすらわからない、この男の知性に呆れたのさ。」

スライマーン――彼に平安あれ――が「[人間には］女が多いのか、それとも男か」と尋ねると、[サフルは]「女だ」と答えた。スライマーンが「どうしてか？」と聞くと、[サフルは］言った。「人間の半分は雄で、半分は雌だ。だが雌の言いなりの雄や、女を信用する男は女以下だからだ。」

また、次のように言われている。ある日、アリストテレスが座っていると、女の集団が通り過ぎた。彼は「この者たちは死の天使だ」と言った。人々は「なぜですか？」と聞いた。彼は言った。「死の天使は生涯に1度命を取るが、女は昼には財産を奪い、夜には命を奪う。」

女への賛辞としては、創造主がおっしゃっている以上には私は知らない。「互いに慰安を得るため」[Q7: 189]「その者（の一部）から配偶者を創られた」[Q4: 1]。[すなわちペルシア語では、神は]「われは男のために女を創造した。男が女から安息を得、また彼女から子供をもうけるために」とおっしゃっている。

この世の争乱をすべて（p. 402）検証するならば、忌まわしき元凶は女にある。アーダム――彼に平安あれ――が楽園から追放された苦難［の元凶］はハウワーにあり、ハールートとマールート[45]の辛苦［の元凶］はザフラーにある。ザカリヤーの息子ヤフヤー――彼らに平安あれ――の辛苦［の元凶］は1人の女にあり、ダーウード――彼に平安あれ――の辛苦［の元凶］はウーリヤーの妻にある[46]。ユースフ――彼に平安あれ――の辛苦［の元凶］はズライハー(Zulayḫā)[47]にあり、ハサンとフサインの辛苦［の元凶］はシャフル・バーヌー(Šahr-bānū)[48]にある。預言者――彼に平安あれ――は、「災いは女と馬と家にある」と言っている[49]。

こうした類いの話を述べていくと長くなってしまうので、このくらいで十分であろう。預言者――彼に平安あれ――は言う。「女はそのすべてが悪だが、彼女たちの悪は、彼女たちにはどうす

44）海の主とされる魔物（サフルという名前の意味は「岩」)。スライマーンの姿に変身して人々を惑わし、一時スライマーンから王国を奪い取ることに成功する。しかし、後にスライマーンの命令で捕らえられ、岩に閉じ込められた。その後、岩を鉄と鉛で固めた上で、海に投げ捨てられたという［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 1, pp. 252–253]。

45）ハールートとマールートは、『クルアーン』にも登場する堕天使。地上に降ろされて堕落し、女性の虜になって殺人を犯したとされる［「ハールート」『岩波イスラーム辞典』]。

46）ダーウードとウーリヤーに関しては、本訳注(7)、511頁(『イスラーム世界研究』第7巻、2014年)を参照。

47）ユーフスを奴隷として購入した人物の妻。ユースフに恋い焦がれる彼女の物語は、後に様々な文学作品で描かれた。特にジャーミー(1492年没)のペルシア語詩『ユースフとズライハー』はよく知られる［*EI*²: Yūsuf; Yūsuf and Zulaykhā]。本訳注(4)、544頁、注313も参照。

48）ハサンとフサインはアリーの息子であり、預言者ムハンマドの孫である。シャフル・バーヌーはサーサーン朝最後の皇帝ヤズダゲルド3世の娘とされ、フサインと結婚したという伝承がある。彼女に関しては、清水和裕氏(2008)の「ヤズデギルドの娘たち」も参照のこと。

49）ブハーリーらが伝えるハディース［ブハーリー『ハディース』、婚姻の書: 18]。

ることもできない悪である」と[50]。

フラート・ブン・ハイヤーン（Furāt b. Ḥayyān）[51]には 1 人の娘がいた。彼女は 3 本の旗を壊す夢を見た。イブン・スィーリーンは、「彼女は 3 人の偉大な人物を夫にし、3 人とも殺されるだろう」と言った。［まず］ヤズィード・ブン・アル＝ムハッラブ（Yazīd b. al-Muhallab）[52]が殺され、その後、彼女はアル＝ハサン・ブン・ウスマーン・ブン・アウフ（al-Ḥasan b. ʻUṯmān b. ʻAwf）[53]を夫にした。ある日、2 人の間が険悪になった。妻は「あんたを殺してやる」と言った。ハサンは「どうやって」と返した。彼女は「私は［そういう］夢を見た」と言った。ハサンは彼女を 3 度の離婚宣言をして離縁した。彼女はアッバース・ブン・アブドゥッラー・ブン・アル＝ハルス（ʻAbbās b. ʻAbd Allāh b. al-Ḥarṯ）を夫にした。彼は、ヒーラとクーファの間で殺された。

この話の意味するところは、女は難儀だということである。

動物の中ではネズミよりも忌まわしいものはない。犬は死肉を食べるが、［その犬でさえ］ネズミだけは食べようとしない。また、夢でのネズミは「女」を意味する。賢人たちは言う。サソリが女を刺しても、性交すると彼女の痛みは鎮まる、と。毒をもって毒を制す。

教友の 1 人が、「別の教友の顔が黒かった」という夢を見た。ある日、彼は［その教友に］「君の顔が黒いという夢を見たぞ」と伝えた。彼は答えた。「私の顔が黒い[54]とは、そのとおりだよ。今夜娘が生まれたんだ。」

［優れた女について］

知れ。良い女もいるにはいるが、少ない。世界の支えは彼女らにある。男たちは女から生まれ、女は躾や授乳や養育の任を負う。もし彼女たちが（p. 403）子供を一人前の男にしなければ、誰ができるというのか。女の中には、百人の男でも敵わないほどの知性や能力を持つ女もいる。

＜逸話＞

シーリーン[55]はルームの王族の出であり、完璧な女であった。アジャムの王ホスロウ・パルヴィーズは彼女を娶り、彼女に夢中になって、たくさんの富や財宝をつぎ込んだ。シールーエは自身の父親（パルヴィーズ）を殺し、シーリーンを求めたが、彼女は「私があなたと夫婦になることは許されない」と言った。シールーエは彼女の財や宝を略奪し、彼女を中傷した。以前［本書で］述べたように[56]、［シーリーンは］すべての段取りを整え、シールーエの中傷を晴らし、パル

50）よく似た言葉が 15 世紀に編纂されたハディース解釈書に記録されている。ただし、そこではムハンマドではなく、一部の賢人たちによる言葉とされている［Ibn Ḥajar al-ʻAsqalānī, *Fatḥ al-bārī šarḥ Ṣaḥīḥ al-Buḫārī*, Ṣaydā, Beirut, 2000, vol. 10, p. 6003］。

51）イジュル族サフム家の非血縁の郎党。624 年バドルの戦いの後、メッカ側のアブー・スフヤーンから隊商の道案内として雇われた人物。後に 627 年の塹壕の戦いで捕らえられ、イスラームに改宗した［al-ʻAsqalānī, *al-Iṣāba*, vol. 5. pp. 272–274; イブン・イスハーク『預言者ムハンマド伝』、第 2 巻 378 頁］。

52）ウマイヤ朝期にホラーサーンやイラクの地方総督を務めた人物（720 年没）。本訳注（5）、440 頁、注 404 も参照のこと。

53）ムハンマドの教友 al-Ḥasan b. ʻUṯmān b. ʻAbd al-Raḥmān b. ʻAwf（生没年不詳）のことか。母は、クーファの初代総督サァド・ブン・アブー・ワッカースの娘［Ibn Saʻd, *al-Ṭabaqāt al-kubrā*, vol. 5, pp. 377–378］。ただし、Ibn Saʻd の『偉人伝』の該当箇所では彼の妻も数名紹介されているが、その中にフラートの娘の名は挙げられていない。

54）ペルシア語の「顔が黒い（rū-siyāh）」には、「罪深い」「不運」「恥ずべき」などの意味もある。

55）本訳注（5）、407 頁、注 224 参照。

56）本訳注（7）、508–509 頁。

ヴィーズを殺した者たちを討たしめ、自らの汚名をそそいだ。また、略奪された財産を奪い返して必要とする人々に施した。[最後に]彼女は「ホスロウ・パルヴィーズの墓に行き、預かっているものがあるので、[それを]彼に返したい」と願い出た。彼女は墓に行き、墓にしなだれかかった。毒が入った指輪を嵌めており、それを飲んで命を絶った。彼女は良き名声と貞淑さとともにこの世から去った。シールーエの軍は彼に不信感を抱くようになり、結局のところ、ほどなくして彼は殺された。

次に、女の特性について述べよう。

＜女の特性について――月経(al-ḥayḍ)＞

賢人たちは言う。月経中の女の匂いは、オリーブ油と味つきパン(kāma)を損なう。月経中の女が菜園を通ると、ニラが傷み、キュウリ畑を通ると[キュウリが]苦くなる。月経中の女がヘンルーダ(sudāb)のそばを通るとヘンルーダは干からびてしまう。月経中の女が鏡を見ると鏡は曇り、蜂蜜の入った壺のそばを通ると甚大な被害が出る。月経中の女との性交は痴れ者となり、愚鈍な子供が生まれる。「ハンミョウ(ḍarārīḥ)」と呼ばれる動物は致死性の毒を持っており、たった1匹に刺されても死んでしまうのだが、(p.404)月経中の女の匂いがハンミョウに届くと、その虫は死ぬ。月経中の女が癲癇に罹った人に手をかざすと癲癇は鎮まる。月経用布を棒の先につけ、巨大な火に向けると、火は消える。月経用布を船の船尾に結びつけると、嵐はその船を避ける。

私は福音書の徒(キリスト教徒)から聞いたのだが、[世界を取り囲む]周海は、「竜(tinnīn)」と呼ばれる動物のことを嘆きかこっていた。竜はいつも海を荒れ狂わせ、[他の]生きものを食べていたからである。創造主は周海に呼びかけた。「おお、海よ。感謝せよ。私はおまえの中に女を創らず、おまえを悪い女にかかって悩ますようなことはしなかったのだから」と。

賢人たちは次のように述べている。月経中の女が裸になって仰向けに倒れると、いかなる猛獣も彼女の周りに近づくことはない。寒さが厳しい場合は、寒さが和らぐ。処女の娘が妊娠している女に対して、「もし産むなら[それでよし]。もし産まないなら、あなたをラクダに結びつけて、荒野で解き放ちます」と言うと、すぐに出産する。月経中の女にはいくつかの兆候がある。ユダヤ教徒は月経中の女に近寄ろうとせず、パンを棒の先につけて彼女らに与える。

これらの話は根拠のないものではなく、すべて経験に基づいて述べられている。

＜逸話＞

次のように言われている。ジャズィーラの地にあるハドゥルの町には堅固な城砦があり、誰もそこを征服することはできなかった。肩胛骨王シャープールは征服しようと何年も戦った。人々は彼に言った。「青い目をした女の経血を手に入れ、ハトの血と混ぜ、羊皮紙に塗り込みなさい。そして小バトの首に結びつけてハドゥルの町の城壁の上に落とさせなさい。」

[シャープールが]そのようにすると、瞬く間にハドゥルの土台が崩れ落ち、建物はばらばらになった。[シャープールは]ハドゥルを征服した[57]。

ヒンドの人々は女の経血を使って盛大な儀式を行い、祈祷する。ここではこの程度で十分であろう。

57) 同様の話が「ハドゥル」の町の項に見られる[本訳注(5)、403-404頁]。

＜去勢された人々と彼らの性質について＞

知れ。人間は去勢されると性質が変わる。［去勢された者は］男でもなく、（p. 405）女でもない。どの動物でも、去勢されると肉は柔らかくなる。悪しき気質はなくなり、腋臭や悪臭は少なくなる。しかし、去勢された人間はせっかちになり、身長が伸びたり低くなったり、あるいは極端に太ったり痩せたりする。心が感化されやすくなり、よく泣く。だが一度怒ると、すぐには収まらない。たとえ性欲の器官（性器）が使い物にならなくとも、1 パーセントの性欲は残っている。胃は熱質になり、体毛は抜け落ちる。

賢人たちは言う。去勢された者は体中が柔らかくなり、神経が弱くなる。場合によっては寝床で大便や小便をすることもある。女や去勢された者は決して禿げることはない。少ししか食べない反面、よく眠るようになる。声はか細くなる。あご髭のある男が去勢されるとあご髭は抜け落ちるが、眉毛は抜け落ちない。なぜなら眉毛は母親の胎内からもたらされたものだからである。頬に髭のある女が初潮を迎えると、髭は生えなくなる。なぜなら毛は血液から生じるからである。

［逸話］

ムハンマド・ブン・ラーシド（Muḥammad b. Rāšid）[58] には、あご髭の生えそろった娘がいた。ある晩、その娘が結婚式に行くと、1 人の女が「この人は男だ」と言って騒いだ。女たちが集まってきて、彼女を打ちすえようとした。彼女はどうすることもできず、「私は女です」と叫び続けたが、誰も聞こうとしなかった。恥部をむき出しにすることで、彼女はようやく解放された。

知れ。去勢された者はハトや狩猟への欲求がある。最初に去勢を施した者はキリスト教徒であった。彼らは息子たちが性欲に悩まされることのないよう、［息子たちを去勢して］聖堂に寄進した。去勢された者が女を好きにならないと考える者がいるならば、それは誤りである。

＜逸話＞

アブー・アル＝ムバーラク・サービー（Abū al-Mubārak Ṣābī）[59] は去勢者であった。彼は 100 歳まで生きた。イブン・アッバード（Ibn ʻAbbād）[60] は次のように述べている。「彼は死の床にあって、私に言った。『私は去勢者だ。私の寿命は尽きようとしている。今このような状態にあって 1 人の女の声が聞こえた。［その声のせいで］私は悶え、私の理性は吹き飛んだ。［その女に］私のところに来てもらえないだろうか。私はこのような人間だが、君は他の者たちに何と言うか？』」

（p. 406）［去勢された者の特性］

知れ。去勢された者は女々しくはないが、軽率である。生殖器官（aṣlāb）の力と精液を少ししか

58）同じ名前と父称を持つ者としては、al-Makḥūl al-Dimašqī というニスバを持つ人物（786/7 年没）と、al-Ṯaqafī のニスバを持つ人物（921/2 年没）が挙げられるが、両名とも詳しい情報はなく、ここでは特定できない［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 3, p. 68］。

59）後述のイブン・アッバードがアル＝サーヒブ（後掲注 60）のことであるならば、彼と同時代人で「サービー」のニスバを持つ Ibrāhīm b. Hilāl al-Ṣābī（994 年没）を指しているか。イブラーヒームはブワイフ朝下で文書長官を務める一方、しばしばアル＝サーヒブと書簡をやり取りするなど親交が深かった［Yāqūt, *Muʻjam al-udabāʼ*, vol. 1, pp. 181–226］。ただし、イブラーヒームのクンヤ（「某の親」を示す）は「アブー・イスハーク」であり、彼が去勢したという情報もないため、確定には至らない。

60）ブワイフ朝の歴代君主のもとで書記および宰相を務め、「アル＝サーヒブ」として知られた Abū al-Qāsim Ismāʻīl b. ʻAbbād b. ʻAbbās（995 年没）のことか。ムゥタズィラ派の教義を扱った神学書や歴史書、アラビア語文法書、文書集など数多くの著作を残している［*EI*²: Ibn ʻAbbād］。

出さないことにより長寿である。とはいえ夢精をし、性交もする。[性交すると]なかなか達せず、太腿が重くなり〔精液がすぐには出ない。〕妊娠させることもない。これらはすべて女が好むことである。

去勢された者は獣姦(liwāṭ)を好む。ラビーゥ族にアスィール(Aṯīr)という名の去勢者がいた。ある日、彼の主人が屋根の上から監視していると、アスィールが羊相手に獣姦に耽っているのを目撃した。[アスィールは]主人を見ると逃げ出した。[主人は]彼を見つけ出すと、その夜には[アスィールを]墓に葬った。

以上のことは、人間に対して[性器]切断をしないようにするために述べてきた。なぜなら、子孫を生み出す器官を切断することは[神に]祝福されたことではなく、また男は去勢され性器を切断されたからといって性欲や雄たる性質を失うことはないからである。

＜逸話＞

次のように言われている。ムアーウィヤはある日、ヤズィードの母であるマイスーン・ビント・バフダル(Maysūn bt. Baḫdal)[61]のもとへ行った。1人の宦官が彼に付き従った。マイスーンは顔を覆った。

ムアーウィヤは言った。「宦官から顔を隠すのか。」

マイスーンは、「性器の切断で、アッラーの禁じられたことが変わるとお思いですか」と答えた。すなわち[ペルシア語では]、「彼の体から一部が切り取られたからといって、禁忌が合法になると思うのですか」と。

知れ。去勢者がエチオピア人(ハバシャ)であれば、貞節さや穏やかさが得られるが、ルーム人の場合はそうではない。預言者――彼に平安あれ――のおっしゃったこと、「先達の言うことを聞き、従いなさい。たとえそれがエチオピア人の奴隷であろうとも」[62]は、そのことを示していよう。エチオピア人の去勢者の大多数は命令に忠実である。

賢人たちは、夢に出てくる去勢者は「天使」を意味する、と言っている。またある者は、夢の中の去勢者は、目覚めているとき[に見る]よりも良いと言う。蛇もまた、目覚めているときよりも夢で見る方が良い。なぜなら蛇は夢の中では「財産」を意味するからである。

[第4章]　様々な階層の人間とそれぞれの気質や姿について

知れ。至高にして至聖なる創造主は、アーダムの子らを種々様々に創造された。まずは、(p. 407)我々とはかけ離れた奇妙な[人々の]名称やその土地の特性について言及していこう。至高なるお方のいわく、「あなたがたの言語と、肌色を様々異なったものとされている」[Q30: 22]。

61) テキストではBJDLとなっているが、彼女はカルブ族の長Baḫdal b. Unayfの娘であるため、訂正した。ムアーウィヤの妻。息子ヤズィードの教育に熱心で、一時期ムアーウィヤと離れた際にもカルブ族が支配する荒野にヤズィードを連れて行き、その地で育てたという[*EI*^{2}: Maysūn]。

62) ブハーリーが伝えるハディース「汝ら、先達の言うことをよく聞き、彼に従え、たといその髪が干しぶどうのように縮れたアビシニア人であろうとも」を踏まえた表現[ブハーリー『ハディース』、アザーン: 54]。本書でもこのハディースはすでに言及されている[本訳注(5)、407頁]。

次のように言われる。マクラーン[63]の向こう側に、「パランガーンの山（jabal-i Palangān）」と呼ばれる山がある。そこの泥の中には、いつも人間の像がある。誰かがひとすくいの泥を取って割ると、その中に人間の像が現れる。これは珍しいことである。『バービル（バビロン）の書（Kitāb-i Bābilī）』で言及されるところでは、その泥の中には人間の姿かたちをしたものがある。その泥を集め、水に少し浸して割ると、中から像が現れる。これは、「泥からあなたがたを創り」［Q6: 2］という章句に近い話である。

また、次のように言われる。コンスタンティノープルの右手には海があり、春になると沸騰する。そして毎年決まった時期になると、人間の頭や腕や足が岸に打ち上げられる。それが何なのか誰も知らない。その地域にはこういった様々な驚異がある。また、ギーラーンの地方にある泥は、その泥でキツネやネズミやウサギをこねて作り、太陽のもとに置くと、動き出し、駆けまわる。その後、その場で動かなくなる。

創造主は、泥の中に、計り知れないほどの様々な精妙なものを創造された。至高なるお方のお言葉には、「人間は気短かに創られている」［Q21: 37］とある。ここでの「気短か」とは泥のことであろう。至高なるアッラーは、「またあなたは泥で鳥を形作り」［Q5: 110］とおっしゃっている。イーサー――彼に平安あれ――は、泥を手に取り、その泥から鳥を作ったものだった。そして、それに息を吹きかけると、その泥［の鳥］は飛び立つのだった。

知れ。人間（ādamī）は「人間（insān）」とも言う。「忘却者（nāsī）」とは、物事を忘れてしまう者のことである[64]。［人間は］母親の子宮に入ると父親の背中を忘れ[65]、この世に生まれ出ると母親の子宮を忘れ、墓に入ると現世を忘れる。人間については、「［われは、以前にアーダムに確と約束した。］だがかれは（その履行を）忘れた」［Q20: 115］、すなわち「彼はわれの約束を忘れた」と［神は］言っている。詩人が次のごとく詠んでいるように。（p. 408）

　わたしはおまえのことを忘れた　忘却は許される
　許し給え、なぜなら最初の人間（アーダム）が最初の忘却者なのだから

ある日、カターダ[66]が「私はものごとを一度も忘れたことがない」と言っていた。それから、彼は男奴隷に「私のサンダルを持ってこい」と言った。［男奴隷は］「履いていますよ」と言った。カターダは恥じ入った。［この話からは］言い張ることは賞賛されるものではないことがそなたにもわかるであろう。

また、言われているところでは、ある男が赤いシャツを着た子供を肩にのせていた。だが彼は、「こういった様子の子を見なかったかい？私からはぐれてしまったのだ」と言っていた。人々は「おまえは肩にのせているのに探し回っているよ」と言った。この話の意図は、忘却とは、アーダムの子ら（人間）がアーダム――彼に平安あれ――から受け継いだものであるということである。真にものごとを知るお方とは、創造主［のみ］である。

さて、諸々の民について、その各々がどのようであるか言及していこう。そなたが創造主のご創造の完全さを知るように。

63）本訳注（2）、425頁、注67を参照。

64）“insān” と “nāsī”（もしくは “nisyān”「忘却」）という響きの似たアラビア語の単語をかけている。ただし、この2語は意味を同じくする同語根というわけではない。

65）精子は腰や背中で作られる、と考えられていた。

66）盲目の伝承者 Qatāda b. Diʻāma のこと。本訳注（5）、455頁、注495を参照。

＜巨大で強大なアードの民について＞

さて、アードの一族は、暴力と圧倒的な力と巨体で特徴づけられる。至高崇高なる創造主は、フードを彼らに遣わしたが、彼らは従わず、山中に家を作った。至高なるアッラーは彼らに風を送り、全員を滅ぼした。

この民の末裔がイェリコ（Arīḥā）の町にいた。ムーサー――彼に平安あれ――は、ユーシャゥ（ヨシュア）・ブン・ヌーン（Yūšaʻ b. Nūn）[67] を彼らに遣わした。彼らは、ユーシャゥとその民を捕らえ、イェリコへと連れていった。［アードの民は］彼らの小ささを嘲笑い、「どのような勇気でもってイェリコに乗り込もうとしたのか？」と言った。その後、みなを追い出した。彼らの地には果樹園があり、多くの果実がなっていた。ザクロ1個は、棒に括りつけ、数人で肩に担いで運ぶほど［の大きさ］であった。後に、1つの実がムーサーのもとにもたらされた。みなが彼らの果物の［あまりにも大きいという］特徴について述べた。ムーサーは畏れかしこまった。彼らは、「私たちはイェリコに行くことはできません。巨人であるアードの民がそこにいる限りは」と言った。創造主は、「ならばこの国土を、40年の間かれらに禁じよう」［Q5: 26］とおっしゃった。［すなわちペルシア語では］、「彼らに40年間、イェリコに行くことをわれは禁じた」と［神は］言った。その後、彼らは40年間ティー砂漠[68] に取り残され、（p. 409）進むことも退くこともできなかった。彼らは朝から晩まで歩き回った挙句、まったく同じ場所に天幕を張った。ついにはシャームとマダーインの間でみな滅んでしまった。ハールーンはこの砂漠で亡くなった。その後ムーサーは立ちあがり、イェリコへと向かった。その軍勢の大半は死んでしまっていたので、彼はイェリコを征服した。

＜ウージュ（ʻŪj）について＞

ウージュ・ブン・〔ウヌク〕（ʻŪj b. [ʻUnuq]）は、巨大な人物だった。彼の母はアーダム――彼に平安あれ――の娘であった。ウージュはアーダムの家で生まれた。ウージュの寿命は3000年であり、ヌーフ――彼に平安あれ――の時代にも生きていた。［ヌーフは］彼を船には乗せなかったが、大洪水の水は彼の腰までしか達しなかった。彼は、とてつもない巨人であった。彼は東や西や海や陸を巡り、ムーサー――彼に平安あれ――の時代にまで生き、ティー砂漠にたどり着いた。彼はムーサーや彼の民を見ると、彼らの頭上に投げようとして2ファルサングもの大きさの山を持ち上げた。1羽の鳥がその山の頂にとまり、くちばしでそれを突くと、山はウージュの首の上に落ちた。ムーサーは杖でウージュの足首を打ちつけた。［ウージュは］倒れ、息を引き取った。この巨人をその手で滅ぼしたのは、ムーサーの奇跡の1つである。創造主は、［ウージュのような］こういった種族からアードの民をお創りになった。

また言われているところでは、ラホールの地で、人間のものである2つの膝［骨］が見つかった。膝の1つは、地主が小麦のための倉庫とした。もう1つの膝からは橋が造られた。10万もの人や家畜がその上を渡り、下には大河が流れていた。

＜逸話＞

イエメンの地で、人間の頭が中に入ってしまうほどの指輪が見つかり、ウマル・ブン・アル＝

67）ムーサーの後継者。ムーサーとともにエジプトから脱出し、荒野を放浪した。ムーサーの死後、イスラエルの民を率いてイェリコを始めとするカナンの地の征服に成功した［「ヨシュア」『岩波キリスト教辞典』］。

68）本訳注（7）、512頁に既出。

ハッターブのもとへ送られた。彼はそれを見ると泣き、「神を畏れなさい。指が我々の腰ほどもある民を創造し、そして彼らを滅ぼされたのだから」と言った。

また、イスカンダリーヤで、てっぺんの一部が欠け落ちた 1 本の歯が見つかった。30 マン［もの重さ］があった。イスカンダリーヤの王のもとへ運ばれると、［王は］言った。「これはまた驚くべきものがあるものだ。これは子供の歯だ。なぜなら（p. 410）尖って艶があるからだ。もし老人の歯であれば、先端は平たく、色は黄色くなっていようぞ。」

また、預言者――彼に平安あれ――は、「人は、寿命と糧と肉体を徐々にすり減らしている」とおっしゃった。［すなわち］「人間はすり減り、その寿命も力もすり減っていく」と言った。

<ヤァクーブ――彼に平安あれ――の時代のアードの男について>

言われているところでは、アードの民の 1 人がミスルのアズィーズ[69]の時代まで生き残っていた。ミスルのアズィーズは彼を自らのもとに置いていた。祝祭の日になると、彼は外に連れ出され、アズィーズの頭上高くにそびえ立っていた。巨人で、2 本の歯が象の牙のように口から出ており、人々の心を恐怖で震えあがらせた。

ユースフはその［アードの男］を見たが、ヤァクーブに見出したほどの威信は見て取れなかった。彼は［アズィーズに］言った。「あなたは自分の民すべての心をくじくおつもりか？」

彼（ユースフ）の兄弟たちが戻り、ヤァクーブを連れて来たので、アズィーズは彼に会した。［ヤァクーブの］威厳は、アズィーズを感動させ、彼を玉座に座らせた[70]。アードの男は跪拝し、ヤァクーブの前に立ち控えた。

ヤァクーブは、アードの男に言った。「おまえは何歳か？」

彼は答えた。「私は、あなたがイブラーヒームの後をついて歩いていたのを見た。」

ヤァクーブが「私は、イスハークの後をついて歩いていたのだ」と言うと、「いや、あなたはイブラーヒームの後を歩いていた」と言った。

ヤァクーブは怒り、「もしおまえが嘘をついているなら、おまえの頬の髭は抜け落ちる」と言った。

［すると］アードの男の髭が抜け落ち、以前よりも醜い姿になった。その後、アズィーズは彼を追い払った。

ユースフがヤァクーブをミスルに呼んだ意図は、ヤァクーブの威厳を見せて、アードの男がもてはやされるのを打ち崩すためであった。結果、ミスルの人々はヤァクーブがアードの男よりも立派で、より熱情的だと知ったのである。

<サランディーブのアードの男>

公正なるヌーシラヴァーンの時代、彼はある本の中で、「死者に注ぐと生き返る薬を創造主はお創りになった」という記述を見つけて世界中をくまなく探したが、［そのような薬は］見つけられなかった。［しかし］（p. 411）「サランディーブの地のサランディーブの山[71]には、ある長命の人物がいて、その彼であれば、いにしえの人々から聞いてその薬が何なのかを知っているだろう」と教えられた。

69）本来は固有名詞ではなく、エジプトの有力者の称号。本訳注（4）、544 頁、注 313 を参照のこと。

70）『クルアーン』のユースフ章（12 章）99–100 節にある、ユースフが父ヤァクーブに再会を果たす場面を踏まえているのだろう。

71）本書で頻出する「ロフーンの山」のこと。サランディーブ（セイロン島）については本訳注（5）、426 頁、ロフーンの山については本訳注（4）、522 頁を参照。

ヌーシラヴァーンは大金を与えて人を送り出した。その者はサランディーブの地に至り、かの人物のことを尋ねた。[人々は] 言った。「彼はアードの者で、姿を見せようとはしません。人々が偶然彼に出会ったところ、恐ろしい体つきをしていました。ロフーンの山の上にいます。」

男は出かけて行き、探し続けた。ついにある山道で彼に遭遇した。黒い男で、槍のような角が頭にあり、唇の下から上に向けて2本の牙が伸び、鼻は1アラシュほどもあった。[使者は] 彼に質問した。彼の言葉もまた理解できなかったので、1人のヒンド人を連れて行き、くだんの薬のことを尋ねた。[男は] 言った。「私はかの薬を知っている。死者の心を生き返らせるものは英知より他にはない」と。

かつてこのような姿のアードの民がいた。

＜イスカンダルの軍の中のアードの女たち＞

次のように言われている。イスカンダルには40人のアードの女がいた。彼女たちは軍の前衛であり、イスカンダルの敵軍は [いつも] 彼女たちが打ち負かしていた。[彼女たちが軍に加わった] 経緯は次のとおりである。

イスカンダルは「永遠の島々」[72] のうちの2つの島を見つけた。一方は男ばかりであり、もう一方は女ばかりであった。彼らが言うには、[男たちと女たちは] 毎年互いの島に行き、女は妊娠する。子供が生まれ、それが娘であれば [女島に] 留め、息子であれば男島に送るのだ、と。

[それを聞いた] イスカンダルは憤慨し、彼らを両島から連れ出し、彼らにイスラームを教え広めようと決意した。彼らは従おうとしなかった。[イスカンダルは] 大いに努めたが、彼の軍はその女たちから逃げ出してしまった。一方、男たちは帰順した。

イスカンダルは困り果て、アリストテレスに次のような手紙を書いた。「私は、一方には男ばかりが、もう一方には女ばかりがいる2つの島を見つけたのだが、女たちは手に負えずどうすることもできない。わが軍は彼女らに打ち負かされてしまった。この件についてあなたは何とおっしゃるか。」

その返事にはこう書かれていた。「その女たちとは戦うな。あなたが彼女たちを打ち破ったところで名誉とはならず、もし彼女たちがあなたを打ち破ったならば (p. 412) 不名誉となるばかりだ。この女たちとは和睦し、帰還されるのが得策である。」

その手紙がイスカンダルのもとに届くと、女島に使者が送られた。[使者は] 伝えた。「私はそなたたちの前から立ち去ろう。だが、そなたらのうち40人の女が私に仕え、私の敵と相まみえるという条件のもとにだ。」

女たちはこの条件を受け入れて投降した。彼女たちは、股の間を馬が通り抜け、どれほどの天幕にも入ることができないほどに大きかった。彼女らが参加する戦いではいつも、馬や駄馬が彼女たちを恐れて逃げ出した。敵がある女の手に落ちると、その頭が引き抜かれるか、両足が引きちぎられるかしかなかった。あらゆる軍隊が彼女らから逃げていった。イスカンダルの武威は世界中に広まり、ついには世界を征服した。

ゆえに、様々な時代にこのような姿の者たちがいたのである。至高なるお方のお言葉に、「またあなたがたの体が強大にされたことを思いなさい」[Q7: 69] とあるように。

---

72) カナリア諸島を指すとされる。本訳注(4)、485頁に既出。

アシュカーン家[73]の国土に、ある動物の卵がフタコブラクダ（uštur-i buḫtī）に載せられ運ばれてきたことがあった。彼らの出自はイスカンダリーヤ〔を建設した民〕にあった。［その町に］行く者は、イスカンダリーヤの宮殿と今も残る柱を目にするであろう。それぞれの柱の周囲は4人が手をつないでも届かないほどであり、柱の上にはさらに別の柱が据えられている。［それを見た者は］知るだろう。そのような柱を造り、据えつけた男たちは、まさにこれほどの雄々しさと様々な力によって為し得たのだ、ということが真実であることを。

＜アードの2人の女について＞

知れ。どの時代にも創造主は驚くべきものをお創りになる。それを否定するのは愚かなことである。

アル＝ムクタフィー・ビッラー（al-Muktafī bi-llāh）[74]の時代に、アラブの地に2人の人物が現れ、追い剥ぎを働いた。彼らを捕らえるために軍が出向いたが、［軍の］一部は殺され、一部は逃走した。（p. 413）ムクタフィーは別の部隊を派遣したが、彼らも敗走してしまった。カリフは困惑し、言った。「2人の人間がこれほどの兵士を敗走させるとは。こんなことはあり得ない。」

そこで、1人の女を送り込んだ。彼女は非力にもかかわらずそこにたどり着き、彼らのことについて尋ねた。［するとその2人は］言った。「私たちはアーダムの子孫（人間）にあたる2人の女です。私たちが生まれたのはこの山の中でした。私たちは人の肉を食べています。」

それ以外にはひと言も話さなかった。［使いの］女は帰っていった。その後、カリフの軍はいくつかの部隊に分かれ、夜まで待ち伏せた。そして、眠っていたその2人の女を捕らえて殺した。2人の頭が槍に突き刺され、［ヒジュラ暦］309年（西暦921–22年）にバグダードの町に運ばれると、世界中から人々が見物にやってきた。

315年（西暦927–28年）に、アブー・バクル・ブン・スィーニーズ（Abū Bakr b. SYNYZ）[75]がカスル・イブン・フバイラ（Qaṣr-i Ibn Hubayra）[76]に襲来し、略奪した。彼とともに、大きな赤いイナゴの大群が襲来した。イナゴは腹を血でいっぱいにし、口から血を吐き出しては［町を］破壊していった。やがてイブン・スィーニーズの軍が立ち去ると、イナゴもまたいなくなった。彼が来ると［イナゴも］来て、彼が去ると［イナゴも］去ったのである。これは驚くべき現象であった。

いつの時代にも、アードの民の誰かしらがいたのである。

＜バービル（バビロン）のアードの男について＞

双角の所有者は「あなたは世界中を巡り、『闇の世界』にも立ち寄ったが、どのような驚異を目にしたのか」と尋ねられ、次のように答えた。「バービルには、山頂が雲に隠れて見えない山があり、その麓には深い海があった。私が海の中ほどまで行ったとき、非常に尊大で、巨体で、水面から出るほど巨大な男を見た。男の体はすべて毛で覆われており、平たい2つの耳があった。」

73）アルサケス朝のこと。イラン・イラクを広く支配した。本訳注（5）、388頁、注127参照。

74）アッバース朝第17代カリフ（在位902–908年）。カルマト派やビザンツとの戦いを指揮する一方、騒乱の時代にあっても財政の維持に成功し、勇猛かつ聡明なカリフとして知られる［EI^2: al-Muktafī］。

75）ここではIbn SMSBNYと記されているが、後出のSYNYZと採る。だがいずれにせよ、この人物については不明である。

76）クーファとバグダードの中間に位置する町。「イブン・フバイラの城砦」の意。ウマイヤ朝最後のイラク総督であったYazīd b. ʻUmar b. Hubayraによって建てられた。10–11世紀の地理書では、バグダード＝クーファ間で最大の町として伝えられ、ユーフラテス川近くに位置し、いくつもの水路の分岐点にあったとされる。12世紀より前にこの町が衰退すると、かわってヒッラがこの地域の中心都市となった［EI^2: Ḳaṣr ibn Hubayra］。

イスカンダルは［さらに］語った。「私は彼に恐怖を覚え、至高なるアッラーの御名を唱えて、『水の中でおまえは何をしているのか。おまえは悪魔か、それとも妖精か』と尋ねた。すると彼は言った。『私はアーダムの子孫だ。この先には、アフラースィヤーブが魚の骨で造った町がある。我々の食べ物は魚の肉だ。アフラースィヤーブが集めたあらゆる富や財宝がその町にはある。我々はこの地で生まれ世代を重ねてきた。太陽の熱を避けて水の中にいるのだ。だからおまえが見ているような姿をしているのだ。』」

イスカンダルは言った。「おまえたちの町を見てみたい。」

（p.414）男は言った。「だめだ。だが［町の者を］何人か連れてきて、おまえに見せてやろう。」

彼は立ち去り、40人の男を連れて戻ってきた。彼らはみな魚が盛られた黄金の酒杯を手にしており、それらをイスカンダルの前に並べ、帰っていった。イスカンダルが学識者たちに彼らについて尋ねると、識者たちはこう言った。「これはアーダムの子孫に属する民です。彼らはこの岸辺に落ち着いたのですが、淀んだ空気によって腐敗した水のために、かたちが変化して恐ろしい姿になってしまったのです。彼らの体は獣と化し、とうとう彼らは獣の域に達して、人間の地位から転落してしまいました。それに、祖先がこのような土地に住み着いたので、魚で満足するようになったのでしょう。」

これが彼らの姿である[77]。

＜中国のアードの男について＞

私は次のような話を聞いた。スルターン・サンジャル[78]の時代に中国の地から使者がやって来て、男の腰回りほどもある指輪を持ってきた。その指輪の要となる石の重さは1マンもあった。［使者は］言った。「中国の王は次のように言っている。『我が祖父はこの指輪をつけるほどに大きかった。彼の墓は中国の地にあるが、［そこを］訪れる者たちは、彼の骨や体格の大きさを目の当たりにしている。［ゆえに］王たることにおいて、私は他の誰よりもふさわしい。』」

サンジャル――彼にアッラーの慈悲あれ――はイマーム・ムハンマド・マイハニー（Imām Muḥammad Mayhanī）[79]に「これに対してどう返答すればよいか」と尋ねた。ムハンマド・マイハニーは次のような返事を書いた。「もしおまえが自分の祖父を誇るというなら、おまえは何も知らないのだな。当時、我が父はおまえの祖父よりも大きく、指輪もおまえの祖父のものより大きかったのだ。［また］もし自分自身を誇るというのなら、私はホラーサーンから中国の領域まで軍で沈めてやろう」と。

この話の意図は、かつては骨格や体格が今よりも大きかった、ということである。

＜イティルのアードの男＞

ルースの川の向こう側には背が高く巨大な民がいる。彼らは獣のような気質をしており、ゴグと

77）校訂テキストでは割愛されているが、もともとは挿絵が挿入されていたのであろう。本書の挿絵については、本訳注(2)、405頁、注6も参照のこと。

78）セルジューク朝のスルターン（1097–1157年はイラン東部を支配、1118年以降は大セルジュークのスルターン）。詳しくは本訳注(4)、544頁、注314を参照のこと。

79）テキストにはImām Muḥammad MHANYとあるが、スルターン・サンジャルと同時代人で『書記の規則』の著者であるムハンマド・ブン・アブドゥルハーリク・マイハニー（Muḥammad b. ‘Abd al-Ḫāliq Mayhanī）の可能性が高いため、ここではマイハニーと採る。彼はホラーサーン出身のハディース学者であり、前述した著書の写本では「ホージャ・イマーム」という称号が付されている［Mayhanī, *Ā’īn-i dabīrī*, Ed. A. Naḥwī, Markaz-i Našr-i Dānišgāhī, Tehran, 1389s,（muqaddima-yi muṣaḥḥiḥ, pp.6–9）］。

マゴグに属する種族である。アフマド・ブン・ファドラーン（Aḥmad b. Faḍlān）はタキーン（Takīn）[80]から次のように聞いたと言っている[81]。

「ブルガールの王が私に語ったところによると、川が氾濫したときにブルガールの一部族がイティルにやってきた。ある日（p. 415）その地方で非常に大きなわめき声や叫び声が上がった。『水面に人が現れたぞ。もし彼らが［別の］集団の一員で、私たちの近くに住んでいれば、この地に私たちの居場所はなかろう。』

私たちはイティルの川まで出かけ、［そこで］1人の男を見た。男の背丈は12アラシュもあり、頭は巨大で、鼻は手のひら2つ分もあった。私は恐ろしくなった。男に話しかけてみたが、返事はなかった。私たちは、3ヶ月の行程にあるイースー（Īsū）[82]の町に手紙を書いた。『このような特徴の男がここに現れた。彼がどこからやって来たのか私たちに知らせてほしい』と。次のような返事が届いた。『男は川に流されてきたのだ。その者たちは獣と同じく裸の民である。創造主は彼らの日々の糧を魚とされた。我々の中では、その地方に行こうとする者は誰ひとりとしていない。』」

その後、タキーンはその男を捕らえた。というのも、男は手にしたものを何でも食べ、ばらばらに壊すからであった。男は子供たちを食べてしまうこともあった。男は鎖で古い木に縛りつけられた。

［ブルガールの王は］「もしあなたがお望みなら、［その男を］あなたに見せましょう」と〔言い〕、彼は案内された。

私はついに、木の根元に男が倒れているのを見た。［男の］脛は巨大なナツメヤシの幹ほどもあった。肉は鳥たちがついばみ、彼の残骸がそこに転がっていた。人々は言った。「この者はゴグの子孫である。川が彼を攫い、こちら側に運んできたのである」と。

アードの民の驚異に関しては、ここではこのくらいで十分であろう。創造主のお力を畏れ、巨人たちの結末がどのようなものだったのか、またその他の者たちの結末はどうであるかを知るがよい。また、自らの肉体や力に驕ることのないようにせよ。

さて、それぞれの時代に生きた人間の驚異について、節を改めて述べていこう。なおこれがイティルのアードの姿である。

＜各々の時代における人間たちの驚異——まずはイルヤース（エリヤ）[83]——彼に平安あれ——＞

この後は、各時代に生きた比類なき人間の驚異について述べていこう。ひとりはイルヤース——彼に平安あれ——である。彼はアハブ（Aḥab）[84]の統治期に［生き］、イスラエルの子孫の出であった。アハブの圧制は極限に達していた。そこで、イルヤース・ブン・ヤースィーン・ブン・フィン

80）ヴォルガ・ブルガール王国からアッバース朝に派遣された使節団の一員で、イブン・ファドラーンの答礼使節団に通訳兼道案内として同行したテュルク系の人物［イブン・ファドラーン『ヴォルガ・ブルガール旅行記』（家島訳注）、27–29、31–33、192頁］。

81）以下の話はイブン・ファドラーンの記述に基づくが、特に人称を中心に随所に相違が見られる［『ヴォルガ・ブルガール旅行記』（家島訳注）、192–194頁］。

82）『ヴォルガ・ブルガール旅行記』では「ウィースー（Wīsū）」と表記されている。家島氏の注によると、ウィースーあるいはイースーは、フィン・ウゴル系の一民族であり、白海の海岸部とラドガ湖東部周辺に居住していた狩猟民族であった［『ヴォルガ・ブルガール旅行記』（家島訳注）、193、222頁］。

83）旧約聖書の預言者エリヤ。『クルアーン』ではバァル神を信仰する人々を諌める預言者として描かれている［Q37:123–125］。後にムスリムの間では不死という共通の性質を持つイルヤースとヒズルとが同一視され、旅の安全を守ってくれる霊的存在として尊崇を集めるようになった［*EI*²: Ilyās］。

84）イスラエル王国の王アハブ（在位前869年-前850年）。偶像崇拝を広めた暴君として旧約聖書に登場し、預言者エリヤと敵対した［「列王記上」16:29–34］

ハース (Ilyās b. Yāsīn b. Finḥāṣ)[85] が神に呼びかけ（p. 416）アハブを呪詛すると、飢饉が起こった。そこで［イルヤースは神に］祈り、［人々は］救われたが、彼らは再度反逆した。

イルヤースは言った。「神よ、私をこの圧制者たる民から救ってください。」

創造主は、彼に啓示を下した。「しかじかの荒野に行き、目の前に現れたものに騎乗せよ。恐れることはない。」

イルヤースは言われたとおりにその荒野に行き、しばらく待った。遠くに火でできた馬が見えた。イルヤースに近づくにつれ、［馬は］さらに大きくなった。そして彼の前で立ち止まった。イルヤースは馬に乗り、アリーサゥ（エリシャ）・ブン・アフトゥーブ (Alīsa‘ b. Aḫṭūb)[86] に遺言し、民を彼に委ねた。至高なるアッラーは飲食の喜びを彼から奪い、彼は光に包まれた。その馬は飛び立ち、イルヤースを連れ去った[87]。彼は今でも生きており、砂漠や荒野の中で迷った者たちに道を示す。彼の事績は実に驚異的である。

＜ヒズル——彼に平安あれ——について＞

同様に、ヒズル・ブン・アーミール (al-Ḫiḍr b. ‘Āmīl) にも驚くべき事績がある。すなわち、生命の水を飲み、［永遠の］生を得たのである。彼もまた、もろもろの海や草原の中におり、困窮した人々を手助けし、抑圧された者たちを解放する。

次のように言われている。パルヴィーズ王はある者に怒って彼を追放した。ヒズルを連れて来るまでは、その男の顔を見ないと言い張った。男はいくつもの荒野の中を探し回り、神に懇願した。あるとき［男が］荒れ地の中を進んでいると、1人の男を見た。清らかで、美しい姿をしており、麝香の香りがその男から漂ってきた。

［その男が］言った。「どうかしたのか。」

彼は言った。「王が私にお怒りになり、ヒズルを彼の前に連れていかねばなりません。」

［男は］言った。「私がヒズルだ。私がついているから、おまえは行きなさい。」

王の宮殿の門に到着すると、彼は許可を請うて中に入り、跪拝した。ヒズルは立ったままであった。

王は言った。「余に跪拝しないおまえは何者か？」

［ヒズルは］言った。「私は被造物には跪拝しない。私はこの男をそなたの悪から救うために来たのだ。私がヒズルだ。」

そして消えてしまった。パルヴィーズはこの男を丁重にねぎらった。パルヴィーズを讃える際には、このヒズルと会ったことが言われる。

(p. 417) ＜逸話＞

次のように言われている。パルヴィーズは、バフラーム・チュービーンに勝つまで、麝香の水で沐浴し、拝火殿の中に籠り、犠牲を捧げるとの誓いを立てていた。勝利を得ると、海岸に行き、神に跪拝して祈った。それから黄金の盥と黄金の水差しを求め、沐浴を行い、麝香を自らに塗り込

85) テキストではイルヤースの父祖の名は YAMYN b. MḤṢAṢ となっているが、巻末の訂正表およびタバリーの記述 (*Tārīḫ*, vol. 1, p. 234) に従って訂正する。

86) 旧約聖書の預言者エリシャ。エリヤに病を治してもらい、その弟子となった。やがてエリヤの昇天を見届け、その後継者となった。なお、『クルアーン』では他の預言者とともに2ヶ所で名前が挙げられているだけで、彼についての詳しい記述は見られない［Q6: 86, 38: 46; *EI*[2]: Alīsa‘］。

87) エリヤは火の馬が曳く火の戦車に乗って天に昇ったとされる。「彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、2人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上っていった」［「列王記下」2: 11］。

んだ。自らの手で頭を洗っていると、驚くような容姿の女が現れた。女は白い衣服を身につけていた。パルヴィーズは言った。「このような荒野の中にある海岸のほとりに現れたそなたは何者か。私から顔を隠しなさい。」

［女は］言った。「あなたが沐浴できるよう手伝いに来ました。」

それから［女は］金の水差しを取り、彼の頭に水を注いだ。終わると、［パルヴィーズは］言った。「おお、神の母よ。そなたは何者か。」

［女は］言った。「［私は］アナーヒード（Anāhīd）[88]。雲と雨の主である。」

そして、その場から鳥のように飛び立ち、消えてしまった。これは、パルヴィーズの驚くべき事績のひとつとして言われている。これがパルヴィーズとその女の姿である。

＜シャムスーン（サムソン）（Šamsūn）[89]について＞

世界における驚異のひとつが、アンターリーヤ（Anṭālīya）[90]の町の出のシャムスーンである。母親から生まれ出たときから彼の髪は頭の天辺から足まであった。長じると、彼の髪はより強くなった。［彼は］一部隊を敗走させるほどの力をもっていた。人々は、彼に対して手をこまねいていた。ある人物が彼の妻に尋ねた。「どうすればシャムスーンを無力にすることができるのか。」

［妻は］「私は知りません。ですが、聞いてみましょう」と言い、シャムスーンに尋ねた。

［シャムスーンは］言った。「誰であれ私の髪で［私の］手を縛ると、私は力を失う。」

その悪い妻は人々に伝えた。彼らの王は妻に莫大な贈り物を送り、シャムスーンが眠ったときに彼をその髪で縛るよう彼女に頼んだ。妻は彼を縛り上げ、彼らに伝えた。彼らは［家の］中に入り、彼を連れ出し、木の上にくくりつけて拷問を加えた。（p. 418）ついに［シャムスーンはありったけの］力を奮い、鎖と髪と木をまとめて粉砕し、［木から］降りてきた。この民は、彼を崇めるようになった。［シャムスーンは］聖者であったとも預言者であったとも言われている。

＜タンサル（Tansar）[91]と彼のもろもろの驚異について＞

アルダシールの王国に「タンサル」という名の人物がいた。アルダシールの侍従（ḥājib）を務め、テュルク人であった。彼については数々の驚くべきことが語られている。そのひとつは次のようなものである。彼からは常に麝香の匂いが漂い、彼が通りかかった場所はいずれも数日にわたって芳香が残っていた。当時、彼から1本の毛髪を受け取った王は、そのわずか1本の毛によって宝物庫全体が芳しい香りで満たされた。創造主を除き、誰もその理由はわからなかった。一部の者たちは、彼は預言者であり、テュルクの集団からは彼以外に預言者は現れなかった、と言っている。またある者は、創造主が彼にこのような奇跡を授けたのであり、彼は預言者ではなく、聖者だったと言っている。彼に関する驚くべきことのひとつは、宮殿を持ち上げ、他の宮殿の中に運び入れたというものである。

＜ザール・ブン・サームと彼の生まれ持った資質について＞

88）もしくはNāhīdで、ゾロアスター教の水の女神アナーヒターのこと。金星の代名詞でもある。

89）旧約聖書のサムソン。本書の記述は、デリラという女性の奸計によってペリシテ人に捕らえられたサムソンの逸話を基にしているのであろう［「士師記」13–14章］。

90）アナトリア半島南岸の港市。

91）タンサルあるいはトーサル（Tosar）。サーサーン朝のアルダシールの宮廷のゾロアスター教神官。『デーンカルト』中に名前が見え、タバリスターンの支配者に宛てた『タンサルの書簡』によって知られる［*EIr*: Correspondence; Ebn al-Moqaffaʿ; Zoroastrianism; A. Christensen, “Abarsām et Tansar,” *Acta Orientalia* 10, 1932, pp. 43–55］。

アーダムの子らの比類なき者の中に次のような者がいる。スィースターンの地に、ナリーマーンの息子サーム(Sām b. Narīmān)という名の男がいた。[サームの]妻は身籠り、息子が生まれた。その子はタールのように黒く、髪は乳のように白かった。サームは色白で、その子の母親も色白であったため、彼らは子供を忌まわしく思った。[サームは]言った。「私は白く、彼の母も白い。どうして子供が黒いのか。これはもしやディーヴ(悪鬼)の子ではなかろうか。」

そして彼を海のほとりに連れていき、魚に食べさせようとした。創造主のお計らいにより、[霊鳥]スィーモルグ[92]がそこを通りかかり、彼を攫い、東の果ての山上へと連れ去った。その山の名前は「アルボルズ」という[93]。スィーモルグは彼を[自分の]子供たちのそばに置いた。彼は[スィーモルグに]育てられ、大きくなった。

一方、サームは病気になった。人々は、「これは、あなたがあの罪のない乳飲み子にしたことの報いでしょう」と彼に言った。サームは息子を探し求め、ついにその子の情報を得て、かの山の近くにまでやってきた。息子はサームを見ると、父を襲おうとした。サームは(p. 419)彼の手を取り、「おお、魔術(ダスターン)の使い手(dastān-raw)よ!」と言った[94]。

[息子は]彼の言葉を理解しなかったが、長い時をかけて人の言葉を学んだ。彼には息子が生まれた。その名は射手ダスターンの息子ロスタム(Rustam b. Dastān al-Sadīd)であり、その勇敢さはたとえに用いられるほどである。この[サームの]息子は「ザール」と呼ばれた。実に驚くべきことである。黒い顔に白い髪、スィーモルグに育てられ、乳を飲まずに育ち、ロスタムの父となったのだから。

＜斑の男について＞

アーダムの子らの比類なき者の中には、驚嘆すべき事例がある。カイ・ホスロウ王の時代に1人の勇者がいた。名をナリーマーンと言い、ダスターンの息子ロスタムの祖父(曾祖父)であった。彼はトゥルキスターンの地に送られ、中国の天子を殺害しその領土を平定すると、その地域のことについて尋ね回った。人々は彼に言った。「我々のこの国には、世にも奇妙な驚異があります。水のまったくない乾いた荒野にある高い山に、いつも斑の男が現れるのです。水牛(gāw-mīš)のように白黒で、イノシシの牙のように歯が長く、爪はライオン[のようです]。裸で山の上に現れ、声を上げるとすべての動物が集まってきます。彼は、自分だけが知っている泉から動物たちに水を与え、そして姿を消します。」

言われているところでは、ナリーマーンはこの話に驚き、準備を整えてその荒野に向かい、実際にその男を見た。そして[創造という]造物主のみわざに思いを巡らせた。彼は各地でそのことを尋ねてみたが、誰もそのようなことは知らなかった。

＜ある海のものについて＞

ある商人が次のような話をした。ある日、ザンジバルの海の岸辺で、「海から生きものが出てきたぞ」と水夫たちの間で騒ぎが起こった。水夫たちはそれを捕獲し、手と足を縛りあげた。体全体は人間に似ていたが、肌は魚のように鱗で覆われていた。食べ物も飲み物も口にせず、3日後には

92) ペルシアの伝説に登場する巨鳥。『王の書』ではザールの育て親とされ、その息子であるロスタムにも力を貸した[*EIr*: Sīmorġ; 本訳注(5)、423頁、注308]。上掲の注2でも触れたように、アンカー鳥とも同一視される。

93) イランのカスピ海南岸の山脈のこと。最高峰にダマーヴァンド山を擁する。『王の書』で語られる様々な伝説の舞台となった地であり、また霊鳥スィーモルグのすみかとしても知られる[*EIr*: Alborz; EI^2: Damāwand]。

94) ザールの異名である「ダスターン(魔術)」に関しては、スィーモルグがつけたという説もある。

死んでしまった。これは人間に似た海の生きもの（baḥriyān）の１種である。

（p. 420）＜ある海のものについて＞

アンダルスの地のコルドバの町に、目が１つしかないヒンド人がいた。彼は夜、水の中に入っていき、昼まで水底で眠った。まるで魚のように、男は息継ぎをしなかった。この話をとある王が聞き、カイラワーンに行ってこのヒンド人を見た。［王は］「この男に起こっていることは、至高なる造物主の奇跡である」と言った。

＜別の種族について＞

ザンジバルにはカールーン（Qālūn）と呼ばれる山があると言われる。この話はナスナースの章で述べよう[95]。

＜カイ・カーウース＞

比類なき者の１人はカイ・カーウース王である。スライマーンの時代に、ジンたちは彼に従い、彼のために町を１つ建設した。その城壁は真鍮でできていた。彼の驚くべきことの１つは、食事をしても排泄をしなかったことである。彼は勝利者であった。［イブン・］カルビーは、「創造主は、カイ・カーウースに、地面から飛び上がり空中に浮かぶほどの力を与えた」と言っている。カイ・カーウースは「ハゲワシたちの主（ṣāḥib al-nusūr）」と呼ばれる。彼は４羽のハゲタカ（karkas）に乗ったからである。ハゲタカたちは彼の玉座の下に入り、それを運んで雲にまで達した。［だが］彼らは力尽き、［カイ・カーウースは］落下した。その日、彼は排泄した。アブラハの息子である「俗悪の主（Ḏū al-ad‘ār）」[96]に捕らえられ、不随になった。その後ダスターン（ザール）の子ロスタムが彼を取り戻し、アーモルまで運んだ。彼からはスィヤーヴァシュが生まれた。彼はスィーラーフ（Sīrāf）の地に落下した。彼の軍はタバリスターンにいた。彼には水（āb）と乳（šīr）が与えられたため、その場所の名は「スィーラーヴ（Sīrāw）」になった[97]。

＜乳房をもつ男（Ḏū al-ṯadīya）＞

「乳房をもつ男」はアリーの時代の男である[98]。［アリーが］ハワーリジュ派との戦いのためにナフラワーンに来たとき、アリーは、「この戦をおさめるために、乳房のある男を殺して連れてこい」と言った。人々は探したが、見つからなかった。［アリーは］言った。（p. 421）「戦いがおさまった。彼は殺されたのだ」と。

その後、ライヤーン・ブン・サブラ（Rayyān b. Ṣabra）が、彼がナフラワーンの岸辺で殺されているのを発見した。調べてみると、彼の腕には２つの乳房があった。それを引っ張ると指先まで伸び、

95）「カールーン」という名称は不詳。ナスナースは第４章末尾と次の第８部で述べられるが、そこでは関連する言及は見当たらない。

96）９世紀に成立した『ヒムヤルの諸王の冠の書』や、10世紀の『冠の書』では、アブラハの次男アムルがこの称号で呼ばれている。このアブラハは、「双角の所有者」と呼ばれたヒムヤル王サァブの息子である。一方マスウーディーは、カイ・カーウースを捕らえたのは別のヒムヤル王シャミル・ユルアシュと伝える［Ibn Hišām, *Kitāb al-tījān*, pp. 138, 143; al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, vol. 8, pp. 264–265; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-ḏahab*, vol. 1, pp. 267–268］。

97）スィーラーフはペルシア湾北岸の港町。本訳注（4）、491頁、注46を参照。本文で語られるものと同様の語源説は後世の『諸都市辞典』にも見られる［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, pp. 294–295］。なおアーモルはカスピ海南岸のタバリスターンの町。

98）この逸話と同じものが、タバリーの『諸使徒と諸王の歴史』に記述されている［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 3, p. 46］。また、ナフラワーンでのアリーとハワーリジュ派の戦いは659年のことである。

［放すと］再び腕［の元の場所］に戻った。アリー・ブン・アビー・ターリブは言った。「**アッラーは偉大なり**。私は決して偽りを言ったのではない。預言者――**彼に平安あれ**――が、ナフラワーンで忌まわしき男を殺しなさい、とおっしゃったのを私は聞いたのだ。その男の印はまさにこれである。」

＜珍しい新生児＞

双角の所有者の時代、「バービルの地で、ある女がライオンの頭をした子供を産んだ」という報せが届いた。その子は［双角の所有者のもとに］連れてこられたが、まさにその日、その新生児は死んだ。イスカンダルは恐ろしくなった。賢人たちが、「イスカンダルの上昇宮の星めぐりは獅子宮である。ライオンが死ぬときこそ、イスカンダルの死期である」と言っていた［からである］。イスカンダルは泣き、アンムーリーヤにいる母親に手紙を書いた。遺言を残し、金の棺を作った。3日後、［イスカンダルは］ダームガーンで世を去った。その後、軍は2つの派に分かれた。ファールスの人々は、「彼はここで死んだのだから、ここで埋葬すべきだ。どうして彼の棺を世界中巡らせるのか」と言った。［一方］ルームの人々は、「イスカンダルは育った土地の土に葬るべきだ」と言った。彼らはイスカンダル［の遺体］をルームまで運び、そこに埋葬した。

＜テュルク（Turk）の諸部族と彼らの多様な集団について＞

知れ。テュルクたちの部族は数多く、世界のあちこちを支配している。世界を征服することは彼らに約されたこととなり、創造主は彼らにある種の恩恵を施されたので、あらゆる集団が彼らの下僕となった[99]。だが、あらゆる面で忌むべき慣習を有しており、それらはいかなる信条や預言者や導師とも関係がない。息子たちを売る者もいれば、娘たちの頭に何も被らせない者もいる。ベールをかけている女がいても、それはその男の妻である。誓いを立てるときには銅製の偶像を用意し、椀に水を一杯に注ぎ、1片の金と女物のズボンを置く。そうして、「この誓いを破る者は、このズボンのように恥ずべき存在となり、この金のように［青ざめて］黄色くならんことを」と唱える。（p. 422）夢を見た息子を放逐する者もいる。

＜ハルガーフ（Ḥargāh）人[100]＞

中国の向こうに「ハルガーフ」と呼ばれる部族がいる。彼らの力はライオン並みである。姉妹や娘と結婚する。星々を崇拝している。彼らの領地からは、解毒剤やフットウ[101]、巨大な牛がもたらされる。その牛からは旗が作られる。

＜ロッハーム（Ruhhām）人[102]＞

「ロッハーム」と呼ばれる部族がいる。ハザルの向こう側から中国の領域までが彼らの王国である。財と富を有する人々である。彼らの王は「ロッハーム」である。彼の洗濯係のみで一軍が形成

99）テュルク系の人々の活躍については、著者トゥースィーの同時代の状況が反映されている。本書が書かれた12世紀は、テュルク系オグズ族のセルジューク朝がイランとその周辺一帯に成立しており、さらにアナトリアには、同じオグズ系のルーム・セルジューク朝が勢力を拡大していた。

100）Minorskyによると、フェルドウスィーの『王の書』に言及のある、インド付近のどこかにある国の名とされる［*Ḥudūd al-ʻālam*, Minorsky comment, pp. 280–281］。

101）毒入りかどうかの識別に使われた「フットウ」については、本訳注（4）、531頁を参照。

102）テキストではRHMだが、フェルドウスィーの『王の書』に現れる勇者のひとりロッハーム（グーダルズの息子）の一族と解す。

されるほどの軍隊を持つ。ましてや他の者たちではどれほどになろうか。彼の王国全土を見まわしても、貧者は 1 人もいない。

＜ハリーサム (ḤRYSM) 人＞

中国の向こう側には「ハリーサム」と呼ばれる部族がいる。略奪をして人々を食べる。死者を海に投げ捨てる。姦通がまかり通っている。

＜ブルタース (Burṭās) 人＞

ハザルの境域にいる部族である。彼らは王を即位させるとき、死ぬ寸前までその喉を絞め上げる。そして、「何年統治したいか」と問い、その者が答える。その年数よりも長生きした場合には、彼は殺される[103)]。ブルタースの一部はムスリムである。ブルタースとハザルはテュルクの地方に属す 2 つの地域の名でもある。彼らのなりわいは、殺人、略奪、圧制である。

＜タタール (Tatār) 人＞

「タタール」や「チベット (Tabbat)」と呼ばれる部族がいる。彼らには牛の皮でできた礼拝所があり、その中にはシカの角が納められている。彼らは麝香とハラージュ税をブグラージュ人に支払う。子供が生まれるとすぐにその子に跪拝し、「この子はあちらの世界からやってきたばかりで、いかなる罪も犯していない」と言う。金星と土星を崇拝する。この地方には、燃やしてランプの代わりとする石がある。

＜ブグラージュ (Buġrāj) 人＞

「ブグラージュ」はテュルクの 1 部族である。勇猛果敢である。長い口髭を生やしている。彼らの王はアリー家のヤフヤー・ブン・ザイド (Yaḥyā b. Zayd al-ʻAlawī)[104)] の子孫である。ザイドの筆による 1 冊の啓典の書を持ち、その書物に跪拝する。書物の裏にはザイドの挽歌が記されている。ザイドは「アラブの王」と呼ばれる。彼らはアリーを崇拝の対象とみなしている。［アリーの］子孫が（p. 423）大きな目と高い鼻をしていることをその奇跡とみなし、彼らに敬意を払っているのである。

＜ペチェネグ (ビジュナーク) (Bijnāk)[105)] ＞

「ペチェネグ」はテュルクの 1 部族であり、多くの羊を飼っている。その地は雪で覆われている。言われているところでは、ムクタディル・ビッラーの使者[106)]がそこに行った。彼はこう述べている。「［その地の］羊は雪を食べていた。尾は地面につくほど［長く］引きずっていた[107)]。私がブ

103）本書第 4 部の「ハザル」の項で同様の話が見られる［本訳注 (5)、412–413 頁］。

104）シーア派第 4 代イマーム、ザイン・アル＝アービディーンの孫。739 年に父ザイドがクーファで起こした反乱に参加したが鎮圧され、各地を転々とした。やがてホラーサーンで反乱を起こしたが、743 年に総督ナスル・ブン・サイアールが派遣した軍との交戦中に戦死した。ザイド派はヤフヤーをイマームの 1 人とみなす［*EI*^{2}: Yaḥyā b. Zayd］。

105）本訳注 (5)、186 頁で既出。そこでは「ビジュナーク」としたが、以後「ペチェネグ」と表記する。

106）『ヴォルガ・ブルガール旅行記』の著者であるイブン・ファドラーンのこと。以下の内容は彼の記述に基づくものであるが、いくらか混乱が見られる。

107）前掲『ヴォルガ・ブルガール旅行記』では、ここまでがペチェネグ (家島氏の訳では「バジャナーク」) の説明であり、以降はサカーリバ王国で体験した出来事となっている。また話の中に見える「ペチェネグの王」は、同書ではヴォルガ・ブルガールの王である［『ヴォルガ・ブルガール旅行記』(家島訳注)、131、179–180 頁］。

ルガールの境域から［その地方の］中に入ったとき、1日目の夜に地平線が真っ赤になるのを見た。恐ろしい轟きが聞こえた。その後真っ黒な雲が現れ、剣を抜いた騎兵のように［別の雲と］対峙するのを目にした。しばらくの間、こちらの［雲の］塊があちらの塊に襲いかかり、やがて互いに離れていった。私がペチェネグの王に尋ねると、彼は次のように答えた。『我々はあれが何かは知らない。だが我々の祖先は、あれはディーヴの軍で、互いに戦っているのだと言っていた。我々はいつもこのようなものを目にしている』と。」

＜ブルガール(Bulġār)人＞

ブルガールの向こう側には不信心者の集団がいる[108)]。王を見かけると帽子を脇に抱える。誰かが殺人を犯すと、その者をヒースの木でできた箱に閉じこめる。そして、寒さや暑さで死んでしまうまで、大きな柱の上に置きさらす。人々から賢いと認められる［ほどの］聡明な者がいると、彼らはその者の首に縄をかけて木に吊るす。彼らは、「この者は死んで神にお仕えするのがふさわしい」と言う。ブルガールの中にはムスリムの一団がいる。彼らは勇敢で、聖戦を行い、頭を剃り上げている。毛皮で商いをしている。不信心者らは酒を合法とみなしている。ブルガールはイティルの川の岸辺にある。彼らのところから、太陽がクルズム(紅海)に顔を出すところまでは、6ヶ月の行程である。その地方では夜は2時間しかない。その地には、バースィー(BASY)、マルジャー(MRJA)、アズナース(AZNAS)やナフシュー(NḪŠW)といった砦がある。ブルガールからアッラーン[109)]までは2ヶ月行程である。

＜ルース(Rūs)人＞

別の部族は「ルース」であり、彼らはある島にいる[110)]。そこは湿気が非常に多い。スミレのような［芳しい］花の咲く植物が生え、ハチが食べると、蜂蜜ができる。その後、その草は (p. 424) 別の白い花をつけるが、それは悪臭を放つ。それが何であるか誰も知らない。最初の花がそれほどまでに芳しく、次に咲く花がそれほどまでに悪臭を放つとは。

ルースは背が高く、赤ら顔で、色白の部族である[111)]。誰もが短剣を持っている。女はみな、金または木でできた小箱［のような飾り］を乳房に結びつけ、それぞれに1本の輪を通している。女たちはまた、首に金の首飾りをしている。男はみな、1万ディーナールを手に入れると、妻の首に首飾りを1つかける。2万ディーナールあると、2つの首飾りをかける。たくさんの首飾りをかけている女もいる。彼らにとって最も重要な装身具は緑色のガラス玉である。ルースでは、町の通貨はディルハム銀貨ではなく、リスの皮である。それは皮袋のようであり、毛はないが手や足や爪がついている。何か1つでも足りなければ、その皮は偽物である。その地から［リスの皮を］持ち出すことはできず、商品に換えなければならない。そこには分銅(sabīka)以外に秤［の目安になるもの］はない。そこではムスリムも不信心者も豚肉を食べる。家は木でできている。その地からは亜麻布や棒砂糖がもたらされる。その地の大きな町は、キヤーヴァ(KYAWH)[112)]、ジャルニーク

108)『ヴォルガ・ブルガール旅行記』(家島訳注)、186–189頁も参照のこと。

109) 本訳注(5)、382頁参照。

110) イブン・ルスタは、ルースは周囲を湖に囲まれた島に居住していると伝える。この「島」は、ノヴゴロド(原義は「島の町」)を示すと考えられている［Ibn Rusta, *Kitāb al-aʻrāq al-nafīsa*, p. 145; *Ḥudūd al-ʻālam*, Minorsky comment, p. 434］。

111) これ以降の記述は、『ヴォルガ・ブルガール旅行記』と同様である［『ヴォルガ・ブルガール旅行記』(家島訳注)、257–258頁］。

112)『世界の諸境域』でのKWYAH/ KWBABHであろう。「王のいる町であり、そこから様々な毛皮や価値の高い

（JRNYK）、ジャルカ（JRQH）、サルダク（SRDQ）である。

＜スール（SWR）人＞

「スール」はテュルクの1部族である。投げ縄を用いて戦う。縄を投げて外すことはない。男たちはたいそう美しいが、女たちは醜く、貧相で、背が低い。薬草（‘aqāqīr）から酒を造る。スールは彼らの町の名でもある。

＜シャンカーン（ŠNQAN）人＞

トハーリスターン[113]のテュルクの1部族である。たいそう美しいが、短命である。彼らの間では誰も老人にならず、若いうちに死んでしまう。

＜中国（Čīn）人＞

中国人は、ホータン（Ḥutan）人やハターイ（キタイ）（Ḥaṭā）人やブルガール人と同じくテュルクの隣にいる部族で、様々な人々がいる。ハーンフー（広東）を越えた向こう側にいる集団は、死人が出ると、その者が生まれた日になるまで死者を埋葬しない[114]。夫を亡くした女は、腰に縄を巻き、腰を二つ折りに屈める。そして夫の甲冑や武具や馬を彼の墓の上で燃やす。また、息子は父と一緒に食事を取らず、（p. 425）父に会うたびに跪拝をする。みな偶像崇拝者で、経典が1冊ある。誰もがあご髭を剃り落としている。裁判官がおり、その裁定に基づいて事が運ばれる。そこにはヒョウがたくさんいる。［中国人は］羊の頭を殴り殺してから食べる。マギの慣習を保持し、焼きごてを押す。人が死ぬと、その魂は再度別の子宮に宿るのだと言う。中国人たちの顔は明るく、ヒンドの人々とは逆に、あまり病気にかからない。

＜ゴグとマゴグ（Yājūj wa Mājūj）、ナースィクとマンスィク（Nāsik wa Mansik）[115]＞

彼らは人が住む地域の向こう側のテュルクに属す。双角の所有者はそこに至り、一団の人々を見た。彼らは、長いかぎ爪と狼の歯とラクダの口を持ち、体中が毛で覆われていた。彼らは犬のように吼える。世界の端のテュルクの果てるところに、彼らと似た別の部族がいて、「ナーリース（NARYS）」と「マーリース（MARYS）」と呼ばれている。世界は彼らによって荒らされる。

中国の海はゴグとマゴグによって波立ち、ひと波またひと波とこちら側に打ち寄せる。彼らはその茂みの中で繁殖し、人間の姿をしているが、カモシカのように歩き、ブタのような爪先や羊のような毛をしている。目に入るものは何でも食べる。ヤーフェス（ヤペテ）の子孫である。

アムル・ブン・アル＝アースは言っている。預言者は、双角の所有者のことについて尋ねられると、次のように言った。「彼（双角の所有者）はルーム出身の若者であった。ミスルの海岸に行き、イスカンダリーヤを建設した。その後、天使が彼を空中に運び上げて言った。『何が見えるか？』

［双角の所有者は］言った。『2つの町だ。』

［天使は］もう一度彼を運び上げて言った。『何が見えるか？』

剣がもたらされる」と伝えられ、Minorsky は Kūyaba と読んでキエフに比定している［*Ḥudūd al-‘ālam*, p. 189（Minorsky comment, p. 434）］。

113）アム川の中・下流域の南岸部を指す。現在のアフガニスタン北部に相当［*EI*²: Ṭukhāristān］。

114）本訳注（5）、413頁にも同様の記述がある。

115）ナースィクとマンスィクもまた、北方のゴグとマゴグ同様に世界の果てに暮らす民であり、西の果てに「ナースィク」が、東の果てに「マンスィク」が暮らすとされる。

彼は言った。『1つの町だ。』

［天使は］言った。『それが世界だ。それ以外はすべて海であり、「周海」と呼ばれている。創造主は全世界をおまえにお見せになったのだ。』」

［双角の所有者は］犬の顔をした部族を見た。彼らはゴグとマゴグと戦っていた。また、背の低い別の部族を見た。彼らは犬と戦っていた。そして4000にのぼる彼らのさまざまな種族を見た。ある部族は象の耳をしていた。

誰もが自分の寿命を知っており、自分の子孫の目［の数］が1000に達するまで死ぬことはない。

(p. 426) ＜サンジャリー(Sanjalī)[116] の集団＞

彼らは中国の1部族で、ゴグの種族に属する。「中国の海」の岸辺にいる。非常に背が低い。［昼間は］海底に潜り、夜［海面に］上がってきて船の中に入り、また出て行く。誰にも危害を加えることはない。彼らが海面に現れるときはいつも波が荒れ狂う先触れで、人々は船を繋ぎ泊める。彼らが姿を消すと海は穏やかになり、船は解き放たれる。

テュルク人たちについてはこの程度のことを述べておこう。彼らの［住む］諸地方については、適切な章のふさわしい箇所で述べられる[117]。

知れ。アーダムの子らは誰もが一塊の水と土からできている。［色が］黒いか白いかは時と場所の影響による。スラヴ人でも、ハバシャ(エチオピア)の地にやって来て数世代を経ると、黒くなる。ザンジュがアッラーンの地にやって来て数世代を経ると、みな白くなる。アーダムの子らはみなアーダムから、またアーダムは水と土から［つくられた］。

＜様々な集団のうち、スーダン、ヒンド、ザンジュたちなどについて＞

さてこの後は、様々な黒人たちや灼熱の地の諸集団について言及しよう。

知れ。その地方にはいくつもの病がある。だが、薬種や薬草が豊富で、病気に罹ることはなく、明敏になったり、長生きしたりさえする。たとえば象やクジャクやインコやココヤシや種々の薬草のように、ヒンドの地にあるものはどれもすべて良く、驚くべきものである。女も男も腕輪をつけている。鼻を削ぎ落したり、焼きごてをする者もいる。姦通を禁じているカマール(Qamār)の王を除き[118]、姦通が認められている。カマールの王には4000人の女奴隷がいる。ある人は言っている。「カマールの王について私が尋ねたところ、ヒンドの言葉でその者は言った。『おお、彼ほど何も持っていない者がいようか』と。」

彼らの中には裸の者たちがおり、竜涎香を売っている。彼らの主食や食べ物はキノコであり、酒はココヤシから造られる。彼らは背が高い。

＜ハルカンド(Harkand)人の集団＞

116) 本書の「海」の項で触れられる地名［本訳注(4)、498頁］。

117) ここでは仮説法が用いられ、未来のことのように書かれているが、「町」や「地方」については本書第3部で既に述べられている。

118) カマール(クメール)については、本訳注(5)、452–453頁参照。姦通や飲酒を禁じるカマールに関する同様の話は、『インドと中国の諸情報』やイブン・ルスタの地理書にも見られる［『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、第2巻47–48頁; Ibn Rusta, *Kitāb al-aʿlāq al-nafīsa*, p. 132］。クメールにおける姦通に対する死刑については、石澤良昭「カンボジア・アンコール時代の罪と罰――碑文史料に見えた刑罰体系」(『中村治兵衛先生古希記念東洋史論叢』刀水書房、1985年、75頁)を参照。

ハルカンドの島[119]にいる人々である。女も男も裸である。木の上に住んでいる。彼らの食べ物は美味な果物である。

（p.427）＜ある集団＞

別の集団がバルターイール[120]の島にいる。顔は醜く、幅広である。誰も彼らとは話が通じない。彼らは誰とも親しむことがない。

＜ある集団＞

ある島にいる集団は「ターラーン（Tārān）」と呼ばれている。もし彼らがパンを見たら驚くであろう。彼らの食べ物は魚と海水である。彼らの家は船であり、波と風のただ中で翻弄されている。「ここで何をしているのか」と尋ねられると、彼らは「アッラヤタン、アッラヤタン（ALLYṬN ALLYṬN）」と言う。つまり「郷土（ワタン）愛（ḥubb al-waṭan）」である。みなが痩せており、裸である。

［人間は］南に行けば行くほど醜くなり、野獣のように体中に毛が生える。ある王がその地に行き、齢300年の隠者に出会った。「向こうには何があるのか？」と尋ねると、［隠者は］「荒れ地と灼熱じゃ」と答えた。そこの人々は草を食べる。彼らの体は、羊のように全身が毛で覆われている。彼らは臆病である。

＜トゥルスール（ṬRSWL）[121]の集団＞

彼らはヒンドゥスターンの向こう側にいる。彼らのさらに先から中国の地までは、マーンドの王国[122]がある。これらの町には疫病があり、旅人がこの地に来ると死んでしまう。この境域には別の集団がおり、彼らの地では夏も冬も雨が降る。

［ある集団］

ある集団は、カームース（QAMWS）の島にちなんで「カームース人」と呼ばれている[123]。彼らの王が死ぬと、彼らはその遺体を沈香でできた台車に縛りつけ、王の頭を台車の後ろに置き、髪を引き抜く。王の妻はその後ろから付き随い、［王の］頭に土をかける。それから王［の遺体］は四つ裂きにされ、白檀の木でできた箱に納められ、燃やされる。貧者が死んだ場合は、火の中に投げ入れられる。火が彼らの墓である。「魂は［すでに］天に昇っており、肉体は、火が天に向かって運ぶのだ」と彼らは言う。

＜ある集団＞

「ザンジュ（Zanj）」と呼ばれる別の集団は、堕落しており盗人である。いつも〔疥癬を患い、肌を掻いている〕。母親から生まれたばかりの子供にも疥癬があり、死ぬまで続く[124]。

119）ベンガル湾を指すとされる「ハルカンドの海」については、本訳注（4）、497頁参照。
120）ヒンドの海にある山の名として既出［本訳注（4）、520頁］。
121）本訳注（5）、475頁、注623参照。
122）本訳注（5）、475頁、注624参照。
123）地名・部族名ともに不詳。
124）東アフリカ地域の黒人を指す「ザンジュ」が疥癬を患っていることについては、本訳注（4）、490頁に既出。

(p.428) ＜ランジュ (LNJ) の図[125)]＞

それは［ここに］描かれている姿をしている。彼らはザーバジュ[126)]の国に暮らす者たちで、裸で、ひげがほとんどない。彼らの言葉を知っている者は誰もいない。船の脇にやってくると、ココヤシを持ちこみ、鉄と交換する。〔泳ぎが〕上手く、彼らが何か盗んでも、矢は彼らに届かない。

＜ミルハーン (MLḤAN) の図＞

彼らは「ミルハーン」と呼ばれる。白人が彼らの手に落ちると、彼らに食べられてしまう。彼らが住んでいるのは茂みの中である。臆病である。彼らの栄養源はサトウキビの茎である。

＜ナイヤール (NYAR) の図＞

彼らはヒンドの者で、「ナイヤール」と呼ばれる。背が高く、頑健で力が強い。男ひとりで象を捕らえる。彼らは矢を射る。人間を食べる。顔は美しいが、とにかく真っ黒である。彼らにまつわる話は以上である。

＜ヌビア (Nūba) ＞

マグリブの境域にいる別の部族は「ヌビア」と呼ばれる。彼らは姦通し、それを合法だとみなしている。かの地に行った人が語ったところによると、いわく、「その時代、彼らの王は女であった。彼女は海辺の見晴らしのよいところに座しては、かの地に着いた旅人をその望楼に連れて行き、姦通を行っていた。ある男がそこに偶然立ち寄った。この女は彼と戯れていたが、男は、『ムハンマド——**彼に平安あれ**——の信仰において、姦通は禁じられている』と言った。この女は剣を振りかざし、男を殺そうとしたが、他の女たちが止めに入った。彼女らは、男を望楼から海に放り投げるということで一致し、男は放り投げられた。彼は泳いで脱出し、「カタカタ (QṬQṬH)」という名の町にたどり着き、ある老人の家に入っていった。

老人は言った。『おまえは私のしもべになった。我々の町では、誰かの家に入った者は、その家の主のしもべになるという習慣がある。』

男は言った。『私は、姦通をしないと、私の血［を流すこと］が合法だとみなされるような国にいた。**アッラーに讃えあれ**。私は［今度は］家に入ってきた者を奴隷として売り払うような貪欲さにあふれた町に来てしまった。』」

(p.429) ＜ラマーディーヤ (RMADYH) の図＞

「ラマーディーヤ」はヒンドにいる部族で、裸である。他の者たちとは異なり、毛が長く、誰かが死ぬと、その死者の毛を生きている者たちの毛に結びつける。人間の頭蓋骨を使って水を飲み、それで寿命が伸びると言う。

カラフの島[127)]には残虐な部族がいる。彼らは人間を見つけるとその首を引き抜く。嫁入り道具を整える際、その頭蓋骨を娘の持参品にする。女たちの婚資として人間の頭蓋骨を与えるのである。彼らは象の肉を食べる。これが「ラマーディーヤ」の図である。

---

125) 挿絵があったため、このような表現になっている。以下同様。

126) マラッカ海峡のザーバジュ王国については、本訳注 (4)、496 頁、注 82 参照。

127) カラフもしくはカラーフバールと呼ばれたマレー半島の港市については、本訳注 (4)、496 頁、注 81 などを参照のこと。

［ザンジバルのヒンド人］

さて、ザンジバルのヒンド人は大部分が荒野に住んでいる。テュルク人のように顔が幅広く、鼻が平たい。［住んでいる地域が］遠くなれば遠くなるほど、より臆病になり、野獣のようになる。果ては、木の上に住んでいるほどである。姿かたちが変異した部族もいる。彼らは猫に似ている。ザンジバルにいる部族は、牛のように毛が生えており、人間を怖がる。彼らのうちのある部族は海岸に産品を持ち込み、［品を］置いて海の中に潜っていく。商人たちはスオウやアカネや鉄を置き、代わりにココヤシ、沈香、樟脳、ヒョウの皮、銀や金を取って戻っていく。彼らは鉄やスオウを手にし、また海に潜る。彼らの間ではこれが公正な取引なのである。彼らが鉄やスオウで何をするのか、水の中でどのように暮らしているかは誰も知らない。

＜ズット (Zuṭṭ)[128] の図＞

「ズット」は黒く、ひげが薄く、醜い部族である。アブドゥッラー・ブン・マスウード (‘Abd Allāh b. Mas‘ūd)[129] は言う。「私は、ジンの夜 (layla al-jinn)[130]、預言者――彼に平安あれ――と一緒にいた。ディーヴたちはハゲタカのように群をなしてやってきて、迷惑にも預言者の頭の上に続々と舞い降りてきた。私は、預言者がけがをされないようにと気を揉んだ。さらに、ズットの部族に似たヒンド人の一団が大勢でやってきて、預言者と臣従の誓い (bay‘a) を行い、そして戻っていった。」

［サランディーブ人］

ヒンド人たちの中で節度があるのは、サランディーブの人々である。彼らの王は公正な人物である。誰かが裕福な者に無心をし、［施しが］渡されればそれで良いが、そうでなければ線が引かれる。その線は彼の牢獄となる。もし彼が［牢獄から］出てくるようであれば、サランディーブの王はその 2 倍の財産を彼から取り上げる。

（p. 430）ヒンド人のいくつかの種族に関しては、この程度のことを述べておこう。そうすれば人は創造主に対して感謝をするであろうし、美しい姿かたち、白い肌、清らかな信仰、快適な居住地や気候など、創造主が我々に対してどれほどの恩恵を与えてくださったかがわかるであろう。恩恵の与え手に感謝せよ。

＜人間あるいはジンの範疇に属するナスナース (Nasnās)[131] について＞

128）「ズット」は初期のアラビア語史料などで言及される人々で、北西インドに居住する「ジャート族」のアラビア語転訛とされる。サーサーン朝の時代には既に、彼らの一部がペルシア湾岸に移住していたとされ、「ズット」はこれらの移住者を指しても用いられた［*EI*^{2}: al-Zuṭṭ; Djāṭ］。

129）最初期に改宗したムハンマドの教友。ムハンマドの身の回りの世話をし、ムハンマドから直接神の啓示の内容を聞いていたという。メッカの人々の前で『クルアーン』を読誦した最初の人物とされる。ムハンマド死後も大征服時代に軍事・政治の両面で活躍したが、やがて第 3 代カリフ、ウスマーンとの不和により表舞台から姿を消した［*EI*^{2}: Ibn Mas‘ūd］。

130）預言者ムハンマドが『クルアーン』をジンたちに読誦して聞かせたという「ジンの夜」に関しては、『クルアーン』に「わたしにこう啓示された。一団のジンが、（クルアーンを）聞いて言った」［Q72: 1］とあり、またハディースにも多く伝えられている［ブハーリー『ハディース』、援助者達の功績: 32; ムスリム『日訳サヒーフ ムスリム』、第 1 巻 314–316 頁］。

131）「ナスナース」は、アラビア語文献などに見られる「半人」。人間の顔を持ち、直立歩行し、尾はなく、長く濃い毛に全身が覆われている。毛の色は一般的に赤褐色とされる。また言葉を操る能力を持つ。「ナスナース」の伝承の起源は、インド洋交易に従事した商人が東南アジアで目撃したテナガザルなどに求められるとされる［*EI*^{2}: Ḳird］。

知れ。いろいろな地域で「ナスナース」がいるという話は絶えない。もしそれがアーダムの子ら（人間）の一種であるならば、姿かたちが変異したサルか類人猿（būzīna）のようなものであろう。彼らは荒れ地に住んでいる。いろいろな書物にナスナースについての話があり、あらゆる地域に彼らに似た姿の部族がいる。南の境域では、彼らは人間の顔をしており、背丈は 12 アラシュもあり、黒いものと白いものがいる。彼らに知性はないが、狩猟をし、寿命は人間の 3 倍にもなる。イエメンの向こう側にいる［人間の］部族は、彼ら（ナスナース）を獲って食べる。

＜逸話＞

言われているところによると、ある一団がナスナースを狩りに出かけ、3 匹のナスナースを見つけた。［そのうちの］1 匹が捕らえられ、殺された。残りの 2 匹は逃げて木々の中に隠れた。［最初に捕らえた］1 匹を殺している最中に、ある男が「こいつは太っているし、血は赤いぞ」と言った。すると、隠れていた 1 匹が、「それは雀を食べたからさ」と言った。そのナスナースも捕らえられ、殺された。殺した男は、「黙っていたらよかったのに。この哀れな奴が何も言わなかったら、誰もつかまえることはできなかったろうよ」と言った。すると、3 匹目のナスナースが木の下で「**私は黙しているよ**」、すなわち［ペルシア語では］「私は黙っている」と言った。彼も捕らえられて、殺された。こういったことがナスナースについて言われている。

＜逸話＞

フサーム・ブン・クダーマ（Ḥusām b. Qudāma）は次のように語っている。「私の祖父はシフル[132]にいた。彼は客として招かれた。ある日、（p. 431）彼らは狩りに出かけ、祖父を一緒に連れていった」と。［フサームの祖父は］言う。

「私は、一本腕で一本足、顔が半分しかない人物を見た。彼は、『**お助けを、お助けを**』と言っていた。私は彼から逃げた。私の仲間たちが犬とともにやって来て、『獲物はいたか？』と聞いた。私は言った。『こういった風貌の男を見たので、逃げてきました。』

彼らは笑って、犬を放った。しばらくして、［犬たちが］そいつを引っ張ってきた。私は言った。『**アッラーに栄光あれ**。言葉を話す人間をあなたたちは食べてしまうのですか？』

彼らは言った。『こいつは動物だ。特別な胃があり、反芻するのだ。それに人間に情けをかけない。』」

これは驚くべき話である。

＜別の種族＞

「ワバール（Wabār）[133] のナスナース」は、ワバールとマフラ[134] の地にいる者たちである。ワバールは木々と川に満ちた場所であった。だが創造主は彼らにお怒りになり、彼らを変異させてしまわれた。あるものは「半裂け男（šiqq）」と呼ばれ、またあるものは「へび足巻きつき人間（dawāl-pā）」と呼ばれる。「半裂け男」についてはすでに述べたとおりである[135]。「へび足」は、次のような姿で創造された者たちである。顔は人間の顔に似ているが、手は犬の手で、胴体は人間で、蛇のよう

132）インド洋に面したアラビア半島南岸の町［本訳注（4）、452 頁、注 53］。

133）ナジュラーンとハドラマウトの間にあり、アード族やサムード族、ジンの居所とされている土地［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 37］

134）本書第 4 部の「町」の項（本訳注（5）、465 頁）に既出。

135）前項の逸話に見られる「一本腕で一本足、顔が半分しかない人物」のこと。

な長い尾がある。上半身は人間のようで、下半身は蛇のようである。彼らはとび跳ね、尾で人の体に巻きつき、締め上げる。そして喉を塞いでその血を吸うのである。

［第 5 章］　人間とその位階について

この後は、アーダムの子ら（人間）の学識上の位階やその序列について、いくつかの節を述べていこう。あるものは、預言者たちが有する預言者性のように神から授かるものであり、またあるものは美しさや力のように［先天的に］受け継がれるものである。さらにあるものは、法学や医学やその他の学識のように、［後天的に］獲得され学習されるものである。

まず、預言者性や神にまつわるもののすばらしさについて言及しよう。

［預言者たること］

至高なるアッラーのいわく、「アッラーは何処で（また如何に）かれの使命を果たすべきかを、最もよく知っておられる」［Q6: 124］。すなわち［ペルシア語では］、神は（p. 432）使徒性を誰に与えるべきかを最もよくご存じである、ということである。「これはアッラーの恩恵で御心に叶う者にそれを授ける」［Q57: 21］とあるように、［神は預言者性を］イブラーヒームにお与えになった。彼の父は偶像彫りであった［にもかかわらず、である］。また、カンアーン（カナン）（Kan‘ān）には与えられなかったが、その父は使徒たちの長（šayḫ al-mursalīn）ヌーフであった。

知れ。すべての使徒の始まりにして礎は、人類の父にして、アッラーの純粋性たるアーダム――彼に平安あれ――である。［神は］彼を土から創造され、側近の天使たちに、彼に跪拝するように命じられた。すべての天使は跪拝したが、イブリースのみ跪拝しなかった。至高なるアッラーは彼にお怒りになり、彼を罵ってその姿を変えられた。天使たちが跪拝から顔を上げると、イブリースの顔が黒くなっているのがわかった。彼らは畏れ、もう 1 度跪拝した。このため、跪拝は 2 回行うのである。その後、アーダムは玉座に座り、眠った。創造主はアーダムの左脇からハウワー（イヴ）をお創りになった。そしてアーダムに、「アーダムよ、女は曲がっている。彼女をまっすぐな目で見てはならぬ」とおっしゃった。男たちが女に心惹かれるのは、女は楽園で創造され、アーダムは地上で創造されたがためである。その後、ハウワーがアーダムに対して不遜になったので、至高なるアッラーはアーダムにあご髭を創造された。こうしてハウワーの心に畏怖が生じるようになった。アーダムからシース（セツ）が生まれ、その子孫が増えていった。［神は］預言者や至高なるアッラーの使徒をそれぞれの集団に送られた。その最初がアーダムであり、その最後はアラブ人のムハンマド――彼に平安あれ――である。

＜選ばれし者たる預言者ムハンマド――彼に平安あれ――の気高さについて＞

知れ。ムハンマド・ブン・アブドゥッラー・ブン・アブドゥルムッタリブ――彼に平安あれ――は最後の預言者である。彼は「預言者たちの封印（ḫātam al-nabīyīn）」と呼ばれる。創造主が［地上に］送られた諸々の書にも記してあり、その名は「ムハンマド（Muḥammad）」、「アフマド（Aḥmad）」、「ハンマード（Ḥammād）」と呼ばれている。また、あらゆる預言者がもろもろの集団に呼びかけ、次のように知らせている。「我々の死後、アフマドという名の預言者がやって来て、神像や偶像を破壊し、諸王の財宝を手に入れて自身の集団に分配するだろう。彼はマッカで生ま

れ、マディーナに移住し、埋葬の地は（p. 433）ヤスリブであろう。彼の王権はシャームにあるだろう。彼の共同体は世界中に広がるだろう」と。そのため、ユダヤ教徒やルームの学識者たちはマディーナに行き、あわよくば彼に会おうと、その地域、特にハイバルに居を定めたのである。彼が預言者たることの真正さについて、その徴や驚異が示されなかった時代はひとつとしてない。それは本書の各章でも見られることである。

＜逸話＞

次のように伝えられている。ガズナのスルターン・マフムードはヒンドゥスターンの地を征服した。彼はその国の数人の賢人を選び、彼らが世界中で目にした驚異について尋ねた。1人が言った。「私は、ある時代に地震が起こったことを覚えています。石造りのイーワーンやドームがすべて壊れてしまいました。我々のムルターン[136]の町には、1体の偶像があります。その像は1000年も玉座の上にあり、[もとは] 天からやって来たものでした。しかしその晩、俯せに倒れてしまいました。私にはどうしてだかわかりません。」

スルターンは言った。「それは、ムハンマド・ブン・アブドゥッラーが母から生まれた晩だ。コヘスターンではシャブディーズの山[137]が崩れたのだ。」

別の賢人は言った。「ある日、私は空の月が2つに割れたのを見ました。人々は恐れ、『世界の終わりだ』と言いました。しばらくして、2つのかけらは元に戻りました。私にはどうしてなのかわかりません。」

マフムードは言った。「不信心者たちが預言者に対して、月を2つにしろと要求し、彼はそれを実行したのだ。」

このことについては図像の章ですでに述べられている[138]。

＜逸話＞

アフマド・ブン・アブドゥッラー・アル＝マクサール・アル＝マッスィースィー（Aḥmad b. ʻAbd Allāh al-Makṯār al-Maṣṣīṣī）は言う。

「私は多くの信者とともに、イフリーキヤへ聖戦に赴いた。私たちはその地を征服した。ある日、『敵が来たぞ』という叫び声が起こった。私たちは捕虜として捕らえられ、ルームの町へ連行された。そして籠に入れられて、鎖で井戸の中に下ろされた。底へ着くと（p. 434）、捕虜たちがいる大きな町があった。

ある日、衛兵が入ってきて、次のように言った。『吉報だ。王に男児がお生まれになり、[王は] 捕虜を解放するとお誓いなさった。』

そこで私たちはみな外に出された。それぞれが蝋燭を手に持ち、ゆりかごの前を通り、銅でできた修道院へたどり着いた。そこには銅製の1本の柱があり、その下には大理石でできた貯水池があり、噴水から大きな水柱が吹きあがっていた。頭にターバンを巻き、剣帯に剣を差し、槍を手に持ち、馬にまたがった男の像があり、噴水の水がその像に降り注いでいた。像の両側にはさらに2つの像があった。そこには修道士が1人座していた。彫像の周囲には、神しかその価値を知ることが

136）スィンド地方の町であるムルターンについては、本訳注(5)、466頁などで既出。

137）シャブディーズはホスロウ・パルヴィーズ王の馬の名。イラン西部のケルマーンシャー近郊にある、王と馬の彫像のあるターケ・ボスターン遺跡を指す。本訳注(7)、499頁、注1なども参照。

138）本訳注(7)、507–508頁参照。

できないほどの金製品や宝石が並べられていた。人々は赤子をその場所へ連れてきた。そして偶像に向かって跪拝し、その水で赤子を洗い清め、戻っていった。私はその修道士に尋ねた。『この像や、この修道院に刻まれている碑文は何ですか？』

彼が言った。『おまえはどこから来たのか？』

私は『遠い国からです』と答えた。すると彼は次のように言った。『もしおまえがルームの町の出であるならば、イーサーの像であると私は言おう。もしおまえがよそ者で、真実を述べてほしいと望むならば、最後の預言者にして最後の使徒であるお方の像であると言おう。アラブの預言者が剣でもってシリア（Sūrīya）[139]の民に戦いを挑む。またこの２つの像は、その方の補佐役の像だ。彼らは剣でもってシリアの民に勝利を収める。』

私が、『なぜ彼の頭上に水が降り注いでいるのか』と尋ねると、彼は、『このお方が清浄を好んでいるからだ』と言い、さらに私が『その碑文は何か』と尋ねると、『このお方の子孫や親族から出た少年がこの地に到来し、征服するであろう、と書かれている』と彼は言った。」

アフマド・マッスィースィーは［続けて］言う。「私は思わず感涙し、その像の前で跪拝した。そして、『私はこの像が誰だか知っています。ムハンマド――彼に平安あれ――の像です。両側のものはアブー・バクルとウマルの像です』と言った。そして私は戻ってきた。」

「私はよくこう言ったものだ。『アッラーに讃えあれ。不信仰の地においても、ムハンマド・ブン・アブドゥッラー――彼に平安あれ――をよすがとして暮らしている者たちがいるのだ』と。」

その数日後、ムゥタスィムはシリアを攻撃し、その地を征服した。そして、ルームの王の妻子を戦利品として持ち帰った。

様々な書物にある預言者たちに関する話を引用してきたが、ここではこのくらいで十分であろう。次に、僭称者（mudda‘ī）たちを警戒すべきことについて述べていこう。

（p. 435）＜預言者――彼に平安あれ――の後、預言者性を主張し偽った者たちについて＞

知れ。［神の］使徒（ムハンマド）――彼に平安あれ――の後には僭称者たちがいた。彼らは［自身の］預言者性を主張し、ある者は殺され、ある者は吊るされた。

最初の者は大嘘言者ムサイリマ・アル＝ハナフィー（Musaylima al-Kaḏḏāb al-Ḥanafī）[140]であった。アブー・アル＝ザルカー・サフム・アル＝ハスアミー（Abū al-Zarqā Sahm al-Ḫaṯ‘amī）[141]は次のように言っている。

ムサイリマはまず、バーザールを歩きまわって様々な呪文を唱えては、まやかしやペテンの知識を手に入れようとしていた。ある日、彼は卵を酢の中に投じて柔らかくした。［その卵を］引き延ばし、口の細い長首の瓶の中に入れた。その後、卵は冷たくなり、乾いて、もとの形に戻った。彼

139）前近代には、地中海東岸のパレスチナを含む歴史的シリア地方は「シャーム」と呼ばれるのが通例であった。本書でも主に「シャーム」が用いられており、「シリア」とは訳さずに「シャーム」のままにしている。「スーリーヤ」と呼ばれるシリアの１都市も古くからある一方で、地方名としての「スーリーヤ」も一部の地理書などに見られ、たとえばマスウーディーが「シャーム」の同義語として用いている［al-Mas‘ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, pp. 157–158; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 280］。本訳注では、「スーリーヤ」に関連する「シリア人・シリア語（sūrī）」は、キリスト教徒のシリア人やアラム語方言のシリア語を指すと考えて「シリア」と訳出しているため、地名に関しても「スーリーヤ」に限り、「シリア」と訳す。

140）アラビア半島中央部、ヤマーマ地域のハニーファ族出身の偽預言者（632/3年没）。キリスト教の影響が強い独自の布教活動を行ったと言われている［*EI*^{2}: Musaylima b. Ḥabīb］。

141）テキストではAbū al-WRQA SHYM al-Ḥanafīとなっているが、同様の逸話を伝えるジャーヒズの『動物誌』に従い、訂正する［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 4, pp. 369–378］。ただし、この人物の詳細については不明。

はそれをとある分別なき部族のところへ持って行き、「これは私が起こした奇跡である」と言った。無知な彼らは、彼に従うようになった。

翌日、彼はハトの羽を切り取り、「私はこのハトの羽を直して、飛べるようにしてみせよう」と言った。すると人々は、「もしおまえにそれができるなら、私たちはおまえを信奉しよう」と言った。その後、[ムサイリマは] そのハトを家へ連れ帰った。[彼は] 傷ついていないハトの羽を隠し持っていた。そして、傷ついていない羽の根元を羽が生えていた穴に差し込んで固定し、[ハトを] 外へ持ち出して飛び立たせた。その部族は彼に従うようになった。

その後、彼は次のように言った。「今夜、天使が私のところへやってくる。その天使をまじまじと見た者は盲人となる」と。そして、青い旗をこしらえ、様々な美しい色を用いて尾や翼を作り、長い縄をそこに結びつけた。闇夜の中で、人々はみなじっと目を凝らして待っていたが、明け方までにはすべての者が眠りに落ちた。そこで [ムサイリマは] 旗を立てた。風がその内部へ吹き込み、高く持ち上げた。ヤマーマの民は起き上がり、「天使が降臨したぞ」という叫び声をあげて、みな家の中に逃げ込んだ。こうしてヤマーマの民は、彼が預言者であると信じるようになった。その後、誠実なるアブー・バクルがあらゆる聖戦を行い、ムサイリマを殺害した。

彼(ムサイリマ)の死後、アル=ムフタール・ブン・アビー・ウバイダ(al-Muḫtār b. Abī ‘Ubayda)[142] が [自分は] 預言者であると主張した。

ある人が彼のもとに行き、クッションに座った。[ムフタールは]「先ほどまでそのクッションに座っていたのが誰だかわかるか?」と言った。(p. 436) [男が]「いいえ」と答えると、[ムフタールは]「ジブリール——**彼に平安あれ**——だ」と言った。やがてこのことが知れわたったが、彼もまた斬首された。

ある男がムギーラ・ブン・シュゥバ[143] に、アリー・ブン・アビー・ターリブのことについて尋ねた。[ムギーラは]「私が答えたら、おまえは我慢できないだろう」と答えた。男は「我慢します」と言った。そこで [ムギーラは] 預言者たちについて述べ、アリーを彼らよりも優れた人物だとした。男が「アリーとムハンマドのうち、どちらが優れているのですか」と尋ねると、「**アリーはムハンマドと同等である**」と [ムギーラは] 答えた。みなが「あなたは嘘つきだ」と言ったので、ムギーラは言った。「おまえは我慢できないだろうと私は言ったではないか。」

＜逸話＞

ルシャイド・アル=ハジャリー(Rušayd al-Hajarī)[144] は [自身が] 預言者であると主張した。彼はハサン・ブン・アリーに言った。「私がアリーにお目にかかれるよう計らってください。」

[ハサンは] 言った。「アリーは死んだのだ。」

[ルシャイドは] 言った。「**いや、神かけて**、アリーは死んでなどいません。彼は今も生きていて、服の中で汗をかいているのです。」

142) 第2次内乱中の685–687年に、イブン・ズバイルの支配下にあったクーファで親シーア派の反乱を起こした人物。アリーの子ムハンマド・ブン・ハナフィーヤを「マフディー」として奉じ、自らはその代理人であると主張した。天使ジブリールやミーカーイールが自分のもとを訪れたというムフタールの言葉が残されている。イブン・ズバイルの弟、ムスアブが総督を務めていたバスラの軍勢との戦いに敗れ、クーファの城砦に籠城した後、反撃に出て戦死した [*EI*²: al-Mukhtār b. Abī ‘Ubayd]

143) ムハンマドの教友の1人で、カリフ・ウマルの時代にバスラ総督、後にクーファ総督を務めた。詳しくは、本訳註 (5)、455頁、注483参照。

144) テキストではRāšidとなっているが、よく似た逸話を伝える ‘Abd al-Karīm al-Sam‘ānī (1166年没) の『系譜』に従って修正した。彼はクーファの出身で、再臨 (raj‘a) を信じていたという [al-Sam‘ānī, *al-Ansāb*, Ed. ‘A. ‘U. al-Bārūrī, Dār al-Jinān, Beirut, 1988, vol. 5, p. 627]。

ハサンは言った。「おまえは嘘つきだ。」

このことがズィヤード・ブン・アビー・スフヤーン[145)]のもとに知らされると、彼はルシャイドを絞首刑に処した。

ここではこのくらいを述べておこう。そうすれば、アッラーの使徒であるムハンマドの後に預言者は存在しないということがそなたにわかるであろう。さて、予言師（kāhin）たちのことを述べよう。

＜予言師たちと彼らの境遇について＞

次のように伝えられている。イスカンダルの母アンムーリーヤ[146)]はイスカンダルを産むと、彼を敵から隠した。［イスカンダルが］大きくなると、彼女は彼を聖堂に送った。

美しい 1 軒の館があった。毎年、人々がそこに集っていた。イスカンダルはその館の中に身を隠した。人々が帰ると、［イスカンダルは］もう 1 つの館の中に入った。説教壇があり、1 冊の書物を脇に抱えた老人がいた。［老人は］言った。「イスカンダルよ、この館に入ってはならぬ。おまえの足は干からびてしまうぞ。」

［イスカンダルは］「なぜ、あなたの足は干からびないのか？」と言い、館に入った。

［老人は］言った。「この書物を見てはならぬ。盲目になるぞ。」

［イスカンダルは］言った。「なぜ、あなたは盲目にならないのか？」

老人は言った。「おお、若者よ。おまえは私［の出した問い］に答えた。さあ、私の座に就くがよい。」

［イスカンダルは］「私の望みはそのようなことではない」と言った。

老人が「おまえの望みとは何だ？」と聞くと、［イスカンダルは］「私は父が誰であるか、そして誰から生まれたのか知らないのだ」と言った。（p. 437）老人は書物を開いて、イスカンダルに渡した。そして次のように言った。「これを読みなさい。そうすれば、1 年のうちにあらゆることがわかるようになるであろう。」

イスカンダルは 1 年間、その本を読み続けた。老人の姿は見えなくなった。人々がやってきたが、老人は見つからなかった。彼らはイスカンダルに向かって言った。「我々の長老に何をしたのか？」

［イスカンダルは］言った。「知らない。消えてしまったのだ。彼は私を自身の代わりに座らせた。」

人々は言った。「彼は毎年この書物から、その年に起こりうるあらゆる凶事と吉事を私たちに教えてくれていたのだ。」

イスカンダルは、「私もあなたがたにお教えしよう」と言い、翌年までに起こる様々な出来事を述べた。その後、彼は言った。「私は予言師ではなく、ここに留まることもできない。なぜなら、私が東も西も［世界中を］巡ることや、私にはアンムーリーヤという名の母がいることをこの本の中で見つけたのだ。」

彼らは「なんと、そのお方は我らの王妃である」と言って、彼を彼女のところに連れていった。彼女は彼を見て［息子だと］気づくと、イスカンダルに王国を渡した。

＜逸話＞

145）ウマイヤ朝カリフ、ムアーウィヤの信頼を得て、バスラ総督やクーファ総督を歴任した［本訳註（5）、455 頁、注 484］。

146）本書の既出箇所では、「アンムーリーヤ」はイスカンダルの母の名ではなく、彼女が暮らす町の名として言及される［本訳注（5）、386 頁、433 頁］。

次のように言われている。アズガル（‘ḎĠL）の境域では、ある儀式（‘īd）が行われる。彼らには1体の偶像がある。彼らの帝王がやってくると、［王は］1杯の果実酒を飲み干す。そして、剣［先］を自身の腹にあて、剣が彼の背中を貫くまでそれに寄りかかる。そして凶作か豊作か、また暑くなるか寒くなるかなど、その年に起こるあらゆることを人々に教える。その後、剣が彼［の体］から引き抜かれる。［王が］言ったことはそのとおりになる。

この逸話の意図は、予言師たちは［これまで］数多く存在してきた、という点にある。こうした話を知れば、そなたは真理と偽りを見極めることができるであろう。なんとなれば、これらはすべてディーヴの奸計なのだから。

＜逸話＞

ガンド（ĠND）の人々には、高い山の上に偶像寺院がある。彼らはそこに行き、酒を飲む。すると、「ファグファーラ（FĠFARH）[147]」と呼ばれる1人の老人がやってくる。人々は山の頂から鎖を1本かける。その老人は鎖を伝って偶像寺院の屋根に上り、3回手を叩く。彼は3つの石を持っており、1個ずつ（p. 438）各方向に投げる。しばらくすると、かぎ爪を鎖にかけて下に降り、意識を失う。人々は彼を持ち上げて偶像の前に降ろす。そして人々が彼に様々なことについて尋ねると、［老人は］不作や豊作について知らせ、人々はそれを書き記す。

こういったことは天文学の原理か、あるいはディーヴの教唆によるものであり、彼はそれらを通じて情報を得ているのである。

＜逸話＞

知れ。預言者――**彼に平安あれ**――の時代に、アイハラ・アル＝アスワド（‘Ayhala al-Aswad）[148]が［自分は］預言者であると主張した。彼は奇術を行う予言師であり、しばしば驚くようなことを見せびらかしていた。彼の言葉を聞いた者はみな、彼に従った。やがて彼はサヌアーに行き、2万人の男が彼の信者になった。彼はバフラインに至るまでのイエメンの民を服従させた。イエメンの王を殺害し、王妃を力づくで奪った。アブドゥッラー・フィールーズ・ダイラミー（‘Abd Allāh Fīrūz Daylamī）[149]は次のように述べている。

「預言者――**彼に平安あれ**――は、彼（アイハラ）を殺すため私を派遣した。私はサヌアーで彼を見た。軍が彼の周りを取り囲み、彼はその真ん中で手に1本の槍を持って立っていた。彼はイエメン王の馬を求め、その槍を馬の喉に突き刺し、馬の頚脈を切った。そして馬を放した。馬からは血が流れ続けていたが、その馬はサヌアー中を駆け回った。［アイハラは］その後1本の線を引き、［自身は］線の内側に立った。線の外側には1頭のラクダを用意した。ラクダの頭を線の内側に引き入れると、その線上でラクダは死んでしまった。何頭ものラクダが同じようにして［殺された］。やがて、［自分の］頭を線の上に置き、しばらくして顔を上げて言った。『ディーヴが私に次のよう

147） 中国の天子（faġfūr）のことか。「天子（faġfūr）」については本訳注（4）、502頁、注116に既出。

148） 巻末の訂正表に従う。イエメンのマズヒジュ族出身で、第1次内乱の指導者の1人とされるアル＝アスワド・ブン・カアブ・アル＝アンスィー（al-Aswad b. Ka‘b al-‘Ansī）のこと。本名はアイハラ、もしくはアブハラ（‘Abhala）といい、予言師として人々の支持を得た。632年に反乱を起こし、サヌアーに攻め込んで、ムハンマドと同盟関係にあったイラン系の支配者を殺害した。しかし、それからわずか1～2ヶ月後には、かつて協力者であったカイス・ブン・アル＝マクシューフ（Qays b. al-Makšūḥ）や、フィールーズ・アル＝ダイラミー（Fīrūz al-Daylamī）らによって殺害されたと言われている［EI^2: al-Aswad b. Ka‘b al-‘Ansī］。

149） テキストでは ‘Abd Allāh b. Fīrūz Daylamī となっており、フィールーズの息子（アブドゥッラー）が語っているかのように書かれている。しかし、この発話者がアイハラを殺害した人物、すなわちフィールーズ本人であることは間違いないので、父子関係を示す「イブン」を省略する。

に言っている。「ダイラム族（ダイラミー）の子の腕を切り落とせ、脇腹に焼印のある男（マクシューフ）（makšūḥ）[150] の首を打て」と。』」

フィールーズは［続けて］言う。「私は怖くなり、人々の背後に逃げ、身を隠した。マクシューフは私と一緒にいたので、私は彼を隠れさせた。どうやってディーヴが彼に知らしめたのか不思議でならなかった。その後、私はイエメン王の妻のもとに向かい、彼女に言った[151]。『あの予言師はあなたに横暴を働き、イエメン王からあなたを奪ってしまった。私に彼を殺害するよう命じてください』と。彼女は私を家に連れていき、夜になるまで隠してくれた。［アイハラが］眠りにつくと、（p. 439）彼女は私を彼のところに連れていった。私は片目を開けて眠っている奴を見た。蝋燭が置かれていた。私は短剣をその胸に突き刺し、首を切り落とした。こうして私は人々を彼から解放したのである。」

＜予言師トゥライハ＞

彼（アイハラ）に続き、預言者――彼に平安あれ――の時代に、予言師トゥライハ（Ṭulayḥa）[152] なる男が預言者たることを主張した。〔ウヤイナ〕・ブン・ヒスン（[‘Uyayna] b. Ḥiṣn）[153] は彼とともにあった。彼とイスラーム軍との戦いが激しくなったとき、ウヤイナはトゥライハに、「ジブリールは助けに来ただろうか」と尋ねた[154]。［トゥライハは］「いいや」と言い、後になってこう言った。「彼は来た。そして私に、『おまえは彼（ハーリド）のものと同じような挽臼と、決して忘れることのない話を手に入れるであろう』と言った。」

ウヤイナは軍に向かって言った。「引き揚げるぞ。この男は嘘つきだ。」

やがてハーリド・ブン・アル＝ワリードがウヤイナを捕らえ、首枷をつけ、誠実なるアブー・バクルのもとに送った。一方トゥライハは逃げ、シャームに落ち延びた。なお、トゥライハの言葉に、「ハトやジュズカケバトやモズが、数年で我々の王国をイラクやシャームに行きわたらせることを、おまえたちの前で保証した」というものがある。

さて［トゥライハが］ウマル・ブン・アル＝ハッターブの手に落ちたとき、［ウマルは］言った。「ウッカーシャ（‘Ukkāša）[155] を殺したのはおまえだ。私は決しておまえに好意を抱かない。」

トゥライハは言った。「神に讃えあれ。彼は私の手によって殉教した。」

そこで［ウマルは］言った。「おまえの予言のなかで何が残っているのか？」

［トゥライハ］は「ひと息もしくはふた息」と答えた。つまりは、「ごくわずか」という意味である。

150）バラーズリーによれば、「マクシューフ」は、脇腹の患部の治療のために焼印を押されたことに由来するという［バラーズリー著、花田宇秋訳『諸国征服史』岩波書店、2012–14 年、第 1 巻 208 頁］。

151）以下のアイハラ暗殺に関する箇所は、バラーズリーの記述とほぼ同じである。なお、バラーズリーによれば、アイハラ暗殺の実行者がマクシューフだという説とフィールーズだとする説が存在したが、後者の方が優勢だったようである［バラーズリー『諸国征服史』（花田訳）、第 1 巻 208–210 頁］。

152）トゥライハ・ブン・フワイリド・ブン・ナウファル（Ṭulayḥa b. Ḫuwaylid b. Nawfal）。預言者ムハンマドと同時代からその死後にアラビアに現われた偽預言者のひとり［*EI*²: Ṭulayḥa］。

153）預言者ムハンマド没後のアラブ部族の棄教（リッダ）の際に、偽預言者トゥライハに忠誠を誓ったが、後にイスラームに改宗した［*EI*²: Uyayna b. Ḥiṣn］。

154）タバリーが同じ逸話を伝えている［al-Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 2, p. 128］。

155）アブドゥッシャムス家の郎党（ハリーフ）。ムハンマドの生前、アラビア半島各地への遠征を任命されるなど、信頼の厚い人物であったようである。633/4 年にハーリド・ブン・アル＝ワリード指揮のイスラーム軍の前衛としてトゥライハ軍と戦うが、戦死した［Ibn Sa‘d, *al-Ṭabaqāt al-kubrā*, vol. 3, pp. 67–68; バラーズリー『諸国征服史』（花田訳）、第 1 巻 96 頁］。

＜サジャーフの預言者性の主張について＞

知れ。〔アル＝ハーリス〕の娘サジャーフ (Sajāḥ bt. al-Ḥāriṯ)[156] は、預言者――彼に平安あれ――の死後、ジャズィーラの地で預言者たることを主張した。マリク族とタグリブ族のうち、数千人の男が彼女に従った。

ムサイリマの勢力が強くなったとき、サジャーフは「おまえたちはヤマーマへ向かえ。ハトが風を切って飛んで行くように」と言って挙兵し、戦いに出た。ムサイリマは恐れて、贈り物を送り、砦の中に入り、「サジャーフのためにドームを建てよ。そして香を焚け。彼女が中に入るように」と言った。そのようにされた。サジャーフはそのドームの中に入ると、情交のことが頭をよぎった。夜半、ムサイリマは下に降りてきて、ドームの入口に立って言った。「おお、サジャーフよ。性交したいか？」

［サジャーフは］「ええ」と答えた。

ムサイリマは中に入り、3晩彼女のもとにいた。サジャーフの軍が気づくと、［サジャーフは］「彼は私の夫だ」と言った。彼らは「婚資はどこにあるのか」と言い、そして軍は（p. 440）彼女のもとを去った。ウターリド・ブン・アル＝ハージブ (ʻUṭārid b. al-Ḥājib)[157] は言う。

> 我らの女預言者は我らでも手を出せる女として夜を過ごした
> 一方人々の預言者たちは男として朝を迎えた

さて、ムサイリマは預言者――彼に平安あれ――に地方の統治権を求めたが与えられず、戻っていった。そしてヤマーマで［離反し］背教者となり、預言者たることを主張した。礼拝を止め、姦通と飲酒を許可した。しばらくして、タルハ (Ṭalḥa)[158] が彼に尋ねた。「あなたにはどの天使がやってきたのですか？」

［ムサイリマは］言った。「ラフマーン (慈愛あまねき者)[159] だ。」

［タルハは］言った。「光に包まれて来るのですか、それとも闇にですか？」

［ムサイリマは］言った。「闇だ。」

［タルハは］言った。「私は証言するぞ。あなたは嘘つきだ。ムハンマドこそ正しいことを言う御仁だ。」

ムサイリマはイスラームの兵士の多くを殺害し、ウマル・ブン・アル＝ハッターブの兄であるザイド (Zayd)[160] を殺した。そしてようやく、彼は1匹の野獣によって殺された。

この話の意図するところは次のとおりである。偽りは長続きせず、真実は、時が経つほどより確かなものになると知るがよい。そうすれば、誰からも欺かれることはない。

---

156) ウンム・サーディル・ビント・アウス・ブン・ヒック・ブン・ウサーマ（Umm Ṣādir bt. Aws b. Ḥiqq b. Usāma）もしくはビント・アル＝ハーリス・ブン・スワイド・ブン・ウクファーン（Bint al-Ḥāriṯ Suwayd b. ʻUqfān）。預言者ムハンマドの死後、実権を握った女の偽預言者の1人で、ムサイリマと結婚したとされる。また以下のサジャーフとムサイリマの逸話はタバリーが伝えるものとほぼ同じである［*EI*^{2}: Sadjāḥ; al-Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 2, pp. 136–137］。

157) サジャーフに従ったタミーム族の族長。リッダ（棄教）が鎮圧された後に、イスラームに改宗した［al-Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 2, pp. 135, 137］。彼の発話のアラビア語韻文は本テキストでは乱れがあるため、タバリーの記述に従う。

158) タルハ・ブン・ウバイドゥッラー（Ṭalḥa b. ʻUbayd Allāh）。ムハンマドの教友だが、第4代正統カリフのアリーに反抗し、「ラクダの戦い」で戦死した［*EI*^{2}: Ṭalḥa;「タルハ」『岩波イスラーム辞典』］。

159)「ラフマーン」はイスラーム以前の南アラビアの神の名とも言われている。ムサイリマは「ラフマーン」から啓示を受け取っていたため、彼自身もその名で呼ばれていた［*EI*^{2}: Musaylima］。

160) バラーズリーによると、ザイドは対ムサイリマ戦の「ヤマーマの戦い」で戦死している［バラーズリー『諸国征服史』（花田訳）、第1巻 179–180頁］。

＜アジャムの王ロスタムの予言について＞

アジャムの王ロスタム・ブン・ファッロフザード（Rustam b. Farruḫ-zād）[161] は偉大な予言師であり、占星術師であった。ヴォルナー（Wurnā）やジャーバーン（Jābān）といった予言師が何人か彼とともにいた。ある日、ロスタムはヴォルナーに予言について尋ねた。［ヴォルナーは］「おお、王よ。いまにも 1 羽の鳥がやってくるでしょう。もっとも私はその名を知りませんが。あなたのイーワーンのこの丸天井にとまり、この鳥からあるものがまさにこの場所に落ちてくるでしょう」と言い、円を描いて帰っていった。

ジャーバーンがロスタムに尋ねると、ロスタムは言った。「あの者は正しいことを言っておる。その鳥とはカササギであり、落ちるものとは銀貨であろう。だがこちらの、もうひとつの円の中に落ちるだろう」と。そして、その［円の］脇に円を記した。

このように話しているうちに、1 羽のカササギが丸天井にとまり、その嘴から銀貨が最初の円の中に落ち、跳ねて、2 つめの円の中に納まった。そこでジャーバーンはヴォルナーを呼び、言った。「おお、ヒンドの者よ。おまえは正しいことを言った。だがロスタムが言ったほどには正しくなかったぞ。」

＜逸話＞

次のように言われている。ある日、ロスタムが妊娠している牛を見て、（p. 441）「この牛の腹の中には何がいるか」とヴォルナーに尋ねた。ヒンド人（ヴォルナー）は「黒い子どもです」と言った。ジャーバーンが同行しており、「黒と白の斑です」と言った。そこで牛を殺し、子どもを取りあげたところ、つやのある漆黒色であったが、尾と額は白かった。

また、ジャーバーンはロスタムに「何が起こるのでしょうか」と尋ねた。ロスタムは言った。「偉大なる者がアラブより現れ、アジャムの王国を征服する。私は見たのだが、ある天使が天より降り、軍の弓を取り上げ、白馬に載せて天上に運んだのだ。私は不幸なヤズダゲルド［3 世］がアラブと戦うことを望まないが、彼は［私の話を］聞こうとしない。」

やがて、ムギーラ・ブン・シュゥバがサァド・ブン・マリク（Sa‘d b. Malik）[162] のもとから使者としてやってきた。ロスタムは言った。「ムギーラよ。明日我々は戦うが、おまえの片目は失明するだろう。」

ムギーラは言った。「［何があっても］私は戦う。［相手が］おまえでなかったとしても、おまえのような者と戦いたいのだ。私は恐れはしない。なぜなら至高なる神の道において、我が両目はしっかりと開いているのだから。」

戦いが始まると、ムギーラの片目は失われた。

これらの話の意図するところは、たとえこれほどまでに聡明であったとしても、信仰の道に則っていない限り、その者たちに［良い］結末は訪れなかった、ということである。さて、我々の時代に至るまでの何人かの予言師たちについて述べてきた。預言者たることを主張する者たちは過ぎ去った時代にも存在したが、神の道に則していなかったので、末路はいずれも悪しきものであった。次の章では［そのような］彼らについて述べよう。

161）もしくはロスタム・ブン・ファッロフ・ホルモズド（Rustam b. Farruḫ Hurmuzd）。サーサーン朝軍の司令官で、636 年もしくは 637 年のカーディスィーヤの戦いで殺された［*EI*^{2}: Rustam b. Farrukh Hurmuzd］。

162）サァド・ブン・アビー・ワッカース（Sa‘d b. Abī Waqqāṣ）のこと。預言者ムハンマドの教友で、イラク征服時の司令官であった［*EI*^{2}: Sa‘d b. Abī Waḳḳāṣ］。

＜ガルシャースプの時代に現れた予言師について＞

次のように述べられている。アジャムの王国のロフラースプの息子ガルシャースプ（Garšāsf b. Luhrāsf）[163] はヒンドの地に行った。彼はある山の上で裸の人物と出会った。［ガルシャースプが］「ここで何を食べているのか」と言うと、［その人物は］言った。「私は300年生きている。［その間］私は草木を食べ、草木を身にまとった。人の世話になることは決してない。私には、それによって救いを得られるだけの知性がある。こうして生きることができるのに、どうして己の腹を獣たちの墓場にせねばならぬのか。」

［ガルシャースプは］言った。「あなたの知識を私に教えてください。」

［その人物は］「大地のことも海のことも私にはお見通しだ」と言った。

［ガルシャースプは］言った。「私に教えてください。」

［その人物は］盥を持っており、その中を見つめながら言った。「汝が1本の木を曲げるとき、汝には結婚相手が与えられよう。」

ガルシャースプは帰っていった。ある町に至り、ひとりの娘に出会って彼女に恋をした。彼女のことについて尋ねると、人々は言った。「彼女はこれこれの王の娘です。（p. 442）王は自分の宮殿の入口に1本の弓をかけています。その弓を引ける者なら誰であれ、この娘が与えられるのです。」

［ガルシャースプは］宮殿の入口に行き、「弓を引いてみせようぞ」と言った。人々は彼を嘲笑し、花婿［の候補］が来たことを王に知らせた。王は［ガルシャースプを］呼び、弓を彼に与えた。［ガルシャースプは］弓を見た。それは鉄製で、裏は樹皮で覆われていた。彼はそれを引いた。王は娘を彼に与えた。ガルシャースプは、「1本の木を曲げない限り、汝は結婚相手を手に入れないだろう」という予言師の話を思い出した。彼は［予言師のところに］戻り、彼を数多の褒美でねぎらった。

この話の意図は次のとおりである。かつては予言師たちが存在した。彼らの予言は悪魔（シャイターン）の助けを借りて彼らが語っているのであり、一方、預言者たちは天使［の助け］によって語るのである。

＜逸話＞

グール[164] の境域にひとつの村があり、そこには1本の柳の木がある。太陽が白羊宮に入るや否や緑になる。この村にはある一族がいる。彼らのうちの老人がガラスの鉢を手に木の前にやってきて、その鉢に耳をあてる。そして、今年何が起こるかを人々に告げる。人々はそれを信じる。

知れ。創造主はそれぞれの時代において、［僭称者による］民の騒擾の原因となる出来事を生ぜしめられる。結果、彼らはそれに惑わされることがある。

163）ガルシャースプは聖典『アヴェスター』やパフラヴィー語の書物においては、竜や怪物の退治をはじめとする様々な英雄的行為を行った人物として現れる。ただし、ロフラースプの息子は彼ではなく、グシュタースプである。古代のイラン叙事詩が歴史叙述に取り入れられるようになった頃に、ガルシャースプは一般に、ピーシュダード朝の末尾に位置づけられた。なお、イスラーム時代の文献では、彼の英雄伝説については触れられない［Ehsan Yarshater, “Iranian National History,” in *Cambridge History of Iran* III(1), Cambridge, 1983, pp. 429–433; *EIr*: Karsāsp］。

164）本書第4部の「町」の項に既出［本訳注（5）、444頁］。

＜人々の間でのゾロアスターの騒擾＞

ゾロアスター（Zarātušt）の［僭称による］騒擾は［紛れもなく］明らかである。当初彼は奇術師で、詐術を行っていた。それから彼は予言師であると主張し、その後、預言者であると主張した。彼の時代にひとりの王がおり、彼に対して言った。「そなたは、このような主張に足るどのような証拠を持っているのか？」

彼は言った。「あなたは何がお望みか？」

［王は］「銅を鎔かして、それをそなたの胸に注いでみよう」と言って、［銅を］鎔かし、ゾロアスターの胸に注いだ。［だが銅は］いくつもの粒になり、［ゾロアスターは］まったく火傷を負わなかった。ある者たちが言うには、彼は雲母を胸にこすりつけていたとのことである。また、［そのとき］彼は舌の根で、「おお神よ、高き玉座と〔輝く〕光と高位の支配権と近づき難き誉れの持ち主よ。我［の詐術］を露見なさいますな」と唱えた、とも言われている。（p. 443）その後、［ゾロアスターが］無事に立ち上がったので、多くの人々が彼に惑わされ［従った］。彼はマギの信仰を提唱した。マギの信仰ほど恥ずべき信仰はない。アッラーが彼らを見捨てられますように。

＜ザンダカ主義者のマニの［僭称による］騒擾＞

シャープールの時代にザンダカ主義者の予言師が現れた。彼の名はマニ（Mānī）といい、世界中を騒擾に陥れ、数々の驚異的なことを見せびらかしていた。シャープールは彼を苦々しく思い、彼を捕らえて言った。「おまえの主張は何か？」

［マニは］言った。「私は神の使徒です。」

［シャープールが］「いかなる証拠を持っているのか」と尋ねると、［マニは］「あなたは何をご覧になりたいのですか」と聞き返した。シャープールは言った。「おまえが空中を飛ぶところだ。」

マニは彼の前で立ち上がり、空中に飛び上がり、見えなくなった。［それから］再び姿を現し、シャープールの前に着地した。シャープールは驚き、彼を解放した。だがマニのことを調べていくと、マニがしていることはペテンと魔術であるとわかった。そこで彼をジュンディー・シャープール[165]の町の門に吊るした。

その後、イラクでこれ（マニ）に関連する騒擾が起こった。ある男が、僧院で火が彼に対して言葉を発すると主張した。だが彼は［それより前に］2つの［隠し］穴を作っており、その一方で火を燃やし、もう一方に1人の男を隠していた。そして、別の拝火殿のところまで地面の下に横穴を掘り、男が先の穴の中で言葉を発すると、彼の声が横穴を通り、火の中から声が出てくるようにしていたのである。多くの人々がそれに惑わされたが、結局は［その穴のことが］知られて、それは掘り返された[166]。

＜逸話＞

また別のある者は、「私はジンと勝負し、奴を殺そう」と宣言した。人々は彼に、短刀と盥を持たせて何もない建物の中に入れた。彼は出てきたとき、赤い血でいっぱいの盥を持って出てきた。人々は彼を調べたが、傷はひとつもなかった。だが詳しく調べてみると、彼は舌の下に「竜血（dam

165）本書第4部の「町」の項参照［本訳注（5）、402頁］。

166）本書第4部の「火の聖堂」の項でこれと類似する話が見られる。この話の典拠はおそらくセルジューク朝期の名宰相ニザーム・アル＝ムルクの『統治の書』であり、そこではマズダク教の教祖マズダクとサーサーン朝の王クバードやヌーシラヴァーンの話として現れる［本訳注（5）、374頁；Niẓām al-Mulk, *Siyar al-Mulūk (Siyāsat-nāma)*, Ed. H. Darke, Bungāh-i Tarjuma wa Našr-i Kitāb, Tehran, 1962, pp. 240–241, 248–251］。

al-aḫwayn)[167]」を隠していた。彼は盥に小便をして、竜血を（p. 444）その中に入れて赤くし、愚か者たちを欺いたのであった。

＜逸話＞

また別の僭称者が「スズメを殺して生き返らせよう」と宣言した。彼は2つの小箱を手に入れ、それぞれに1羽ずつスズメを入れた。そして一方を袖の中に隠した。スズメを殺して箱に入れ、袖先に置くと、その後でもうひとつの箱を取り出した。そしてふたを開けて、スズメを飛び立たせた。殺したスズメは隠した。愚かな人々は彼にだまされてしまった。

このくらいのことを述べておこう。そうすれば、予言師とは何者で、魔術師や奇術師が何者かを知ることができよう。真実と偽りの違いを知り、預言者——彼に平安あれ——の聖法と信仰の真価を知るであろう。

予言師たることと預言者たることの違いは何かということについては、次の節で述べよう。

＜預言者たち——彼らに平安あれ——の奇跡（muʻjizāt）について＞

知れ。預言者らの奇跡とは、被造物はそれに対して何もできない類いのものである。それは創造主のお力によるもので、人の行いではない。たとえば、イブラーヒームが「あなたは死者をどう甦らせられるのかわたしに見せて下さい」［Q2: 260］と言うと、イブラーヒームが殺した鳥を創造主は生き返らせた。これはイブラーヒームの奇跡だと言われるが、創造主のお恵みによるものである。

同様に、預言者（ムハンマド）——彼に平安あれ——の奇跡として、彼が誕生した夜、拝火教徒の火が［一斉に］消え、拝火殿がいくつも崩れ落ちた。［他の奇跡では、預言者の援軍として］一団の人々が空から現れた。また、預言者の指の間から水が流れ出し、400頭の家畜が兵士らとともにそれを飲み干した[168]。

また、ある日［ムハンマドが］ウマル・ブン・アル＝ハッターブとともに歩いていると、泣いている子供がいた[169]。ウマルはその子を抱え、危害が及ばないように脇に連れて行った。［ウマルが］預言者のもとに行くと、［ムハンマドは］言った。「ウマルよ、おまえが情けをかけたあの子供はダッジャール（偽マフディー）であり、世界を滅ぼすだろう。」

「私が行って、彼を殺しましょう」と［ウマルが］言うと、［ムハンマドは］言った。「おまえにはできない。私のウンマのために、町が1つ、彼の手によって征服されるだろう。」

ウマルは（p. 445）子供を探したが見つからなかった。預言者——彼に平安あれ——が亡くなり、アブー・バクルも亡くなり、ウマルがカリフとなった。彼は、町々を征服するためにアブー・ムーサー・アシュアリーをフーゼスターンに派遣した。［アブー・ムーサーは］シューシュの門に至り、それを包囲したが、その堅固な防壁を攻略できなかった。シューシュに1人の僧がおり、塔の上に出てきて言った。「イスラームの軍勢よ、戻るがよい。シューシュはおまえたちでは征服できぬ。私はある本で読んだのだが、シューシュはダッジャールか、もしくはダッジャールがその中にいる

167）竜血樹の樹幹から分泌される樹脂で、西アジアやインド洋海域では、ソコトラ島が竜血の産地として古くから知られていた。顔料や薬（止血剤や下痢止めなど）として用いられた。

168）ムハンマドの奇跡の1つとして知られ、ブハーリーの『真正集』に見られる逸話［ブハーリー『ハディース』、傑出した者たち: 24］。

169）以下の逸話は、本書第4部の「シューシュの町」の項（本訳注(5)、433頁）に見られる。また「欺く者」の意のダッジャールについては、同412頁、注248を参照のこと。

軍によってのみ征服されるのだ。」

　アブー・ムーサーがそこに留まっていると、1 人の男が目に入った。男はシューシュの門のところにやって来て、シューシュの門を蹴り、「開け」と言った。するとたちまち扉が開いた。イスラームの軍勢は［そこに］殺到した。人々は男を探したが、見つからなかった。アブー・ムーサーはウマル・ブン・ハッターブに、「このような次第でした」という手紙を書いた。ウマルは言った。「アッラーの使徒は正しかったのだ。おまえたちを助けた男はダッジャールだ。私はそれを預言者――彼に平安あれ――から聞いていたのだよ。」

　この逸話の意図は、奇跡とはこのようなものであり、創造主のお力とお助けによるものであるとそなたが知ることにある。

＜逸話＞

　預言者――彼に平安あれ――がマッカを征服し、カァバの偶像を打ち倒したとき、その中に石でできた 1 体の偶像があった[170)]。方々から人々がそれを拝みに訪れていた。それはアーザル（Āzar）[171)] が彫ったものであった。その像の名を「マナート（Manāt）」といった。預言者――彼に平安あれ――は［マナート像を］外に放り出した。あるヒンド人が拾って隠し、ヒンドゥスターンに持ち去り、それを 100 倍［の重さ］の金で売り払った。ヒンドゥスターンには「スー（Ṣū）」という名の町があった。その偶像はこのスーで、金の臼の上に据えられた。人々はこの話を預言者――彼に平安あれ――に伝えた。預言者は言った。「私のウンマ出身で、私と同じ名前を持つ男が、それを持ち帰るであろう。その偶像は彼の手で壊されるであろう。」

　時が流れ、ガズナのスルターン・マフムードの時代になった。彼はヒンドを征服し、スーを攻略した。［スーの人々は］マナートを黄金の館で（p. 446）買い取ろうとしたが、彼は売らなかった。そして偶像を引き剥がしてガズナに運び、壊してイーワーンの敷居に敷いた。

　要するに、奇跡とはこのような類いのことを言い、未だ到来しない時（未来）のことについて知らせる。

＜ある奇跡＞

　ある日、1 人のヒンド人が預言者の顔をのぞき込んだ。彼の顔に藁くずがついており、ヒンド人はその藁を取った。預言者は、「アッラーが汝の顔を白く輝かされんことを」と言った。すると、〔すぐに〕ヒンド人の顔は白くなった。

　こういったことが「［預言者による］奇跡」である。本書では［これ以上の記述は分量的に］不可能である。

　この後は、聖者の奇跡（karāma）について述べよう。

＜聖者（awliyā）の奇跡とそれらが認められていることについて＞

　知れ。聖者の奇跡は、聖者が預言者たちの道を歩んでいるかぎり、正当なものである。彼らの奇跡（karāmāt）は預言者の奇跡（muʻjizāt）からの枝分かれである。たとえばマルヤム――彼女に平安あ

170）同様の逸話が、本書第 4 部の「スーの町」の項（本訳注（5）、435 頁）に見られる。その記述によると、インド北西の町ソームナートの名称は、町本来の名「スー」と偶像の名「マナート」からなるとされている。

171）イブラーヒームの父あるいはおじ。

れ——のように、ザカリヤーが彼女のところに行くと、冬でもブドウやキュウリやリンゴといった果物があった。彼が「**これらはどこから汝のもとに来たのか**」と言うと、**彼女は**「**アッラーの御許からです**」**と言った**。さらに、ジブリールは彼女のもとに現れて伝言を送った。しかし、彼女は預言者ではない。

［聖者の奇跡とは］あるいはサルマーンが見たようなものである。彼は、預言者——**彼に平安あれ**——を求めてシャームから旅をしていた。数々の書物の中でその出現の時期を知っていたからである。ある晩、彼は荒野に着いた。そこは「ザルードの荒野（Biyābān-i Zarūd）」[172]と呼ばれていた。ライオンが彼を狙い、サルマーンの行く手を塞いだ。サルマーンは生きる望みを捨てて言った。「神よ、何とぞ私が探し求めている使徒のために、この猛獣の害から私をお救い下さい。」

たちまち1人の騎士が現れ、ライオンの胴への剣の一突きでライオンを殺すと、姿が見えなくなった。サルマーンは預言者のもとに到着し、帰依した。ある日、アリー・ブン・アビー・ターリブがサルマーンをからかい、サルマーンに小石を投げつけた。サルマーンは憤慨した。預言者——**彼に平安あれ**——は言った。「サルマーンよ、アリーに対して怒るな。**汝はザルードの夜を覚えているか？**」

サルマーンは「はい」と答えた。

するとアリーが言った。「ライオンを殺したザルードの夜の騎士は私である。」

サルマーンは恥じ入り［アリーに］謝った。彼はアリーの一家に忠実に仕え、ついには預言者が「**サルマーンは我らの中の者、お家の人々**（ahl al-bayt）**である**」と言うほどであった。

（p.447）これらの話の意図は、聖者の奇跡は正当だという点にある。

＜逸話＞

ある日、イブラーヒーム・［ブン・］アドハム（Ibrāhīm-i Adham）[173]が川岸に座り、アンディーメシュク（Andīmišk）の橋[174]の下で沐浴していた。すると、石橋の上から男が落ちた。彼（イブラーヒーム）が「**神よ、彼を守りたまえ**」と言うと、男は水の上に立ち、［歩いて］岸に渡った。

＜逸話＞

ある人が次のように言っている。「私はフサイン・ブン・マンスール・アル＝ハッラージュ[175]と一緒に、バグダードで病人の見舞いに行った。病人はダマスクスの人であった。［病人は］『ハーブ[176]入りの甘菓子が食べたい』と言った。それはダマスクスで作られるものであった。フサインは手を伸ばし、1皿のハーブ［入りの菓子］を病人の前に置いた。病人はそれを食べた。数ヶ月後、ダマスクスから隊商がやってきた。彼らは、『某の日に、シャームの王の御前から1皿の［ハーブ

172）イブン・ホルダードベによると、ザルードはフザイミーヤ（Ḫuzaymīya）の別名。フザイミーヤは、バグダードからメッカに向かう街道上の宿の1つとして言及される［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, pp.127, 186］。なお、同じ話が本書第4部に既出であり、そこでは「ドルードの谷」と訳出したが、「ザルード」に訂正する［本訳注（5）、448頁］。

173）初期の禁欲主義者（777年没）。ホラーサーン地方のバルフの裕福な家の出身で、出家してバグダードで学んだ後に小アジアやシリアでのジハードに加わったと伝えられる［「イブラーヒーム・イブン・アドハム」『岩波イスラーム辞典』］。

174）テキストはANDMYŠだが、「アンディーメシュク（Andīmišk）」と読む。アンディーメシュクは、現在のフーゼスターン地方北部の町デズフールの古名。町中を流れるデズ川に架かる橋は有名で、イスタフリーなどもこの橋に言及している。橋はサーサーン朝のシャープール2世によって建造された［al-Iṣṭaḫrī, *Masālik al-mamālik*, p. 197; *EIr*: Dezfūl］。

175）本訳注（5）、493頁、注698参照。

176）原語はPanj anguštであり、具体的にはこの語はセイヨウニンジンボクを指す。

入りの］菓子が宙に浮かび、消えてしまったのだ』と語った。」

＜逸話＞

ある人のいわく、「私は、火曜日にバグダードの市場でフサイン・［アル＝］ハッラージュとともに望楼に腰かけ、［あたりを］眺めていた。彼は格子戸を閉め、そして再び開けると、『何が見えるか？』と尋ねてきた。私は『サマーワの荒野だ』と答えた。彼は再び戸を閉め、『何が見えるか？』と言った。私は『カァバだ』と答えた。」

聖者の奇跡については、このような逸話が多く語られている。たとえばアーサフ・ブン・バルヒヤー[177]の話にあるように、彼はスライマーンに、「**わたしは一つの瞬きの間に、あなたにそれを持って参りましょう**」［Q27: 40］と言ったのである。アーサフは預言者でもなければ、使徒でもない。

この後は、錬金術（kīmiyā）の知識について言及しよう。

［第6章］　錬金術について——錬金術とは霊的技法である

知れ。錬金術は繊細にして霊的な技である。現在、この知識は（p. 448）一部の人々のあいだからは失われてしまった。その技法のいくつかは残っているが、知識それ自体は失われてしまった。クーフィー体[178]で書かれた書物や様々な文字や形が刻まれたもののように。長い時を経て、［今では］いかなる書記もそのうちの1葉すら書くことができない。［クーフィー体の］カーフ（ک）やサード（ص）があり、たとえばカーフの中で［すべてが］統一の取れた方法で100個書かれているのを見たところで、彼らがそれをどのようにして書いたのか、またはどのような型に従ったのか、誰にもわからない。

次に、錬金術の知識について［述べよう］。

1つが100マン、または70マン前後もの白鉛（sipīd-rū）でできた中国製の大皿や〔スィースターン〕製の器［がある。だが］それをどのように鍛造するのか、どれほどの鉄床の上で叩くのか、どのようなやっとこ鋏で取り出すのかは伝えられていない。今日では、熟練した職人でさえ10マン以上の重さの器を鍛造することはできない。しかし彼らは、胴が太くて首の細い、白鉛の壺を作っているのである。彼らは金鎚でどうやって叩いたのであろうか。

私は重さ80マンの中国製の大皿を目にしたことがある。金物師の一団は、［当時］彼らがそれをどうやって鍛造したのかと考え込んだ。ある若者が次のように主張した。「この中国製［の大皿］は、［まず］薄い円盤を作る。それからそれを4枚［重ねて］圧し、叩いて1枚にするのだ」と。彼らは試してみたが、成功しなかった。

飾り環（bāzīj）の知識は廃れ、吊りランプや琺瑯の知識も、さらには1枚の鉄で作られるフランクの兜の知識も廃れてしまい、［今では］誰も知らない。学識者たちの死によって失われてしまっ

177）スライマーンの宰相アーサフについては、本訳注（1）、213頁、注21参照。

178）クーフィー体は、ナバティア文字の影響を受けて成立した最も古いアラビア文字の書体。イスラーム以降は、しばしばクルアーンの書写や建築物の装飾に用いられた。クーフィー体によるクルアーンの書写は13世紀前半頃まで行われていたとされる［*EIr*: Calligraphy］。しかし、本書で述べられているクーフィー体はかなり初期のものを指しており、それについてはイラン世界においても12世紀当時には判読が困難になっていたと考えられる。

たのである。それゆえ、錬金術の知識が廃れてしまったのも致し方ないことである。カールーン(コラ)は［錬金術を］知っていた。またシャッダード・ブン・アードも、ルームのイスカンダルも知っていた[179)]。［しかし］今では誰も知らない。

今もわずかに残る［錬金術の］知識を否定することは恥知らずなことである。その例としては、次のことを挙げよう。［まず］未加工の銅(mis-i aṣlī)を用意する。そこに亜鉛を垂らし、それをガラスと溶解させると、青色が生じる。［ガラスは］色を受け入れて染まるのである。カーシャーン産の青い碗はこの方法で染色される。一方ガラスを銅と溶解すると、赤色が生じる。今日では、錬金術の技法はジャービル・ブン・ハイヤーン(Jābir b. Ḥayyān)[180)]に帰されており、［上述の］こういったことは『金属の書(Kitāb al-ajsād)』や『釣り合いの特性(Ḥawāṣṣ-i mawāzīnī)の書』など、いくつかの書に記されている。

次のように言われている。アル＝ハサン・ブン・サフル(al-Ḥasan b. Sahl)[181)]は錬金術の知識を有しており、語り尽くせないほどの財宝が彼のものとなった。(p. 449)［ハサンは］娘の1人をカリフのマームーンに嫁がせた。彼は1000粒の真珠を［マームーンの］足もとに散らせ、麝香と竜涎香でいくつもの玉を作り、その中に村の名前が書かれた紙を入れ、彼の頭上にふり撒いた。その紙切れをハサンのもとに持って行った者は、その村の権利証書が与えられたのであった[182)]。彼の娘の名はプーラーン・ビント・アル＝ハサン(Pūrān bt. al-Ḥasan)であった。結婚式が執り行われた夜は、100マンもの竜涎香で作られた蝋燭が彼女のそばで灯され続けた。

この話の意図は、錬金術の知識は高尚なものである、ということである。それを否定することは好ましいことではない。だがこの学問は、誰もが理解できるほど容易なものではない。

さて、錬金術には次のような手順がある。1つは浄化(tanqīya)であり、［他に］濾過(taṣfīya)、〔焙焼〕(tašwīya)[183)]、溶解(taḥlīl)、凝結(ta'qīd)、昇華(taṣ'īd)、着色(talwīn)である。もしわずかでも重量に多い少ないがあったり、火にかけるときに長い短いがあったりすると、失敗する。

このこと(錬金術)を否定するのであれば、水銀を火で熱してみるがよい[184)]。そうすれば、どのようにして辰砂の朱が生じるのか［わかるであろう］。また錫を熱すると、どのように鉛丹になるのか、銅を酢に浸すと、どのように緑色になるのか、そして、化合物(tarkībāt)はどのように得られるのか。そこで［やってみるがよい］、水晶を細かく砕き、鉛丹をそれと合わせて溶かし、［それ

179) ここに見える三者ともに、巨万の富を築いたことで知られる。錬金術と富が関連性あるものとして考えられていたのであろう。彼らの財宝については、本訳注(7)、523–527頁を参照。

180) イスラームの錬金術における初期の代表者とされ、ヨーロッパでも「ゲーベル」の名で知られていた。812年頃没。多くの著書があり、内容によって大きく『112の書』、『70の書』、『144の書(釣り合いの書)』、『500の書』に分類される。ただし、そのほとんどはジャービル本人ではなく、後世の人々の手によるものとされる［*EI*²: Djābir b. Ḥayyān; E. J. ホームヤード『錬金術の歴史——近代科学の起源』大沼正則監訳、朝倉書店、1996年、50–66頁］。なお、本文後段で挙げられている2書のうち、イブン・ナディームの『目録』ではジャービルの著作リストに『金属の書』はなく、一方『特性の書(al-Ḫawāṣṣ)』と『釣り合いの書(al-Mīzān)』は各々独立した書として紹介されている［Ibn al-Nadīm, *al-Fihrist*, pp. 547–550］。

181) ハールーン・アル＝ラシードの治世にバルマク家に仕え、後にマームーンの書記となったイラン系官僚。兄弟のファズル・ブン・サフルはマームーンの宰相であった。ファズルが暗殺された後、政界から身を引いたが、825年に彼の娘ブーラーン(ペルシア語のプーラーン)がマームーンの妻となった。850/1年没［*EI*²: al-Ḥasan b. Sahl］。

182) ほぼ同じ逸話が『四つの講話』の中にもある。しかし、そこでは撒き散らされた玉は「麝香と竜涎香」ではなく「真珠の形をした蠟(mūm)」で作られたと記されている［ニザーミー『ペルシア逸話集　四つの講話』、221頁］。

183) 校訂テキストではtaswīyaとなっているが、おそらくラージー(925年没)が錬金術操作の1つとして紹介しているtašwīya(焙焼)の誤りであろう。「焙焼」とは、乳鉢の中で物質に水分を与えてから瓶やカップに移し、それを火にかけた別の容器の中に入れて水分を蒸発させ、さらに穏やかに加熱するという作業を指す［アルハサン&ヒル『イスラム技術の歴史』(多田他訳)、183頁］。

184) ここに挙がる鉱物の化学反応については、本書第3部第6章「石と鉱物」の項で様々に触れられている［本訳注(4)、530–547頁］。

を］何度も濾すと、ルビーのように赤色になる。

＜処方＞

焼いた植物の根（rūd-i sūḫta）3 ディラムサング、竜血（ḫūn-i siyāwušān）1 ディラムサング、真鍮 3 ディラムサングを 1 ラトルの水晶にまぶして溶かすと、美しい緑色に変わる。

＜処方＞

ガラス、緑青、水晶をそれぞれ同じ重さずつ溶かすと、カンラン石の色が得られる。

＜処方＞

10 ディラムサングの焼いた植物の根、5 ディラムサングの石灰、2 ディラムサングの亜鉛、2 ディラムサングの熱した銀をアルカリ水に入れて、すり潰す。それを盃に移し、ガラスあるいは水晶製の指輪石をその中に入れて沸騰させる。すると、トルコ石色が生じる。

＜処方＞

ロバと馬の蹄をヤスリで粉末にし、蒸留瓶と蒸留器を使ってその汁を抽出する。（p. 450）それを少量の白鉛、あるいは少量のガラスに加えると、固くなり、割れにくくなる。

こういったことのいずれもが錬金術なのである。だが、銅を金に変えるのは誰にでもできることではない。みなができるようであれば、驚異ではなかろう。

＜逸話＞

ムスタルシド（Mustaršid）[185] の時代に、ある貧しい男がいた。［やがて］彼は金持ちになり、莫大な財物を所有するに至った。人々はカリフに言った。「あの男は錬金術を使うのでしょう。もとは貧しかったのですから。あるいはひとかどの財宝を手に入れたのかもしれません。」

カリフは彼を呼び出した。［カリフは］啓典（クルアーン）を持ち込み、剣を置き、啓典にかけて、「男が正直に答えないならば、彼を亡き者としよう」と宣誓した。その男は言った。「信徒の長よ。私はある日ガラスを溶かしていると、金曜礼拝の声が聞こえてきました。私は、ガラスを入れた炉の口に燃料用の柳の木の束を置いて、礼拝に行きました。戻ってみると、私のガラスはスピネルのように赤くなっていました。すぐに取り出して、小さく砕きました。私はそれを様々な地方に持っていき、王たちに売って富を手にしたのです。ひとかけら残っていますので、あなたに差し上げます。」

［男はそれを］持ってきた。ムスタルシドはそれで壺を作った。それは今でもカリフの館に残されている。［ガラスが変色した］原因は、薪の植物［の成分］がガラスの中に入ったためであり、ゆえにそれを赤色にしたのである。

この逸話を述べた目的は、錬金術の知識は真理であり、創造主こそがそれをお導きくださる、という点にある。

185）アッバース朝第 29 代目カリフ（在位 1118–35 年）。サンジャルをはじめとするセルジューク朝のスルターンたちに対し、しばしば自ら軍を率いて対抗した。しかし、1135 年にマリク・シャーの曾孫にあたるマスウードとの戦いに敗れ、捕虜となった。その後アゼルバイジャンに移送され、マラーガ近郊で殺害された［*EI*[2]: al-Mustarshid bi'llāh］。

＜逸話＞

スルターン・サンジャルの時代に、ある貧しい老人がいた。［老人は］やがて金持ちになった。彼はサンジャルの前に連れてこられた。［サンジャルは］言った。「おまえが錬金術を習得していると私は聞いている。私にいくらか［知識を］与えよ。」

［老人は］「かしこまりました」と言って戻り、巾着がたくさん結わえられた革袋を持ってきた。それぞれ［の巾着］には種が入っていた。あるものの中にはヒヨコ豆、またあるものの中にはレンズ豆、そして米、キビ、ウイキョウ、コリアンダーなどであった。［老人が］言うには、「これらが錬金術です。（p. 451）私が蒔いたそれぞれの種は700倍に増え、私にこれほどまでの財産をもたらしました。また、幸運こそは錬金術の秘訣です。」

［サンジャルが］「いかにしてか」と言うと、［老人は］言った。「ある日、私が家畜に乗って庭園へ向かっていたところ、眠気が襲ってきました。私は金の入った袋を腰につけていたのですが、その袋が腰から落ちる夢を見て、飛び起きました。私は［家畜から］降り、袋を見つけ、拾いました。腰に結ぼうとすると、自分の袋は腰にありました。これ（拾った袋）も、その［自分の袋の］脇に結んだのです。」

この話の意図は、錬金術の秘訣とは創造主からの霊感であり、かつ良き定め、幸運、勝利だということである。一部の者たちはこのようなやり方を認めようとせず、否定する。なぜなら「**自分が気に入らないものを馬鹿にする者**」だからである。だが、いかなる学識も軽んじてはならない。**これは、アッラーがお望みの者に与えられる恩寵である。**

この後は医学（ṭibb）の知識に関する章を述べよう。この知識は有益かつ高尚で、普遍的な利益がある。

［第７章］　医学と治療の知識について

預言者――彼に平安あれ――は、「**知識にはふたつの知識がある。肉体の知識と、信仰の知識である**」**とおっしゃった**[186)]。医学の知識や他の諸々の知識を否定する者は、太陽やそれ以外のものを見ることのできないコウモリのようである。彼らは高慢になって言う。「薬がどれほどのものか。良いも悪いも神からのものと知るべきだ」と。彼らは、神がこれらの薬や薬草や植物を戯れに創造されたのではない、ということすら知らないのである。

創造主は、世界を諸々の因果関係（asbāb）の上に定められた。たとえば、空気の微風が喉を下っていかなければ、人は死ぬ。ニンニクやカラシを食べると熱くなり、バラや樟脳を食べると冷える。これを否定するというならば、言ってみよ。バイケイソウ[187)]を鼻に垂らし、タマネギの汁を目に垂らせば、どのような効き目があるか知っているであろう。1ミスカール分（微量）の大麻（bang）もしくは阿片を食すと、人がいかに眠りに落ち、意識を失うか。スカモニア[188)]を食べると腹が下

186） この言葉はムハンマドの主だったハディース集には見られない。一方、マムルーク朝期の人名録作家サファディー（1363年没）は、これを法源学の始祖ムハンマド・アル＝シャーフィイーの言葉として伝えている。著者トゥースィーが「ムハンマド」という同名ゆえに発言者を取り違えていた可能性があろう［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 2, p. 174］。

187） くしゃみ誘発剤。植物の根で外が黒く、中が黄色い［*LN*: Kundus］。

188） 本書第5部「樹木」の項（本訳注（6）『イスラーム世界研究』第6巻、2013年、557頁）に、地獄の底に生える「ザックーム」の樹脂として名が挙がる。

り、アザミの樹脂（kangar-zad）を食べると吐く[189]。毒を飲むと死ぬ。だがその［すぐ］後に解毒剤を飲むと（p. 452）助かる。熟していない［酸っぱい］ブドウやリンゴを食べると歯が浮く。

こういったことにまったく同意しないのであれば、それは野獣よりも知性がない。なぜなら野獣は［後天的に］知って理解しているからである。犬は腹が痛くなると草を食べる。鳥は海岸に行き、海水で嘴を繕う。ハゲタカは老いると天高く飛び、太陽に翼をあてて焼く。その後、温かい土に体を擦りつけ、羽を落として新しい羽が生えてくるようにする。こうして［ハゲタカは］若返る。

こういったことにも同意しないのであれば、次のことを考えてみるがよい。火が物質をいかに燃やし、無きものにするか。寒さが水をいかに凍らせるのか。ダイヤモンドがあらゆる石をいかに砕き、一方で鉛がダイヤモンドをいかに砕くのか。血の中に置いたダイヤモンドや鉄がどのようにして柔らかくなるのか。

見てのとおり、雨はいつも雲から落ちてきて、他のものからは降らない。光は月と太陽からくる。人間は精液から、精液は血から、血は栄養から、栄養は植物から、植物は土と水からできる。諸々の関係を否定することは間違ったことである。創造主こそは諸々の関係を生み出すお方なのである。それゆえ、黄胆汁の病を取り除く方法が酢蜜であり、黒胆汁［の病］を取り除く方法がバラの蜂蜜漬けであることが、どうしてあり得ないのか。もしくは、どうして寒気を感じると人は火を求めるのか。喉が渇くとどうして水を求めるのか。これらのことが不信仰ではないなら、頭が痛むときにスミレの錠剤を飲むことが、どうして不信仰であるのか。治療の知識が不信仰であるとするならば、預言者――**彼に平安あれ**――はなぜ言ったのだろうか。「**ライオンから逃れるようにライ患者を避けよ**」と[190]。

＜問答＞

「預言者――**彼に平安あれ**――のおっしゃった『**伝染病も、吉凶占い**（ṭiyara）**もまったく事実無根である**』[191]とはどういうことか」と問われるならば、こう答えよう。「病気はすべて、創造主の定めによるものである」と。アラブでは、「ナクバ（naqba）」と呼ばれるラクダの病気がある。1頭のラクダの唇に生じると、別のラクダたちにも生じる。これと似たものは天然痘（ābila）であり、ひとりの子供にできると他の子供たちにもできる。なぜなら、［最初の子が］天然痘［の種］（judarī）を持っており、それが拡散するからである。（p. 453）このような例は果物にもある。アンズの木が黄色くなると、他の木々も黄色くなる。これは果物に何らかの能力があるからではない。そうではなく、創造主がその緑色を黄色くされるのである。

＜問答＞

蟻や蚊やネズミやクモのように、何ら益のない多くのものを創造主が創造されたことについて問われるならば、こう言おう。創造主が創造されたものは何であれ、いたずらにお創りになったのではない。たとえば蟻は、知性でライオンを打ち負かすことができる。［ライオンは］蟻への恐怖から、食べられてしまわないように子どもを荒野に逃す。［神はこのように］蟻に理解力を授けられたので、［蟻は］冬の食べ物を夏に集めるのである。

189）kangarはアザミの近縁であるGundelia属の植物を指す。西アジアや東地中海世界に広く自生し、古くからその樹脂（kangar-zad/ẕad）が嘔吐剤として用いられていた。

190）ブハーリーの『真正集』に見えるハディース［ブハーリー『ハディース』、治療: 19］。

191）ムスリム『真正集』「挨拶の書」に見えるハディース。ティヤラとは、「ジャーヒリーヤ時代に行われた鳥や鹿による占いで、吉凶を知らせるもの」とされる［ムスリム『日訳サヒーフ ムスリム』、第3巻270、272頁］。

＜逸話＞

次のように言われている。ジャフム・［ブン・］サフワーン(Jahm-i Ṣafwān)[192]はカリフの前で「民衆は神を知らない。みな不信心者だ」と言った。カリフは不愉快になった。

ある日、彼らが荒野へ行くと、ジャフムは何匹かの羊と1匹の犬を連れた1人のアラブ人を見かけた。［ジャフムがカリフを指して］「おい、アラブ人よ、この方は誰だ？」と聞くと、［そのアラブ人は］「人間だ」と言った。

ジャフムは言った。「ああ、信徒の長よ、彼は世界のカリフたるあなたを知らないというのに、どのようにして神を知るというのか。」

カリフが「おいアラブ人よ、おまえは神を知っているか？」と尋ねると、［アラブ人は］「はい」と答えた。「どのように知っているのか？」と尋ねると、［アラブ人は］言った。「この荒野で私は蟻ほどに小さくはない。［その小さな蟻は］朝方、1匹が穴から出てきて天空を見渡し、それから穴へと降りていく。もし出てこなければ、その日は雨が降ると私にはわかる。もし出てくると、ほかの蟻たちも現れ、晴天だとわかる。1匹の蟻でもこれほどのことがわかるのだ。私や被造物すべてに創造主がいることを、どうして私が知らないことがあろうか。」

かくして［カリフは］ジャフムとの関係を断ち切った。

この逸話の意図は次のとおりである。創造主は1匹の蟻にさえ理解力を授けられ、蟻が自らにとっての便宜を図れるようにされた。決していたずらに蟻を創造されたのではない。どうして生薬や沈香、カヤツリグサ(su‘d)、ナデシコ、マスティーク樹脂をいたずらにお創りになろうか[193]。蚊はあれほどまでに弱々しいが、象は蚊を避ける。神を騙ったニムルード(ニムロド)は、その唇を蚊に刺され、黒くなり、気絶して死んだのである。

＜［神の創造の］英知＞

創造主が大地を1匹の魚の上に置かれたとき、イブリースは魚に言った。(p. 454)「私は罪を犯して呪われてしまったが、おまえは一体何の罪があって大地を運んでいるのだ。それを背中から振り落とせ。」

創造主は蚊を優位に立たせ、［魚を］刺して傷を負わせるようにされた。魚は刺し傷のために［大地を］背負っていることを忘れてしまった。すなわち、より大きな物体をより弱い生きものが支えているのである。

一方、ネズミの創造においては次のような英知がある。創造主は「ハサク(ḤSK)」と呼ばれるある動物を創造された[194]。それは至高なる神が創造した最も小さい動物である。ハサクに見舞われた動物は必ずや死に、治療の手立てもない。しかしネズミのいる場所にはハサクはいない。ここに［ネズミの］有益さがあるとするならば、それで十分であろう。

192) ウマイヤ朝期のイスラーム神学者(746年没)。アッバース革命前夜の混乱期にアラブとマワーリーの平等を唱える反乱に加担したため、捕らえられ処刑された［*EIr*: Jahm b. Ṣafwān］。

193) 薬用となるこれらの植物については、本書第5部の「樹木」の項でそれぞれの効用が述べられている［本訳注(6)、549–567頁］。

194)「ハサク(ḥasak)」はアラビア語で「棘」の意味があるものの、何を指すのかまったくわからない。この語は写本によってもJSK、ḤSKなど様々な表記がある。

＜問答＞

「なぜ［神は］ハサクを創造されたのか」と問われるならば、こう言おう。「創造主の英知は我々が理解し得る範囲を超えている」と。さらにまたある者が、「グミの実には、黒い線が入っているものもあれば白い線のものや赤い線のものもある。このことにはいかなる英知があるのか？」と聞くならば、「創造主のみがご存じであり、我々にはわからない。神には限りない知識（ʻilm）があるが、我々の理解力はそこまで及ばないのだ」と答えよう。

あらゆる被造物に［神の創造の］英知があることが明らかとなった以上、これほど多様な生薬や薬草をどうして［神が］いたずらにお創りになるだろうか。［神は］しもべたちを創造され、霊感や導きを授けられたのであり、結果、しもべたちはそれらの特性を経験によって知り、治療に用いたのである。

ある者が知らないことを別の者が知っていることもある。

＜逸話＞

次のように言われている。ヒッポクラテスはガレノスの弟子であった[195]。彼は唖のふりをして、ひと言も話そうとしなかった。［神の］英知を習得する際に、彼の声（発言）が師匠を煩わせるからである。やがて、ルームの王が虫による頭痛（ṣudāʻ-i dūdī）を患った。ガレノスは「虫を外に出すために、彼の頭蓋骨を取り出そう」と言い、王に阿片と酒を与えた。王は意識を失った。［ガレノスは］王の頭蓋骨を取り出し、鉗子で虫をつまみ上げようとした。［虫は］脳膜にぶら下がっていた。ヒッポクラテスは言った。「お止めください。王が死んでしまいます。鉗子の先端を熱して、虫の背に当ててください。そうすれば脳の膜が傷つきません。」

ガレノスはそのとおりにして（p. 455）虫を取り出し、王の頭蓋骨を元通りに納めて軟膏を塗り包帯を巻いた。その後ガレノスが、「おまえは唖だったのに、なぜ話せるようになったのだ？」と尋ねると、［ヒッポクラテスは］「私はいつでも話すことができました。ただ、時機を選んで言葉を発していただけです」と答えた。

これはつまり、師匠がわからないことでも弟子がわかることがある、ということである。王は彼らを金持ちにした。

［神の創造における英知］

知れ。創造主は、何ひとついたずらにお創りにならなかった。かのお方のお言葉に「かれは御心のまま数を増して創造される」［Q35: 1］とあるように。人が［別の］人に対して、知識の多さにおいて優れていることがある。それはちょうど資質において、ライオンがキツネより、鷹がハトより申し分ないのと同じである。また、雄鶏にはとさかと肉髯があり、羊には角が、象には長い鼻と２本の大きな牙がある。魚は［場合によっては］巨大な体格をしている。被造物の各々に千もの［神の］英知があるのである。「なぜロバに長い鼻をお創りにならなかったのか」などと言うのは適切ではない。［そうではなく、］私はこう言おう。［神は］ラクダに長い鼻を創造されなかったかもしれないが、長い首を授けられたので、ラクダの口は地面につき、水を飲むことができる。象の首は短く鼻が長いのは、鼻で水を汲み、喉に流し込むためである。同様に、牛の歯は草に届かない

195）ヒッポクラテス（前 370 年頃没）とガレノス（200 年頃あるいは 216 年頃没）は同時代人ではなく、当然師弟関係にもない。むしろ、ガレノスが先人ヒッポクラテスの四体液説を継承した。

が、舌を長くお創りになったので、舌で草をむしり取ることができる。そのため牛は舌を切られると、何も食べることができず、死んでしまう。さらに、魚には舌がない一方、蛇には２つの舌がある。象の舌は内巻き（maqlūb）になっているが、それは食べ物や草を反芻しないからである。ものを飲み込むことが象にとってたやすくなるように、［神は］その舌を内巻きに創造された。つまり、創造主がお創りになったものは何であれ、英知をもってお創りになったのである。従って、様々な薬や治療もまた、無駄なものではない。

［治療］

知れ。治療には２種類ある。［すなわち］医学的な治療と宗教的な治療である。医学的な治療は節制や薬である。宗教的な治療は祈念や喜捨、罪の赦しを乞うことである。なぜなら、人間に降りかかる災難は（p. 456）罪の報いによるものだからである。「**あなたがたに降りかかるどんな不幸も、あなたがたの手が稼いだものである**」［Q42: 30］とあるように。ゆえに、もし神に赦しを乞い改悛するならば、罪は取り去られ、その悪しき影響が去って健康になる。

＜逸話＞

言われているところによると、ある夜、［アブー・］ジャァファル・アル＝マンスールは眠れなかった[196]。彼は侍従を傍においていた。［侍従が］「信徒の長に眠りが訪れないとは、なぜでしょう？」と尋ねると、［マンスールは］言った。「ウマイヤ家のことを考えていたのだ。彼らは世界を手にしたが彼らの子供たちが贅沢な暮らしに溺れたとき、彼らの状況は一変してしまった。」

侍従は言った。「マルワーン家の者の１人を捕らえているのですが、彼はヌビアの王の話をします。彼をお呼びになりますか？」

［マンスールは］彼を呼び出し、話を聞いた。

男は語った。「私はヌビアの国に達し、わが軍はそこに落ち着きました。［アッバース家の勢力によって］我々は敗走していたのです。ヌビアの王が私に会いに来ました。色が黒く、美しい顔で、背が高い男でした。彼は私の前で地面に座りました。私は言いました。『なぜ敷物の上に座らないのか？』

彼は『私はあまりにも多くのお恵みを創造主からいただいているからこそ、より一層謙虚に振舞うのだ』と答え、続けて言いました。『あなたがたには預言者と啓典がある。そしてあなたがたに、酒を飲むなとおっしゃっている。それなのになぜ飲むのか？』

私は言いました。『我々の中の卑しく下卑た者たちが飲んでいるだけだ。奴らはそういう習慣なのだ。』

彼は言いました。『あなたがたは堕落を禁じられている。それなのに、そなたの兵士は［他人の］穀物を食べている。これこそ堕落だ。』

私は言いました。『私の軍は［イスラームに改宗した］アジャムの数部隊からなっている。彼らにとっては信仰上の制約が意味をなさず、このような堕落したことを行うのだ。』

彼は言いました。『あなたがたにとって、絹を纏うことや装飾品を身につけることは禁じられている。だがそなたは金の指輪をはめ、金の首飾りと腰帯を身につけている。』

196）以下の逸話については、イブン・クタイバ（885 年没）の『諸情報の泉』にほぼ同じ内容のものが記述されており、本書の中での人称の乱れなどは適宜読み替える［Ibn Qutayba al-Dīnawarī, *‘Uyūn al-aḫbār*, Ed. Y.‘A. Ṭawīl, Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, Beirut, 1986, vol. 1, pp. 304–305］。

私は恥じ、そして言いました。『これはアジャムの習慣だ。我々はアジャム人と交わり、彼らからこれを学んでしまったのだ。』

彼は言いました。『そうではない。あなたがたが［神によって］禁じられたことを［勝手に］許されるとみなしたのだ。それゆえに、アッラーはあなたがたから王権を奪い、敵にあなたがた以上の力をお与えになったのだ。』

さらに彼は言いました。『３日客人となり、そして去られよ。あなたがたが神の書に背いていることからくる災厄が、（p. 457）私の王国に及ぶだろうから。』」

マンスールはこの話を聞き、言った。「忠告、ああ、なんという忠告であることか。」

この逸話の意図は、災難や病気はすべて罪の報いによって生じるということである。人間は千もの病に侵されるが、それらは他の生きものにはなく、［人間が犯す］様々な罪の報いが原因である。

＜逸話＞

私はある商人から次のように聞いた。彼は言う。「私は商人の一団と一緒にサランディーブの地に行った。サランディーブの町に入ると、私たちは持ってきた商品を売った。私たちはどの町でも肉を買おうとしたが、わずかたりとも手に入らなかった。彼らは『この町では動物は殺されず、血は流されないのだ』と言った。

私はある場所で鳥を買い、部屋に持ち込んで、絞めて料理した。次の日、何人かの将軍がやってきて、私をサランディーブの王の宮殿に連れていった。王は『何の用で来たのか』と言った。私は『商売のためです』と答えた。王は『商品を売ったのだから、帰れ』と言った。さらに、『おまえの部屋からは、肉の焼けた匂いがした』と言われた。私は『ええ、私たちの宗派では許されております』と答えた。王は言った。『その許可されたものは自分の国で食せ。［ここでは］肉を食べ、動物の血を流した場所では寿命が短くなり、王国が荒廃するのだ。ここから去らないのなら、おまえたちを投獄する』と。

我々は全員［すぐさま］旅立った。」

この話の意図は、罪悪は病気や災厄をもたらす、ということである。一方で、［神への］服従や喜捨は健全さや健やかさをもたらす。預言者――彼に平安あれ――は「災難は［神への］祈念で退け、汝らの病は喜捨で癒しなさい」とおっしゃった。

知れ。災厄のうちで、暑さ寒さよりも悪いものはない。絶えず対策を採り続けなければならない。寒さに対してはリスやキツネ［の毛皮］で、暑さに対しては扇子や麻布仕立ての蚊帳（ẖīš-ẖāna）で［というように］。さらに、病気に対しては薬や治療で［対策を採らねばならない］。たとえ、創造主の定めは変わらない、ということに信を置いているとしても、努力と用心の道を歩まなければならない。もし医者が災厄を［未然に］防ぎ切るならば、いかなる医者も病人にはならず、いかなる賢人も死にはしなかったであろう。

そう、創造主は様々な因果関係をお定めになった。夜は（p. 458）暗くお創りになり、蝋燭をともして明るくするために火をお創りになった。さて、因果関係についての一文を述べよう。

<特性について>

知れ。創造主はあらゆるものに「特性(ḫawāṣṣ)」を用意された。それにはいくつかある。

［ひとつは］クモに備わるような吸着にまつわる特性(ta‘līqī)であり、クモは「化膿の熱(tab-i sīm)」[197]を持ったものに糸を巻く。あるいは、視覚にまつわる特性(naẓarī)があり、たとえば、「サマンド・アスラール(samand aslār)」[198]を見ることである。それを目にした者は誰もが死んでしまう。あるいは、照応(musāmatī)や合致にまつわる特性(barābarī)があり、たとえば、犬の影が〔ハイエナの上〕に重なると、犬はその場から動けない。あるいは、聴覚にまつわる特性(samā‘ī)がある。たとえば、白鉛や、銅から取り出した銀を［金属製の］器や盥で叩くと、耳にした鳥や獣はその場から動けない。あるいは、嗅覚にまつわる特性(šammī)がある。たとえば、ライオンの匂いを嗅いだロバはその場から動けない。あるいは、同期にまつわる特性(muwāfiqī)がある。たとえば、ヒョウと蛇の子は一緒に生まれる。あるいは、反発にまつわる特性(muṣādamatī)がある。たとえば、ハシバミの棒で円を書く。その中に入れられたサソリは円から外には出られない。あるいは、天の回転による巡りあわせにまつわる特性(ittifāqī)がある。事をなすにあたって上手くいったりいかなかったりする時間がある。もっとも、人はそれについては何も知りはしない。天の回転をたとえるならば、すばやく回っている臼のようなものである。少量の泥を臼の上に投げてそこにくっつけ、さらにその泥の上にくるように別の丸石を投げる。丸石は泥の真上に載るかもしれないし、外れるかもしれない。100 個の丸石を投げたとしても、1 個も泥の上に載らないこともあろう。そのうちに、もしある時刻に事が上手く運ぶと、その後はそのときこそが幸運の瞬間だとみなすことができる。

また、次のように言われている。月が双子宮にあるとき、瀉血をすることはできない。月が獅子宮にあるときに衣服を裁つことはできない。というのも、獅子宮は（p. 459）不動の宮であるのに対し、衣服は不動ではないからである。獅子宮にあるときに縫った衣服は経帷子となる。月が処女宮にあるときには婚姻すべきでない。天蠍宮にあるときには旅をしてはならない。なぜなら天蠍宮は南にあり、遠方に位置している。南はすべて［人の住まない］荒廃地であり、［天蠍宮は］ゆっくりと上昇する。［すなわち］その旅から戻ってこられないのである。

こういった類いの当て推量がいろいろと行われるが、彼ら(賢人)は知らないのである。月が天蠍宮にあるときに大勢の人が旅に出たが、死ななかったということを。星々や諸宮の学問(天文学)は偉大な業績だと私は述べてきた。だがその核心は、創造主以外には誰も知らないのである。

特性［と関係性］に関する知識については、このくらいのことを述べておこう。たとえば、琥珀は藁を引き寄せ、ヨモギは金を引き寄せ、磁石は鉄を引き寄せる[199]。また、中国のとある石はそれを握る者を泣かせ、別の石はそれを持ち上げる者を笑わせる。その理由は、創造主以外は誰も知らない。まことにアッラーは最もよく知りたまう。

<医学と薬学(tadāwī)の知識について>

知れ。医学では様々な驚異や驚くべき調合物が編み出されている。［医学は］有益な学問である。ある男が［病気という］災厄に巻き込まれ、人生に絶望し、妻子や地所への欲を失ったとしよう。

197) SYM(sīm)には、「化膿」という意味があり、tab-i sīm とは「化膿熱」を指すと思われるが、同音異義語でよりよく使われる意味は「銀、銀糸」である。ここではおそらく、クモの糸と銀糸が結びついている(関係性がある)と捉えられているのであろう。

198) それに見られた者は死ぬとされる動物の名［*LN*: Samand aslār］。

199) 本書では、琥珀や磁石など、何か特定のものを引き寄せる組み合わせについては何度か言及がある。ただし、前出箇所では、金を引き寄せるのはトルコ石であり、ヨモギに関しては初出である［本訳注(3)『イスラーム世界研究』第 3 巻第 2 号、2010 年、390 頁; 同 (4)、541–545 頁］。

そこである学者が治療を施すと、それによって彼の心はその病気や心配事から解き放たれる。こうして賢人たちは、「大テリアカ（taryāq-i fārūq）」[200]や解毒剤（maṯradīṭūs）や緩下剤（iyārij）やミロバラン[201]舐剤（iṭrīfal）といった、身体への影響が明らかな調合物をいくつも作成してきたのである。

きわめて珍しい技巧のひとつに、ある賢人がホラーサーンのアミールのために作った太鼓がある。腹が痛む者がその太鼓を叩くと、腹痛が治まったのであった[202]。その後、［太鼓は］宝物庫の中に置かれていた。そうこうするうちに、あるアミールがそれを奪い取って叩いてみたところ、腹からガスが出て［放屁した］。彼は怒って［太鼓を］地面に投げつけ、壊してしまった。［アミールは］その太鼓の中に作られていた木材の構造を見て、言葉も出ないほどに驚いた。彼は［ようやく］これが何であるかを知り、それを壊したことを後悔した。これこそは、人間が高尚な学問から編み出した調合物の 1 つである。

特殊なものや珍奇なものはたくさんあり、証明の必要はまったくないほどである。たとえば、中国の境域では猫が生まれず、ラクダは（p. 460）ルームでは生まれない。馬はヒンドゥスターンでは死に、象はイラクでは死ぬ。ハイエナは 1 年間は雄で、［次の］1 年は雌である。マディーナに運ばれたものはどれも芳しい匂いがするようになるが[203]、アンタキアに運ばれたものはどれも悪臭を放つ。アンダルスには 2 つの山の間にとある谷があり、そこを通ると必ず人間も家畜も腹を下し、それは 3 ファルサング先へ行くまで続く。ブルーラーン（Bulūrān）[204]の境域には谷があり、そこを通った者はたとえ勇敢であっても泣きだす。こういった事柄の秘密は創造主のみがご存じである。

［節度を保つこと］

知れ。人間は生来の熱をバランスよく保つと長生きする。もっとも 1 年の寿命が 10 年になるというわけではない。しかしながら、健康な状態での 1 年は、病気の 10 年に匹敵するであろう。

食べ過ぎや過度の性交ほど、人間を害するものはない。過度の性交は命に差し障る。人間のおおもとは心臓であり、脳であり、神経である。しかし性交はこれら 3 つを弱らせる。愚かな者たちはみな毎日侍女や妻たちの尻を追いかけ、魅惑や媚態に夢中となり、寿命を性交に差し出す。そうして最後には、黄疸や動悸や水腫の病に罹ってしまう。また、性交は視力を失わせる。神経は働きすぎて疲弊する。心臓の火は消えんとする。消化力は衰える。消化が弱くなると、70 種類の病気が現れる。

私には 100 年に 1 年足りないほど生きた父――**彼にアッラーの慈悲あれ**――がいた。髪の毛のほとんどは黒く、背はまっすぐで、夜には細かな作業もしていた。［父は］私に「寝床では節制せよ」という戒めを残した。というのも私が妻を求めたとき、私は 40 歳だったからである。私は 60 歳になったとき、夜着を畳んで片づけた。父はよく「鉄を背中に持ちなさい」と言っていた。すなわち、「背中の液（精液）を守りなさい」［という意味である］。なぜなら［精液は］背骨の中で鉄と同様の働きをしているからである。すなわち、性交ばかりしている者は［背骨が］曲がる、ということである。

200）毒のある動物に咬まれたり刺されたりしたときの解毒剤。そのほか、黒胆汁から起こる諸病、ライ病、苔癬などにも有効であるとされる［前嶋信次『東西物産の交流――東西文化交流の諸相』誠文堂新光社、1982 年、61–66 頁］。

201）本書第 5 部の「樹木・植物」の項で、その医学的効用が述べられている［本訳注（6）、566 頁］。

202）本訳注（4）、544–545 頁の逸話を参照のこと。

203）マディーナ（メディナ）は、芳香を放つことで有名［本訳注（5）、438、460 頁］。

204）この地名については不詳。現在はイランのロレスターン地方にこの地域名が存在するが、アラビア語やペルシア語の地理書からは見つからない。本訳注（7）、506 頁で言及されているブルールか、あるいはペルシア語の bulūr（水晶の意）の複数形の可能性もある。

ある学者は「性交するのはいつが良いのでしょうか」と聞かれ、「弱くなりたいとあなたが望むときだ」と答えた。ガレノスに性交について人々が尋ねると、(p. 461)「それは流出する霊魂にほかならず、汝が望むときにそれを放て」と彼は言った。すなわち［ペルシア語では］「精液は流れ出る霊魂であり、保ちたいときは保ち、外に出したいときは出せ」という意味である。

ある学のある帝王がいた。彼にはヒンド人の妻が1人しかおらず、毎年1度だけ彼女と交わるのであった。人々は、「あなたはこの世の楽しみを享受していません。どうして美しい侍女や妻を［もっと］持たないのですか」と言った。［王は］言った。「性交をすることは魂を失うことだ。魂を失うのは年に1回で十分だ」と。

＜栄養と適切な食事法について＞

知れ。人間は刻々とすり減っていく。太陽は人を乾燥させ、人を取り巻く空気は彼から湿り気を奪う。湿って干されている服が10マンであり、それが1時間後、乾いて9マンに減っているようなものである。人間がすり減るにつれて、代わりにその分の食事が必要となり、人間が乾く分、水が代わりに必要となる。そのため、食事は適切な方法でとらなければならない。毎日1度食事をとり、自らを清潔に保つようにしなさい。預言者――彼に平安あれ――はおっしゃった。「長い爪は悲嘆を生みだし、汚れた服は貧しさをもたらす」と。この言葉の核心は、爪が長くなると、それを見るたびに人は悲しくなり、汚れた服は、人々がそれを避けてその者とつき合わなくなり、そうして貧しさが生じる、ということである。

［逸話］

ある賢人がマームーンに、「米を食べると人生を多く過ごせます」と言った。マームーンは、「どういうことか」と尋ねた。［賢人は］言った。「私は、米を食べた人はその晩良い夢を見ると聞きました。眠りの中で良い夢を見て過ごすならば、その眠りは昼間［の活動］に等しくなります。ゆえにその者は2つの昼のうちにあるのです」と。マームーンはこの話を気に入った。

水は澄んだ泉のものを飲むべきである。なぜならよくない水の害は多いからである。また、肉を食べることには大いに用心せよ。［肉を食べることは］様々な害をもたらす。血や肉を食べる肉食獣は、(p. 462) 草を食むカモシカや羊より害が多い。また、タカやハヤブサには、種をついばむハトやジュズカケバトにはない獰猛さがある。肉の中では若鶏ほど上品なものはない。また、シャコ(鷓鴣)ほど栄養がある肉は他になく、次いで赤毛の子羊、さらに〔若い〕鶏とヤマウズラである。力が奪われた病人には、シャコの肉を与えよ。もし力が戻れば望みがあるが、そうでない場合は、その病人には望みがない。

暖かくなる選りすぐりの布地は綿である。絹も暖かく、虫がつかない。亜麻や麻［の布地］は涼しい。亜麻はもともと植物なので、日光や月光によって傷み、水で硬くなる。皮では、子羊の皮より暖かいものはない。次いでブルタース[205]産とスィース[206]産のキツネ［の皮］が子羊に匹敵する。［子羊の皮の］特徴は洗えることである。ヤマネコ［の皮］は痛風に効果があり、精液を増やす。

205) 本訳注(4)、499頁、注98参照。

206)「スィース(Sīs)」という地名については不詳。類似した地名としては、『諸都市辞典』にアンタキアとタルススの間にある町として挙げられているスィースィーヤ(Sīsīya)があるが、関連は不明［Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 3, pp. 297–298］。写本によってはマッスィーサの名が挙がる。マッスィーサについては、本訳注(3)、391頁、注37を参照。

クロテンも同様である。

［奨励される習慣］

　櫛で頭を梳くのは朝にすべきである。そうすれば［体内の］蒸気が毛穴から発散する。肝臓に負担がかからないように、左半身を下にして寝ること。肝臓は右半身にある。両手を胃の上に置くと、熱が胃に伝わり、食事が早く消化される。熱が胃に伝わるように、子供を胃の上に寝かせる者もいる。夜は水を少なめに飲むこと。食事をとらずに風呂に入ること。そうすれば余分なものが体内から溶け出る。食事の後に風呂に入ると、肝臓に閉塞物（sudad）が生じる。食事は冷めている方が熱いものより良い。［熱は］体の奥底に逃げてしまう。熱は拡散するので、［食事が］熱いときには消化が弱くなる。

［人間特有の病］

　知れ。人間は、自らを均衡ある状態に保つことはできない。なぜなら（p. 463）人間を司っている器官はそれぞれに異なっているからである。肝臓は熱質かつ血液質である。肺は冷質かつ粘液質である。心臓は熱質である。脳は冷質かつ湿質である。肝臓にとって益があるものは、脾臓には害があり、脳に益があるものは、心臓にとってはある種の害がある。こうしたことから人間は「死」という栄誉に与っており、永遠には生きられない。金は１つの性質しか持たず、石も１つの性質しか持たない。ゆえに、それらは長持ちするのである。

＜逸話＞

　人間には 3000 の病があると言われている。［そのうち］1000 の病は人間が知り、かつその対処法も知っている。1000 の病は知ってはいるが、その対処法は知らない。［残りの］1000 の病は、病についてもその対処法についても知らない。人間に生じるこれほどの病は他の生きものにはまったく見られない。その理由は、人間は様々なものを食べるからである。肉はある性質を持ち、果実は［別の］ある性質を持つ。蜂蜜はある性質を持ち、油は［別の］ある性質を持ち、酢は［さらに別の］ある性質を持つ。種や仁には、それぞれが生み出す性質がある。これはたとえるならば、ある人が苗木を植え、１週間はそれに水を与え、次の１週間は酢を、さらに次の１週間は石油を与えるようなものである。その木はどのような状態になるだろうか。さらにたとえるならば、ハトやヤマウズラは、生涯にわたって小麦や大麦やキビを食べ、馬や羊は草や干し草以外は受けつけない。ゆえに彼らは、癲癇、水腫、眼炎（ramad）、麻痺、歯痛および様々な熱病に罹らず健全であり、これらの病厄への恐怖を持たないのである。これらはすべて食べることの影響であると知るがよい。

＜新生児について＞

　赤子がいるなら、乳は母親のものが最も良い。そうでなければ（p. 464）25 歳の乳母の乳が良い。［乳を与える者の］食事は小麦の煮汁と煮込んだ肉と美味な水であること。また、授乳は食事を終えて消化した後にすること。苦い食事や酸味のある食事や甘い食事は控えること。また、ニンニク、タマネギ、カラシ、セロリ（karafs）といった体液を薄めるもの（mulaṭṭifāt）は食べないこと。［体液の］余剰分が病因を流し、乳と一緒に出てくるからである。その乳を赤子が飲むと、それによって潰瘍や癲癇が生じる。

　［赤子が］生まれたときには優しく語りかけること。赤子がひどく泣く場合は、鶏肉を口の中に

含ませれば機嫌がよくなる。赤子を揺りかごの中できつく縛らないこと。厳しい暑さ寒さや、忌まわしい声、恐ろしげな光景から守り、おびえないようにすること。乳を与えすぎないこと。満腹状態になるのを控えること。赤子［の肌］に吹き出物が生じたら、膏薬(mušammaʻ)やおしろい(ispīdāb)をつけること。腿にできた場合は泥やヘンナをつけること。子供の耳から黄色い汁が出てきた場合は、毛織物をサフラン水と蜂蜜に浸し、耳にあてること。

母乳の出が悪くなった場合は熱い湯で沐浴し、アニス水を飲むこと。母乳が濃い場合は酢蜜を飲むこと。そうすれば、癲癇が生じない。乳が薄くなった場合は風呂を控えること。赤子が咳をしていたら、大麦の汁を少し与えること。［食事を］食べる頃になれば、まず蜂蜜を与えること。大きくなったらバラ水を与えること。バラ水は水よりも良い。7ヶ月になると歯が生えてくる。［出産は］春であればより容易である。冬に生まれると腹が下りやすいので、［まわりは］気遣ってやり、ブドウ酒を少し与えること。乳は丸2年半与えること。賢人たちは4年と言っている。10歳で教育を始めること。そうすれば投げ出さず、理性も手伝って困難が生じない。

次に医学について述べよう。

＜医師たち(al-aṭṭibāʼ)による世にも稀な治療法＞

知れ。賢人(ḥukamā)[207]たちの治療法には様々なものがあり、なかには賢人たちの聡明さや見識によってなされた非常に驚くべき治療法もある。まず、賢人は学があり、品行方正であり、能弁かつ経験豊かでなくてはならない。

［逸話］

次のように言われている。(p. 465) 太腿の骨の先が脚の付け根から外れ、ぐらぐらになってしまった男がいた。人々は1人の賢人(医者)を呼んだ。彼は、「牛を連れて来なさい」と言った。牛に塩と草を与え、牛は満腹になるまで食べた。その後、患者を牛に跨らせ、その両足の指先を牛の腹の下で縛った。そして牛を水場に連れて行った。牛が水を飲むごとにその腹は膨張し、病人の両方の太腿は［それに沿って］伸びた。やがて、その外れた[208]骨の先は本来の場所に戻り、しっかりと納まった。この治療法はきわめて珍しいものである。というのは、［太腿の］骨を元の場所に戻すことは至極困難だからである。

［逸話］

ホラーサーンのアミールの足が腫れ上がり、折れてしまった。彼は呻き苦しんだ。だが彼は患部を下にして横たわり、賢人(医者)たちが訪れると、正常な方の足を見せて呻くのであった。どの賢人も包帯を巻くよう処方するばかりであったが、［アミールは］彼らに［報酬を与えて］応えてやった。やがて、1人の聡明な賢人が連れてこられた。彼はアミールの足を見ると、「なぜ呻いているのですか。あなたの腿は〔ダチョウ〕の腿より壮健です」と言った。［アミールは］この賢人が聡明であると悟り、患った方の足を見せ、「これを治すのは難しかろう」と言った。だが［賢人は］何も入っていない革袋を持ってくると、［それを］アミールの両太腿のあいだに置いた。そして両方の足の指先をしっかりと結わえ、革袋に空気を吹き込んだ。アミールの太腿は伸び、外れた

207) 本訳注では、ḥakīm/ḥukamā という語をほぼ一貫して「賢人」と訳している。本書の「賢人」は、天文学や医学、数学などの自然科学を修めた「学者」を指す語として用いられており、文脈によって、「医者としての賢人」や「天文学者としての賢人」などがいる。ここでは言うまでもなく、「医者」を意味する。

208) QSL という単語についてはどの辞書でも確認できなかったため、文脈から判断した。

場所から骨は元の位置に納まった。［賢人は］そこに棒をあてて固定した。

＜逸話＞

言われているところでは、アブー・アリー・［ブン・］スィーナー（Abū ʻAlī-yi Sīnā）[209] がシャームにいたとき、遺体が台に載せられて運ばれてきた。「それをどうするのか」と彼が尋ねると、人々は「埋葬するのです」と言った。彼は、「この者は生きている。埋葬してはいけない」と言った。人々が3日間放っておくと、男は動き出し、立ち上がった。人々は［アブー・アリーに］「どうして経帷子に包まれた者が生きているとわかったのですか」と尋ねた。彼は「両膝がまっすぐ揃っていたからだ。もしだらりと開いていれば、死んでいたことになる」と答えた。こうして人々は彼の聡明さを知り、彼は有名になった。

（p.466）＜逸話＞

両脛が腫れ上がり、ぐらぐらになった者がいた。彼は呻き苦しんでいたが医者たちは手の施しようがなかった。やがてカーブル出身のある賢人が次のように言った。「私がこの治療を行いましょう。ですが、治るかもしれませんし、動けず不随になるかもしれません」と。男は「あなたは私の血（命）に対する責任は考えなくてよい」と答えた。そこで、彼はこの患者を1本の柱にしっかりと括りつけた。彼の両足の脛を切開し、その骨を露わにして錐で穴を開けた。すると、脛の骨から液が流れ出た。その腐臭のために人々が逃げ出すほどであった。その後、肉を骨の上に被せ、軟膏を塗って塞いだ。男はその苦痛から解放された。

こういった類いの非常に珍しい治療が施されてきた。［それらについて］私は『特例集（Dastūr-i uṣūl al-ḫawāṣṣ）』[210] の書の中で存分に述べているので、ここではこの程度で十分であろう。

＜アッラーの定め（qaḍā'）と天命（qadar）について＞

さて、創造主の定め（taqdīr）について新たに述べていこう。誰もそれから逃れることはできず、ただ従うよりほかに術はない。よって、神の定めに満足し、苦しみや病にあっても嘆き悲しんではならない。

伝えられているところでは、預言者――彼に平安あれ――が崩れた壁を通りかかったところ、彼は急いで通り過ぎた。人々は「アッラーの使徒よ。あなたはアッラーの定めから逃れるのですか」と言った。預言者は答えた。「否、私がアッラーの定めから逃れても［結局は］至高なるアッラーの定めに行き着くのだ」と[211]。

＜逸話＞

ある王が自分の運勢を占うと、人々に殺されると出た。彼は石で城砦を造り、鉄製の門を取り付

209）哲学者・医学者として有名なイブン・スィーナーのこと（1037年没）。本書第5部「樹木、果実、香草について」には、イブン・スィーナーの『医学典範』を参照して書かれたと思われる記述が数多く存在する。具体的な指摘については、本訳注（6）、550頁、注2などを参照のこと。

210）本書の著者ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィーが執筆した治療法に関する書と考えられるが、詳細については不明。

211）12イマーム派の著名な伝承者 Ibn Bābūya（もしくは Ibn Bābawayh、991/2年没）がほぼ同様の伝承を紹介している。ただし、そこではこの発言は預言者ムハンマドではなく、アリーの言葉とされている［Ibn Bābūya, *al-Tawḥīd*, Ed. S.H. al-Ḥusaynī al-Ṭihrānī, Maktaba al-Ṣadūq, Tehran, 1967–68, p.369］。

けた。財物をその中に持ち込み、そこに留まった。

創造主の定めは次のようなものであった。サクスィーン[212]からやって来た隊商が海上にいたとき、船が壊れ［難破した］。1人の男が岸に（p. 467）打ち上げられた。恐ろしい夜のことだった。男は猛獣を恐れ、1本の木の上に逃げ込んだ。大きな鳥がやってきて、その木の上にとまった。［鳥は］一声鳴いて飛び去った。この男は言った。「私がこの木の上で眠って下に落ちようものなら、猛獣に食べられてしまうだろう。そうでなくても空腹のために死んでしまうだろう。なぜ私はあの鳥の足をつかまなかったのだろう。そうしていれば、私をこのおぞましい場所から連れ去ってくれただろうに。」

次の日、あの大きな鳥が再びやってきて木の上にとまった。［鳥が］一声鳴いたので、［すぐさま］この男は両手で鳥の足をつかんだ。鳥は立ちあがり、飛び立った。［鳥は］男を運び、くだんの王の城砦の上にとまった。男が目をやると、城砦は飾り立てられ、いく筋もの川の流れがあり、そして美しい庭園があった。男は庭園の中を歩き回った。王は彼を見つけると、階上に上がり、言った。「おまえはここで何をしている？どうやってこの城砦に入ってきたのか？」

彼らは揉み合いになり、2人とも城砦の屋根から下に落ちて、大けがを負った。

この男は鳥に言った。「おまえを創造した神にかけて、おまえは何者か？」

［鳥は］言った。「私は鳥ではなく、『悪しき定め』である。私から逃れようとする者がいても、私はその者にしがみつくのだ。」

この逸話の意味するところは、災難や創造主の定めからは誰も逃れることはできない、ということである。

＜逸話＞

次のように言われている。ある男が荒野を進んでいると、色とりどりの1羽の鳥がいた。男が捕まえようとすると、［鳥は］飛び立った。男が鳥のあとを追いかけると［近づくたびに］鳥は飛び去り、ついには井戸の中に入っていった。男は服を脱ぎ捨てて井戸に入ったが、鳥は見つからなかった。井戸から上がると、彼の服は持ち去られていた。彼は裸のまま町に入った。ある廃墟の中に行くと、包みが1つあった。手にとってみると、上等な長衣と帽子が入っていた。［男は］「これは［天からの］贈り物だ」と言って、それらを身につけた。外に出ると、男は取り押さえられた。人々は「これは王の服だ。おまえが王から盗んだな」と言って、身ぐるみをはがし、彼を絞首刑にした。

このように、創造主の定めに対して用心しても益などないのである。

＜逸話＞

次のように言われている。ある隊商が山の麓で宿営した。彼らはかなりの人数であった。乳を手に入れるために、彼らは1人の侍女を（p. 468）使いに出した。彼女は家畜の群れのところまで行き、乳を買った。彼女が乳を頭に載せて帰る途中、1羽のトビが飛んできた。トビは蛇をくわえていた。［蛇の］毒が滴り、乳の中に落ちたが、侍女はまったく気づかなかった。隊商の人々はそれを飲み、死んでしまった。

さてこの場合、罪は侍女にはなく、蛇にもトビにも乳にもない。いくつもの［要因が重なり合った］このような状況は、創造主の定めによる以外は起こり得ない。

212）ウラル川流域の町。詳しくは、本訳注(5)、426–427頁参照。

この話の意図は次のとおりである。偉大な医師（ẖwāja）は「この病気はこれこれの食べ物が原因である。それを食べていなければ、このようにはならなかったであろう」などと言ってはならない。なぜなら、天の定めには妨げとなるものなど存在しないからである。

＜逸話＞

次のように言われている。ある帝王がいた。彼は盗人にも敵にも用心しており、１頭のライオンを連れてきて自らの玉座の脚に鎖でつないだ。誰も彼のまわりに近寄らないようにするためである。この帝王はライオンの鳴き声に驚嘆していた。ある日ライオンの向かいに立ち、ガラス玉を投げると、ライオンは吠えた。王はそのことに驚きを禁じ得なかった。ガラス玉をもう１つライオンに投げると、ライオンは攻撃に転じ、王に飛びかかり、玉座を引き倒した。ライオンは王の上にのし掛かり、玉座はライオンの上に折り重なった。人々が集まって来たときには、ライオンは王を食べつくしていた。すなわち、王が自身の護衛にしていたものが、彼にとっての最大の敵だったのである。彼の不幸は用心深さによるものであった。

天の定めには、幸運と不運という２種類がある。それが実際に起こるまでは、誰も何ひとつ知り得ない。

＜逸話＞

次のように言われている。ある愚鈍な男がいた。彼は何ら技能を有しておらず、困窮していた。そこで男は街区を巡りながら、「俺は占星術師だ。星廻りが見れるぞ」と大声で触れ回った。彼は王のもとに連れて行かれた。その王は宝石を失くしてしまい、みなが探していたのである。［実際は］ある従者が［それを］持っていた。王は占星術師に尋ねた。「誰が宝石を持っているのか？」

従者は恐れ怯えた。彼は占星術師の向かいに立っていたが、目配せで（p. 469）「私が持っていることを言わないでくれ」と伝えた。占星術師は王に「明日、私がその宝石を手に持って参りましょう」と言った。

彼は外に出て、宝石を従者から受け取った。カモに投げ与えると、カモはそれを飲み込んだ。

［占星術師は］王に言った。「この館にいる人々を集めてください。」

人々が召し出され、［その中には］カモも含まれていた。占星術師は言った。「［宝石は］このカモの腹の中にあります。」

カモの腹から［宝石が］取り出された。［こうして］占星術師に対する尊敬の念が生まれた。

ある日、王妃が彼を呼び出した。彼女は言った。「私は妊娠しています。［お腹の子は］男の子でしょうか、女の子でしょうか？」

占星術師は困惑したが、次のように答えた。「あなたの顔には男の子を産むと出ています。あなたのうなじには女の子を産むと出ています。」

創造主の定めにより、産まれたのは［双子の］男の子と女の子であった。占星術師の境遇はすばらしいものになった。

ある夜、この王は恐ろしい夢を見たが、［内容を］忘れてしまった。王は占星術師に尋ねてみた。彼は「考えてみましょう」と言い、憂鬱な気分で立ち上がり、［館の］片隅に行って考えあぐねていた。王が占星術師のもとに行こうと立ち上がったところ、［突然］イーワーンが落ちてきた。占星術師は言った。「あなたが見た夢はこれだったのです。創造主があなたをお守りくださったのです。」

王は彼に様々な褒美を与えた。

これは、幸運［な場合の事例］であり、良きに［終わる場合の］創造主の定めである。創造主が誰かに恩寵を示そうとされるとき、理由があってなさるのではない。また、誰かを卑しめようとされるときも、理由があってのことではない。

＜逸話＞

言われているところでは、ある王がいた。ヒズルに会って彼に質問したいと、いつも願っていた。彼の宰相は「あなたにとって役に立たないことをどうして望んでいるのですか。誰も望んでいないことなのに」と言ったが、王は聞こうとしなかった。

一方、困窮した貧者がいた。彼は［王に金を］無心しようとやってきて、言った。「私に100ディーナールください。私は［それを］喜捨として配ってまいります。」

［王は100ディーナールを］彼に与えた。しばらくすると、［貧者が］再びやってきて、「もう100ディーナールください。喜捨として配ってまいります。そうすれば、私はヒズルと会えるかもしれません」と言った。王はさらに100ディーナールを与えた。

ある日、［貧者は］ふさぎ込んで座っていた。ヒズル――**彼に平安あれ**――が傍らにやってきて言った。「おい、そこの男。何をふさぎ込んでいるのだ？」

［貧者は］言った。「ヒズルを見せてやると、ある王さまに約束してしまったのだが、できっこないのさ。」

［ヒズルは］「私と一緒に行こう」と言った。

［貧者は］言った。「行けるものか。もし私がヒズルを連れて行かなければ、［王は］私を殺すと誓いを立てているのだから。」

(p.470)［ヒズルは］言った。「恐れることはない。私と一緒に来い。」

［貧者はヒズルと一緒に］王のもとに行った。

王は「おまえは何者だ。私に跪拝しないとは」と言った。

［ヒズルは］言った。「私は誰にも跪拝しない。」

［王が］「おまえは誰だ？」と問うと、「私はヒズルだ」と答えた。

［王は］言った。「おまえがヒズルならば、私の質問に答えてみせろ。」

「言うがよい」と［ヒズルは］言った。

「今この時、神は何をしておられるのか？」と［王は］言った。

［ヒズルは］言った。「答えてやろう。この立っている貧者を自分の場所に座らせよ。そしておまえは立つのだ。」

王は立ち上がり、貧者が座った。ヒズルは言った。「創造主は今この瞬間、おまえが目にしたことをなさっているのだ。［すなわち］王権をおまえから奪い、この者にお与えになったのだ。」

［こう言うが早いか］剣で王の首に切りかかり、その首を落とした。

この逸話の意味するところは、不運の定めから逃れることは誰にもできない、ということである。

＜逸話＞

次のように言われている。イスタフルに暴君がいた。イスタフルは、周囲が40ファルサングもある町で、ジャムシードの宮殿[213)]がそこにあった。宮殿は100本の柱で支えられており、それぞれの

213) ペルセポリスのこと。本訳注(5)、371頁、注42を参照。またペルセポリス遺跡が近くにあるイスタフルはイラン南部のファールス地方の古都であったが、イスラーム到来後は完全に廃れた。

柱は 48 アラシュの高さがあり、一枚岩から彫り出されたものであった。それは今でも残っている。

さてこの王は、誰も引くことのできなかった一張の弓をイーワーンに吊るし、「誰であれ、私の弓を引くことができた者に、イスタフルを与える」と宣言した。人々は彼に絶望していた。彼は、民の妻や娘を手にかけていたのである。

一時が過ぎ、祭りの日が訪れた。子供たちは郊外にやってきた。彼らは 1 人を帝王にして、その名を「アドゥド・アル＝ダウラ」とした[214)]。そして、別の 1 人が彼の宰相になり、また別の 1 人が侍従長（amīr-i ḥājib）になった。子供たちは旗を掲げ、［アドゥドを］玉座に座らせて彼の前に［整列して］立った。アドゥドは［彼らに］命令を発し、人々はそれを見物していた。数日が過ぎ、彼のことが有名になった。男も女も出かけて彼らを見物し、アドゥドの泰然自若とした様子に驚いていた。

この話が王にも伝わった。彼は「私も行って見てみよう」と言った。王は宰相と一緒に［出かけ］、彼らは服を取り替えて郊外にやってきた。宰相はアドゥドの前に行き、苦情を訴えた。「この男は私の屋敷を（p. 471）無理やり奪いました。返すようにお命じください。」

アドゥドは［王に］言った。「おまえはどう申し開きをするのか？」

［王は］言った。「そうだ、私が所有している。」

［アドゥドは］言った。「彼に渡すのだ。」

王は言った。「私は多くの屋敷を持っているが、誰にも与えたことはない。」

アドゥドは言った。「不正の末路はひどいものだ。彼の屋敷を返しなさい。」

［王は］「渡しはしない」と言った。

アドゥドは手に槍を持っていたが、怒りのあまり、その槍で王の喉を刺した。王は即死した。

一方、この宰相は賢い男であった。彼は［王の］頭に敷物を被せ、言った。「この男は乞食でした。私が埋葬します。」

王［の遺体］を隠し、町に言伝を送って王の家臣を呼んだ。そして王の天幕を運び出して建て、軍を集めて言った。「王はこうおっしゃっている。『私はこの子供を［しかと］見た。彼は王者の作法を身につけている。彼を私の代理と為して、私は隠遁しようと思う』と。そなたたちは同意するか？」

彼らは「同意します」と言った。

［宰相は］アドゥドを彼の王座に座らせ、宝物庫を彼に委ねた。そして王の頭を外に捨てた。パールス（ファールス）の人々は彼の圧制から解放された。

この話の意図は、神がお定めになったことは必ずやそうなる、ということである。

＜逸話＞

たとえ話として語られているところによると、1 羽のカササギ（zāġ）が木の先端に巣をかけていた。キツネが木の下にやってきて、吼え立てた。カササギは卵をキツネに投げ落とした。キツネは［それを］食べて戻っていった。

サンカノゴイがカササギに言った。「どうして卵をキツネにやったんだい？」

214）ブワイフ朝のアドゥド・アル＝ダウラ（在位 949–983 年）は、944 年に 13 歳でファールスの支配者となった。また、ペルセポリスの「ダレイオスの宮殿（Tačara）」に残された碑文から、955/6 年に彼がペルセポリスを訪れたことが知られる［*EI*²: ‘Aḍud al-Dawla; *EIr*: Persepolis］。この逸話は、これらの史実を下敷きとして発展したものかもしれない。ちなみに彼（名はファナー・ホスロウ）の称号である「アドゥド・アル＝ダウラ」は、「国家の支柱」の意。

カササギは言った。「怖かったんだ。だって［キツネが］登ってきて私の巣を荒らし、私の子供たちを殺してしまったら［と思うとね］。他の子たちを守るために、卵を犠牲にしたんだよ。」

サンカノゴイは言った。「私なら奴には何も渡さなかったのに。」

キツネは川の縁に立っていたサンカノゴイのところに向かった。［キツネは］言った。「おい鳥よ、風が吹いたらおまえはどうするのだ？」

［サンカノゴイは］言った。「向きを変えるさ。」

［キツネは］言った。「もし風がこっちに吹いてきたら、どうするのだ？」

［サンカノゴイは］「向きを変えるさ」と答えた。

［キツネが］言った。「もし風が方々から吹いてきたら、どうするのだ？」

［サンカノゴイは］答えた。「頭を羽根の下に隠すのさ。」

［キツネは］言った。「どうやって？」

サンカノゴイは（p. 472）頭を羽根の下に埋めた。［その瞬間］キツネは彼を捕らえ、言った。「おまえはカササギに、どうして卵を守らなかったのかと忠告していたな。おまえは自分さえも守れなかったというのに。定めからは誰も逃れられはしない。」

医学に関してはこの程度のことを述べておこう。人は定めから逃れることができず、薬や治療や処置をもってしても、死から救われることはないのである。

さてこの後は、「夢」という行為の驚異について新たに述べていこう。

［第 8 章］ 夢と［その際の］霊魂の状況について

知れ。夢とは魂 (jān) の働きであり、実に不思議な驚異である。［信仰正しく］清らかな者たちの魂は［体から出て］動き回るものであり、清らかな世界からの知らせを受け取る。この場合の夢は預言の一部分である[215)]。一方で［夢は］シャイターンからのものである場合もあれば、真実である場合もある。

ホラーサーンの支配者であったアミール・ターヒル (Amīr Ṭāhir)[216)] は、自分がある年のある月に、水と火の中で死を迎えるという夢を見た。そのため彼は悲しんでいた。サラフス[217)] で敵が彼に勝利したとき、彼らは彼を風呂に閉じこめた。彼らは風呂の扉を閉めたため、彼は熱で死んだ。

＜逸話＞

イマーム・ムハンマド・ブン・ヤフヤーは、ホージャ・サナーイーを糾弾し、彼を「無神論者」や「ザンダカ主義者」と呼んでいた[218)]。ある晩、彼は預言者――**彼に平安あれ**――を夢で見た。［預言者は］言った。「ムハンマドよ、なぜ死者を悪く言うのか。殊に、私の賞讃者であるサナーイーを。それは彼の［私への］頌詩にふさわしい報いではない。」

215）ムハンマドのハディース中に見られる「敬虔なヴィジョンは預言の 46 分の 1 に当たる」を踏まえているのだろう［ブハーリー『ハディース』、夢の解釈: 4］。

216）ターヒル朝のターヒル・ブン・アブドゥッラー (862 年没) のことか。彼はターヒル朝の創始者であるターヒル・ブン・アル＝フサインの孫であり、845 年に父の跡を継いでホラーサーンの支配者となったが、彼の時代にターヒル朝の勢力は衰えた［*EI*²: Ṭāhirids］。

217）ホラーサーンの町。本訳注 (5)、429 頁に既出。

218）ほぼ同様の逸話については、本訳注 (5)、445–446 頁を参照。

ムハンマド・ブン・ヤフヤーは夢から覚め、恐れた。彼が「サナーイーの墓はどこでしょうか」と尋ねると、人々は「ガズナにある」と答えた。彼はロバに乗ってガズナに行った。そして、［サナーイーの］墓の傍らに座り、赦しを乞い求め続けたところ、40 日目に［サナーイーが］夢に現れた。彼は言った。「ムハンマド・ブン・ヤフヤーよ、私の心内を見越した上で、私をザンダカ主義者とか無神論者だとみなしたのかね？」

［ムハンマドは］「いいえ。悔い改めます」と答えた。

(p. 473)［サナーイーは］言った。「おまえは舌（言葉）に注意していなかった。行け。［今後は］筆に気をつけよ、手に気をつけよ。」

［ムハンマドは］夢から覚め、帰っていった。苦労してホラーサーンの境域まで戻り、自らに言い聞かせた。「これほどの苦労が私の身に降りかかるのに、どうして神のしもべを非難する必要があろうか。」

グズが到来し、スルターン・サンジャルに攻撃を仕掛けたとき、スルターン・サンジャルはムハンマド・ブン・ヤフヤーを呼び、尋ねた。「あのテュルク人どもは私に反旗を翻した。どのようなファトワー（法裁定）をおまえは出すか？」

［ムハンマドは］「彼らは反逆者（ハワーリジュ派）であり、彼らの血［を流すこと］は適法です」と答え、ファトワーを書いた。サンジャルはそれを胸に携えた。グズが勝利し、スルターン・サンジャルを捕虜にしてホラーサーンを占領すると、彼らはムハンマド・ブン・ヤフヤーを捕らえ、彼の口に土を詰め込んで殺害した。

この話の意図は次のとおりである。［預言者による］預言（nubūwat）は過ぎ去った。神の使徒ムハンマドの後には預言者はいない。この世界に関する予見は、誰も夢以外では得られないのである。

＜逸話＞

次のように言われている。ハサン・フェルドウスィー[219)]は、ガズナのマフムードのもとから怒って去り、マーザンダラーンに行ったとき、ザールの子ロスタムを夢に見た。［フェルドウスィーは］言った。「ロスタムよ、私はそなたの男らしさについてこれほど詩に称え、そなたの名を世に知らしめた。その報いは何か？」

［ロスタムは］言った。「トゥースに戻れ。某の場所に宝がある。誰にも知られないようにそれを取れ。汝にはその宝で十分であるから、ガズナのマフムードからは何も望むな。」

彼は夢から覚めて、トゥースに戻った。そしてその宝をもとに屋敷を建てた。彼の境遇は良くなった。

＜逸話＞

次のように言われている。ガズナのスルターン・マフムードが郊外に出かけると、アーチ橋の上に座った狂人がいた。［狂人は］言った。「マフムードよ、私は今朝がた夢を見たぞ。」

［マフムードは］言った。「どのようなものか？」

［狂人は］言った。「こんな夢だ。私がおまえの玉座にあり、ガズナは私のものだった。アヤーズ（Ayāz）[220)]は私の前に控えて立っており、私が命令を（p. 474）発していた。」

219）イランの民族叙事詩『シャー・ナーマ（王の書）』の作者。本訳注 (5)、439 頁、注 397 も参照のこと。

220）トゥルクマーン系の奴隷と言われ、スルターン・マフムードのお気に入りの小姓となった（1057/8 年没）。彼の容姿や気質の素晴らしさ、マフムードが彼に対して抱いた愛情は、多くの文学作品に描かれている［*EI*²: Ayāz］。

マフムードは言った。「今はどうなのだ？」

「夢から覚めて目を開けてみたら、何もなかったよ」と彼は言った。

マフムードが「おまえは何が言いたいのか？」と尋ねると、狂人は答えた。「明日にでもおまえが目を閉じると、この王国全体のうち、何ひとつとして見ることはなかろう。私とおまえは同じだ。」

マフムードはこの言葉に深く感じ入り、馬を下りて言った。「私は眠っていたが、おまえが私の目を覚ましてくれた。」

こうして彼は目覚めたのである。これは選ばれし者たるアリーが言っていることでもある。「**人は眠っている。彼らは死んでようやく目覚めるのである**」と[221)]。

私は夢について述べてきた。ここではこの程度で十分であろう。次に、夢の解釈やその発現や質について述べよう。

＜夢解釈や夢の質について＞

知れ。夢解釈は高尚な学問である。夢は魂が内面に戻ることである。魂の本質は幽質であり、それゆえ預言者――**彼に平安あれ**――は、「**夢は預言の 26 分の 1 である**」とおっしゃっているのである[222)]。

＜問答＞

次のように尋ねられたとしよう。「ある者が夢を見て、夢の中で見たことを、起きて見ているものだと思ったとすると、夢と起きている状態のあいだにどうやって区別をつけるのか。我々もまた、夢を見ているのに、起きているのだと思うことがあろう」と。

［これに対しては］こう答えよう。「この問いは脆弱（ḍa‘īf）である」と。なぜなら、我々は、あるものは起きている［際の］ことであり、またあるものは夢の中で生じたことだというように、夢と覚醒状態を知性によって区別できる。夢から覚めたら、何を見たか話す［ではないか］。

知れ。夢はそれを見る者の気質に（p. 475）似る。黄胆汁質の人が［夢を］見ると、火や灯り［の夢］ばかり見る。もし黒胆汁質であれば、恐怖や暗闇ばかり見る。粘液質であれば、水や大河［の夢］を見る。血液質であれば庭園や歌を見る。

一部の夢は［悪魔の］ささやきの場合もある。たとえば、飢えた者がパン［の夢］を見たり、喉が渇いた者が夢で水を飲む、というように。［一方］正しい夢は［神から授かる］高尚な知識であるが、それは［そのような夢が］ある種の天啓だからである。夢見に最もよい時間は明け方と正午である。また、最もよい季節は春であり、最も悪い時期は冬である。日中の夢は夜の夢より強力である。

［逸話］

221）ジャーヒズの編んだアリーの『100 の語録』の 2 番目に収録されている言葉。一方信頼性の高い伝承者として知られるイブン・スィーリーンは、この言葉をムハンマドのものとする［al-Jāḥiẓ, *100 kalima lil-imām amīr al-mu'minīn 'Alī ibn Abī Ṭālib*, Ed. R. M. al-'Abd Allāh, al-Ḥikma, 1996, p. 18; Ibn Sīrīn, *Tafsīr al-aḥkām al-kabīr*, Dār al-Namūḏajīya, Beirut, 1999, p. 290］。

222）前注 215 でも触れているが、ムハンマドのハディースでは「預言の 46 分の 1」である。

アフィーフ・ブン・アル＝ハーリス（‘Afīf b. al-Ḥāriṯ）[223] は、死の床にあるアブドゥッラー・ブン・アーイズ（‘Abd Allāh b. ‘Ā’iḏ）に言った[224]。「もしできるなら、［あなたが］死んだ後に、ご自分の状況を私に知らせてください。」

［アブドゥッラーが］死ぬと、アフィーフは彼を夢で見た。［アブドゥッラーが夢の中で］言った。「我々はまさに救われ、ちっとも苦しみはしなかった。罪を赦し、疑わしきは不問に付される主の良き計らいを見出した。ただし、救いがたい者たち（aḥrāḍ）はその限りではない。」

そこで私（アフィーフ）は「救いがたい者たちとは何でしょうか？」と言った。［すなわちペルシア語では］「救いがたい者たち（aḥrāḍ）とは何か」と私は言った、である。

彼は言った。「誰もが悪い奴だと指で差すような者だ」と。

この話の［ペルシア語での］意味は次のとおりである。彼（アブドゥッラー）は、「私たちは救われ、寛大なる神を見出した。救いがたい者たち（aḥrāḍ）以外は、［神は］罪をお赦しになった」と言った。私（アフィーフ）が「救いがたい者たちとは何か」と尋ねると、彼は答えた。「悪い奴だと指差されてしまうような者だ」と。

＜逸話＞

ガレノスは『医術（Ḥayla al-bur’）』の書で語っている。ある男の舌が肥大化し、口に収まりきらないほどになった。様々な治療も効果がなかった。彼は、「レタスを食べ、その汁で口をゆすぐ」という夢を見た。［夢のとおりに］行うと、男の舌は良くなった。

［逸話］

信徒の長ムゥタスィム・ビッラーは、某というラクダ追いを留置している夢を見た。彼は夢から目覚め、看守を呼び、尋ねた。ラクダ追いは不当に捕らえられ、留置されていたのであった。

（p. 476）＜逸話＞

ある人の膀胱に石があり、大きくなった。夢で、アリーという名の男が１羽の鳥を彼に渡し、言った。「これは、しかじかの鳥で、これこれの地に［この鳥のいる］場所がある。これ（鳥）を焼いて、その灰を食べよ。そうすれば石は排出される」と。彼は夢から覚めると、［夢のとおりに］行い、快復した。

このような夢はきわめて珍しく、［その効］力は少なくもあり、多くもある。また、知れ。シャイターンは自らを様々なものに見せかける。ただし、預言者、天使、太陽と月、復活の日は別である。また、天使の見た目は大きく、均整がとれている。恐ろしい夢を見た場合は、「イーサーとムーサーとイブラーヒームの主よ、私が見たことの害悪からお守りください」と言いなさい。至高なるアッラーが害悪をその者から遠ざけてくださる。

夢の驚異についてはこの程度で十分であろう。次に、死について述べていこう。

223）テキストでは ‘ḌYF となっているが、誤りであろう。アフィーフ・ブン・アル＝ハーリスはムハンマドの教友の１人である［al-‘Asqalānī, *al-Iṣāba*, vol. 5, pp. 276–277］。

224）イブン・サァドの『偉人伝』に同様の内容の伝承が記されている。またアブドゥッラー・ブン・アーイズは預言者の教友であり、シリアで没した［Ibn Sa‘d, *al-Ṭabaqāt al-kubrā*, vol. 7, p. 291］。

［第９章］ 死と、肉体からの霊魂の分離について

預言者——彼に平安あれ——のいわく、「眠りは死の兄弟である。」

知れ。死は来世の門である。あらゆる生きものは、この門を通ることを強いられる。いかなる学者も王も死に抗うことはできなかった。すべての知識を手に入れたところで、死に対処するには非力であった。死に直面して、なぜこの力（生命力）が失われていくのか、その対処法が何であるのかは彼らにもわからない。「死後のこと（mā ba‘d al-mawt）」については、預言者たち——**彼らに平安あれ**——が伝えてきたことや夢で見たことを除くと、誰も何も知らされていない。

ところで、ムスリムと不信仰者を１つの場所に埋葬した場合、表面上は両者ともに変質し、腐る。両者の墓を開くと、［一方（ムスリム）が］これほど安らいでおり、［他方（不信仰者）が］あれほど苦しんでいるとは見えない。なぜなら、それは不可視だからである。もしこのことが一目瞭然であったならば、誰も不信仰者とはならなかったであろう。

［逸話］

マーリク・ブン・ディーナール（Mālik b. Dīnār）[225]は言った。「私は、夢でハサンを見て、『おお、ブー・サイード（ハサン）よ、あなたは死者ではないのですか？』と言った。彼は、『そうだ。だが、あらゆる悲しみが取り除かれた』と言った。私は、『私に何かおっしゃりたいのですか？』と言った。彼は『現世において悲しみの多い者は、来世において喜びが多い』と言った。」

（p. 477）＜逸話＞

〔ある者が〕サフル・ブン・マーリク（Sahl b. Mālik）[226]を夢で見た。彼は［サフルに向かって］「あなたの状況はいかがです？」と言った。［サフルは］「**多くの罪ゆえに私はアッラーの御許へ到った。だが至高なるアッラーに対する良き思いが、私からそれらの罪を拭い去ってくれた。**」

私は、ある病気の王のもとへ連れて行かれたことがあった。彼の前には黄金の壺や大皿が置かれていた。彼の腹は炎症で腫れていた。彼は私に「祈念せよ」と言った。私は言った。「はい。［ですが］ここにあるこれらすべての財産は、あなたにとって何の役に立つというのですか。なぜ喜捨として与えないのです？」

彼は、「たくさん与えたのだ。だが、益はなかった」と言った。

私は言った。「あちらの世界で益があるのです。」

私が戻って数日後に、彼は亡くなった。私は夢で彼を見た。彼は手で口を押さえて息を止めながら言った。「私が［手を］放せば、［最後に］残ったひと息が抜けてしまう。」

私は言った。「何が望みですか？」

彼は言った。「おまえの言ったことを私は望む。あれらすべての黄金と装飾品は、貧しき者たちのポケットの中に、そして孤児たちの袂の中にあるべきだったのだ。」

225）バスラの著名な説教師（744/5 もしくは 747/8 年没）。アナス・ブン・マーリクやイブン・スィーリーン、ハサン・バスリーらのもとで伝承学やスーフィズムを学んだ。禁欲的な生活を送っていたことで知られ、後世の人々は彼が奇跡を起こす能力を有していたと考えた［*EI*²: Mālik b. Dīnār］。この話の中で彼が夢で見た「ハサン」は、「某の父」を示すクンヤが一致するので、おそらく彼の師であったハサン・バスリーのことであろう。

226）100 歳近く生き、「メディナで亡くなった最後の教友」とも呼ばれる Sahl b. Sa‘d b. Mālik（706/7 あるいは 709/10 年没）のことか。

知れ。死の苦痛や苦しみの様態は多様である。預言者――**彼に平安あれ**――は臨終の際に、手を水の中に浸け、胸の上に置いて、「**神よ、我が死の苦しみを和らげたまえ**」と言い続けた。［死の苦しみが］厄介で、数日間そのまま続く、ということもあり得る。私が聞いたところでは、ある若者は 10 日間、断末魔の状態にあった。彼は手を伸ばしては、足をばたつかせていた。一方で、［死の苦しみが］軽い場合もある。とりわけ殉教者の場合はそうである。

私が見たヒンド人の少女は、死の際にあった。彼女は私に、「ヤー・スィーン［章］を詠んで」と言った。私はヤー・スィーン章を詠んだ。彼女は、「大きな声で詠んで。もし私が眠ってしまったら、起こしてちょうだい」と言った。さらには、「私が眠っていたら、揺さぶってちょうだい」と言った。私が彼女に手を差し出して触れると、彼女は息を引き取った後だった。この話の意図は、彼女の臨終はこれほどまでに［あっけなく］簡単であった、ということである。

また、私の父には、ウンマ・アル＝ワッハーブ（Umma al-Wahhāb）という名の母親がいた。彼女は 40 年間断食を行い、（p. 478）肉を食べなかった。彼女が臨終の状態に陥った。数人の女が彼女のそばに座っていた。誰かが家の扉を叩いた。女たちは「ファーティマ・ザフラー様だわ」と言った。ウンマ・アル＝ワッハーブは「私の手を引いてちょうだい」と言った。女たちは彼女を抱き起こし、廊下へと連れていった。［その瞬間］彼女はうつぶせに倒れた。すでに息を引き取った後だった。彼女にはいかなる死の苦しみもなかった。

知れ。健やかな死は［神からの］お恵みである。現世の災厄にあまりにも見舞われてしまい、死が売られているならば金で買う、という輩もいる。

＜逸話＞

次のように言われる。ある人物が、「ヒンドゥスターンの地では寿命が長い」ということを聞いた。彼（話し手）はその願いからヒンドゥスターンへ向かった。［ヒンドの］男が彼に尋ねた。「これほどまでの境域におまえは何しに来たのか？」

彼は言った。「わたしは財産ならいくらでもある。長寿を求めているのだ。」

男は「おまえにあるものを見せよう」と言い、彼をある家の中へ連れて行き、ある人物を彼に見せた。その者はベッドに横たわり、糞尿を垂れ流していた。それをきれいにし、食事を喉に通させると、男は「これは私の父だ」と言った。それから彼を別の家の中へと連れて行った。目も見えず耳も聞こえず、鉢の底に［顔を］突っ込んでいる人物がいた。鉢を彼の顔から離し、少しの小麦がゆ（ārdāb）をその喉に通すと、男は「これは私の祖父だ」と言った。それから彼をまた別の家の中へと連れて行った。横たわり、顔に布がかけられている男がいた。「これ（顔）を見ることはできない。これは私の祖父の祖父だ。私は毎日、布を頭にかけてやるのだ。猫やネズミが彼をひっかかないように」と言った。

私（話し手）は言った。「おお御仁よ、わたしにはこの人々を見るのは耐えられない。」

［ヒンドの］男は言った。「知れ。私は裕福な者だから、この父祖たちを世話している。他の者たちは父親や祖父を一画に運んで、そこに放置する。」

男は私をその一画へと連れていった。そこには何千もの男や女が横たわっていた。ある者はうつぶせに倒れ、ある者は仰向けに倒れていた。ものすごい悪臭が立ち込めていた。［ヒンドの男は］言った。「これは貧しい者たちだ。彼らの世話をする者はおらず、この場所に置き去りにされてしまう。［だが］食事が手に入ろうと入らなかろうと、彼らはやっていける。彼らは寿命が長いからだ。」

かの者（話し手）は言う。「私はこれを目にしたとき、『わたしには長寿は必要ない』と言った。」
こうして彼は出立し、自分の国に帰った。

この話の意図は次のとおりである。人間の寿命は、長くても（p. 479）「60 歳から 70 歳の間」である。その間は「厄難の 10 年間（ʻašara al-mayšūma）」と呼ばれる。人は 70 歳未満で死亡するが、もしさらに生き続けると、刻一刻と死よりも悪い状態になる。人間とは、たとえるなら、紐に通された連なるガラス玉である。この紐がしっかりとつながっている限りは、首飾りは整い列をなしている。だがこの紐が引き抜かれると、ガラス玉はばらばらに散ってしまう。同様に、人間の霊魂は、人間の体の中にあって取りまとめ役であり、要である。魂が出て行くと、体の各部位はばらばらになる。これが型なき魂の特徴である。

＜現世とその欠点について＞

知れ。気まぐれな現世の欠点は語り尽くせぬほどある。［現世は］自分勝手ですぐに欺く。友人たちの敵であり、敵たちの敵である。自身の友と合わそうとはせず、敵とも合わそうとはしない。それをたとえるならば、毎日毎夜、別の場所にいる悪しき女のようなものである。誰かを欺いては、その男を愛していると見せかけ、やがて男が彼女に心のすべてを捧げるようになると、突然男を見捨て、別の場所に行ってしまう。**現世は傷つけ、見捨て、そして立ち去る**。要するに、現世とは致死性の毒であり、そなたが見ているのはすべてが猛毒なのである。現世のもののうちで最良なのは水であるが、水も大量だと致命的となる。**「現世は壁も木々もすり抜ける悪臭であり、鼻つまみもののそれ（悪臭）を喜んで拡散させ、毒あるそれを味わわせる」と言われている**。もし人が 40 日間も酢入りスープ（sikbā）を食べ続けると、そのせいで死んでしまう。もし長期間にわたって肉汁スープを食べ続けると、そのせいで死んでしまう。ある期間、蜂蜜を食べ続けると、死んでしまう。言うならば、おいしさの源であってもそれは同時に毒でもある。現世は、外見は美しく見える。それは、毒がその中に隠されている甘菓子の表層のようなものである。あるいは、ごみ溜めの上にある青菜のようなもので、その表面は緑に見えるが、その内側は汚濁のために腐っている。

＜逸話＞

公正なるヌーシラヴァーンがある夜、次のような夢を見た。黄金の椀で食事をしていると、（p. 480）黒い蛇が皿から［食べ物を］ひと口ずつ取っては、食べていたのである。夢占い師たちに夢の解釈について尋ねたところ、彼らは言った。「1 人の黒人の男があなたの妻と密通しています」と。ヌーシラヴァーンがこの件を調査してみると、はたしてその通りであった。彼はヒンド人［の間男］を捕らえて殺し、妻を生皮の中に入れて縫いつける刑に処した。［妻は］しばらくの間、この責苦の状態にあった。この妻は「私の状況に注意を向けてください」と、ボゾルグメフル[227]に人を遣った。ボゾルグメフルは［香草の］メボウキ（šāhsafaram）を汚物の中に植え、葉が茂ると、それを贈り物としてヌーシラヴァーンに送った。ヌーシラヴァーンは驚いて、ボゾルグメフルに言った。「茎を何本か折り取ってみよ。」

彼は茎を何本か折って、匂いを嗅がせた。茎から悪臭が立ち上ったので、［ヌーシラヴァーンは茎を］放り捨てた。［ボゾルグメフルは］言った。「現世と女をたとえるならば、さながらこのメボウキのようなものです。外見は青くとも、その内面は腐っています。と言いますのも、もし誰かが

227）ヌーシラヴァーンの名宰相として名高い人物［本訳注（1）、211 頁、注 13］。

夢の中で年老いた女を見たならば、それは現世のことだと解釈されます。何となれば現世は年老いておりますから。また老女は悪臭を放ち、現世も悪臭を放ちます。」
その後、ヌーシラヴァーンはこの妻を外に出してやった。

知れ。現世とは塩辛い水のようなものである。飲めば飲むほど、一層喉が渇く。考えてもみよ。双角の所有者は全世界を征服し、［それに飽き足らず］「闇の世界」を目指した。ニムルードは全世界を征服し、［さらに］天上を目指した[228]。

双角の所有者はこの世を去るとき、こう言った。「私の死後は、私が手にしている書き付けに何とあるのかを言った者が後継者である。」
彼が世を去り、彼を納めた棺が持ち上げられたとき、片腕が棺からはみ出した。手には 1 枚の書き付けが握りしめられていた。10 万人の戦士、商人、学者がその場に居合わせていた。誰もが「一体何と書かれているのか」と言い合ったが、やがて人々の中から 1 人が次のように言った。「この書き付けにはこう書かれているのだ。『おおアーダムの子らよ。私は全世界を手にし、ゴグとマゴグの通り道を塞いだ。闇の世界に行き、雲にも乗った。ダーラー・ブン・ダーラーを殺し、全世界を制圧した。もし死に対して軍で応えることができたならば、ここにその軍も武器も勇敢な男たちもいる。もし財と知識で応えることができたならば、ここにあるのはいくつもの宝庫であり、何人もの学識者や法学者だ。［だが］私は今や現世を去った。いかなるものも私の役には立たなかった』と。」
その男が（p. 481）この言葉を口にすると、その書き付けは［双角の所有者の］手から落ちて、腕は経帷子の中に戻った。

知れ。現世や現世の中にあるものはすべて不幸の源である。そなたが目にするものはすべて厄難の原因である。［現世が］もしなかったならば、人にとってはさらに良かったであろう。

＜逸話＞
次のように伝えられている。ある帝王がメノウでできた酒杯を手に入れた。彼はその酒杯のことで喜んだ。ある賢人にそれを見せると、賢人は言った。「それはすばらしい。ですが、悲しみの原因でもあります」と。ある日［王は］酒杯を落としてしまい、酒杯は割れた。帝王は悲嘆にくれて言った。「この酒杯がなければ、私がこれほど悲しみにくれる必要など絶対になかったのに。」

知れ。そなたが現世で目にし、所有するものは何であれ、そなたから奪い取られるか、もしくはそのせいでそなたが奪い取られるかであり、すべては不幸や別離のもとである。人が現世と折り合いをつけ、現世に親しむほどに、現世は人に一層冷たくする[229]。考えれば考えるほど、現世は子供たちの遊びに似ていると私は思う。すなわち、［子供たちは］陶片を金に見立てて袂に貯めこみ、互いに張り合う。［しかし］夕飯時になると母親がやってきて、子供たちを家に連れて帰り、その

228）本文中の「天上を目指した」という記述は、『創世記』第 11 章のバベルの塔の話に由来するものであろう。バベルの塔とニムロド（ニムルード）を関連づける話を、1 世紀のフラウィウス・ヨセフスが述べている［林剛平訳『ユダヤ古代誌』ちくま学芸文庫、1999 年、I 巻 56–57 頁］。

229）Ma 写本およびサーデギー校訂本の nā sāzigārī（不調和）に従って訳出する。テキストでは sāzigārī（折り合い・調和）であり、「現世は人に一層優しくする」となる。この場合は、「優しくしてくれるが、最後には冷たく突き放す」という意味が言外に含まれるのだろう。

陶片を子供たちの袂から出して捨ててしまう。同様に、人は銀や金を集め、それが元で互いに反目しあうが、死に際してはすべてがその人から奪い取られる。死の天使が彼の耳を掴み、墓地へと連れて行ってしまうのである。

誰も現世の欺瞞にだまされることがないように、この程度のことを述べておこう。現世とは鬼(グール)のようなもので、人々を欺き、自らを良いもののように見せるが、その実、悪しきものなのである。

＜逸話＞

次のように言われている。ある町に1人の僧がおり、宿を建て、人々を客に呼びもてなしていた。人々は彼を気に入り、彼によくしてやっていた。だが彼は1人ずつ(p. 482)さらっては、殺して食べていたのである。ある日、彼は2人の姉妹を宿に連れ込んだ。1人をもてなし、1人を戸口に残した。その後、[もてなしていた]娘を別の建物へ連れて行き、首を引きちぎると、彼女を食べてしまった。妹はそれを目にして逃げ出し、父親に言った。「あの僧がお姉ちゃんを食べちゃった。」

[父親は]言った。「人が人をどうやって食べるっていうんだ？」

みなで姉を探したが、数日経っても見つからなかった。ある日、僧は彼女の父親が泣いているのを見た。[僧は]言った。「おまえの娘が私を人喰い鬼呼ばわりしているぞ。」

[父親は]言った。「あの子はまだ知恵のついていない子供です。ところで姉がいるのですが、姿を消してしまったのです。」

[僧は]言った。「もし私の宿を見たければ、見るがいい。そうすればおまえの疑いは晴れるだろう。」

[父親は]彼と一緒に〔宿に〕行き、別の建物を見つけた。[僧は]言った。「こちらの建物も見なさい。」

中に入ると、恐ろしげな部屋があり、人間の骨があった。引き返そうと後ずさりすると、鬼は両手を彼の背中に置いて、彼を建物の中に突き飛ばした。そして自らの正体である鬼の姿を露わにし、彼に言った。「おまえの頭を食ってやろうか。それとも足か。」

[父親は]言った。「好きにするがよい。おまえが私の娘を食べたというのにそれに気づきもせず、[あまつさえ]おまえについてきて、用心すらしなかった私への当然の報いだ。」

この逸話の意図は次のとおりである。現世は私の父や祖父を裏切った。誠実な者たちとも愛すべき者たちとも親密になることはなかった。人は現世の不誠実さを目にするが、[それでも]現世の愛情を[信じて]心に抱き、そして現世の欺瞞や策略やもてなしにだまされてしまう。これもまた愚かなことである。

さてこの後は、「現世の後は死であり、死の後は召喚(ba‘ṯ)と勘定(ḥisāb)と復活(ḥašr)である」ことについて記していこう。

＜召喚(ba‘ṯ)と復活(qiyāma)について――まことかのお方は真理である＞

知れ。現世の後には別の世があり、「勘定」と「復活」がある。アーダムの子らの種々の集団の中で無神論者やザンダカ主義者、そして「復活(qiyāmat wa ḥašr)」を信じない者より悪いものはない。なぜなら[そういった者は]、勘定があり、善行には良き報いがあり、(p. 483)悪行には責苦があ

るということを信じていないからであり、善を行うことも悪から手を引くこともしない。もし無神論者の言うとおりであったならば、必然的に世界の礎には何ら［神の］英知がない上、ある者が圧制や暴虐を常としておきながら、それが善行や正義をなす者と等しくなってしまうではないか。

毎年「復活」の徴が現れるのを目にしておきながら、なぜ「復活」を否定するのか。死んでいた世界や乾いた大地が春の微風や雨によって生き返り、死んでいた虫たちがみな生き返る。10 万もの鳥やイナゴやハエや獣は、冬にはまったく姿を見せないというのに、春になると現れる。木々や果実や花々や蕾は、乾いた土や枯れた枝から現れる。死んでいた土の下で動くことなく死んでいたその種に、創造主が生命を与えられると、ひと粒の種から 500 粒もの水気のある種が生じるのである。毎日新たな「復活」があり、毎夜新たな「死」があることに、なぜ思いを馳せないのか。夜にはあらゆるものが死者の性質を帯び、話すことも聞くことも動くこともない。だが昼になると動き出し、見たり話したりするようになる。これこそは「復活」の序章なのである。

＜逸話＞

次のように言われている。あるザンダカ主義者がマッカ巡礼の旅に出た。彼はクーファの町で 1 人の女に預け物をした。［巡礼から］戻り、女に「私が預けたものを返してくれ」と言った。女は「なぜ返さなければならないのですか」と言った。［ザンダカ主義者が］「信頼に報いよ」と言うと、女は言った。「なぜ報いなければならないのですか。あなたはいつも口にしているではないですか。『復活などありはしない。報いも責苦もない』と。報いがないならどうして善行をするのです？責苦がないなら、どうして悪事を働いてはいけないのですか？」

ザンダカ主義者は言った。「おまえの言うとおりだ。私は［今ここで］ムスリムになった。善行には報いが、悪行には責苦があることを信じるようになった。」

知れ。人は、善行に対して良き報いをお与えになる神こそが拠りどころであると知ったとき、その者から善行が生まれるのである。「復活」については、知性ある者たちにはこの程度で十分であろう。